山梨県埋蔵文化財センター調査報告第189集

立石下遺跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001・3

山梨県教育委員会
国土交通省甲府工事事務所
日本道路公団東京建設局

立石下遺跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

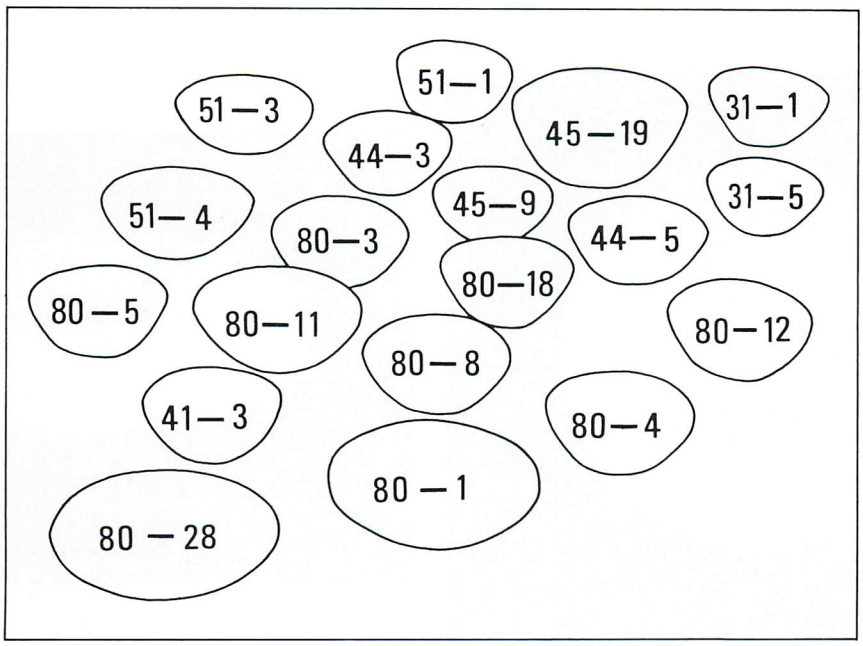
2001・3

山梨県教育委員会
国土交通省甲府工事事務所
日本道路公団東京建設局

立石下遺跡遠景（南から）

立石下遺跡遠景（北から）

立石下遺跡 2 区出土土器



前段の数字は本文中の図面番号で後段は土器番号を示す

立石下遺跡 2 区 7 号住居跡出土奈良三彩

（参考資料）韮崎市宮ノ前遺跡出土奈良三彩

序

本書は山梨県埋蔵文化財センターが平成11年度に発掘調査を実施した立石下遺跡の発掘調査報告書であります。この調査は日本道路公団による中部横断自動車道建設工事および国土交通省甲府工事事務所による一般国道52号改築工事に伴うものであります。遺跡は、甲府盆地西部の山梨県中巨摩郡八田村立石下に所在し、国内でも最大規模といわれる御勅使川の大扇状地に位置しております。この八田村周辺は従来遺跡の所在が薄い地域と考えられていましたが、近年の発掘調査により遺跡の実態が明らかになってきました。平成７年度に調査された大塚遺跡や平成９年度と10年度に調査された石橋北屋敷遺跡などから、この地域にも古墳時代、平安時代そして中世と集落が形成されていたことが判明したのであります。

以上のような成果は、八田村を中心とする御勅使川扇状地における古代・中世の遺跡立地についての従来の考え方を大きく変化させることとなりました。そうした中で、今回の立石下遺跡の調査では、県内でも二例目という奈良三彩が平安時代の住居跡から発見され注目を集めました。この地域には、古代では余戸郷の存在が想定されており、畿内において祭祀用の陶器として生産使用された奈良三彩が、当時としては辺境にあたる甲斐国の一地方で果たして如何なる意味を有していたのか、非常に興味深い問題と言えるでありましょう。今後、この報告書の成果が多くの方々の研究の一助になれば幸甚であります。

末筆ながら、種々の御協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2001年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　大塚初重

例　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡八田村野牛島立石下に所在する立石下遺跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は、一般国道52号(甲西道路)改築工事および中部横断自動車道建設工事に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省および日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3．本書の編集は米田明訓(県埋蔵文化財センター副主幹文化財主事)が行った。なお、執筆分担は以下のとおりである。
　第２章 ・・・・・・・・・・・・・ 斉藤　伸(県埋蔵文化財センター副主査文化財主事)
　第３章および第５章第１節 ・・・ 田口明子(県埋蔵文化財センター主任文化財主事)
　第５章第３節 ・・・・・・・・・ 保坂康夫(県埋蔵文化財センター主査文化財主事)
　上記以外　米田明訓
4．本報告書に係わる出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

凡例

1．遺構断面図の数値表示は基準線の標高を示している。
2．土器図面の中でスクリーントーンを添付しているものは、黒色の範囲を示している。
3．土器図面の断面図が黒塗りのものは、須恵器・陶器を示している。

目　次

序

例言・凡例

第１章　調査の経緯と概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　発掘調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第２章　地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
　第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第３章　１区で発見された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第１節　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第２節　住居跡と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　第３節　掘立柱建物跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　第４節　柱列 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第５節　土坑(炭焼き窯跡) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第６節　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第７節　溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
　第８節　遺構外出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

第４章　２区で発見された遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　第１節　住居跡と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
　第２節　掘立柱建物跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
　第３節　炭焼き窯跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
　第４節　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
　第５節　溝状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
　第６節　その他の遺構と出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

第５章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
　第１節　立石下遺跡１区について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
　第２節　立石下遺跡２区第２面出土の弥生時代石器 ・・・・・・・・・・・・ 52
　第３節　立石下遺跡における平安期の概観 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
　第４節　多彩釉陶器の意義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

２区出土土器一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

２区土坑一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

付編　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

第１章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

一般国道52号は、静岡県清水市から山梨県韮崎市まで、太平洋側と長野県・新潟県方面を結ぶ重要な幹線道路である。しかし甲府盆地より南側の富士川に沿って進む箇所は、道幅が狭いうえにカーブが極めて多く高低差も激しい。また年間をとおして豪雨等による土砂崩れの恐れがある危険個所が数多く存在し、実際に通行止めとなることが少なくない。また、輸送における幹線道路であるにもかかわらず幾つもの商店街や住宅地の中心を走る箇所も多く、大型自動車等の頻繁な通行は周辺住民やその家屋にも少なからず影響を与えているのが実状である。そのため商店街や住宅地を避けて安全で円滑な通行を確保するバイパス建設が計画されることとなった。

まず、中巨摩郡白根町在家塚から南巨摩郡増穂町大椚間の全長８kmにわたる建設工事が着工されることとなり、山梨県埋蔵文化財センターでは、この区間内の試掘調査を平成元年度から実施して10箇所の遺跡を確認した。これらの遺跡については発掘調査も終了しており、発掘調査報告書も既に刊行されている。その他、増穂町大椚より南側では３遺跡が確認され発掘調査が実施されている。中巨摩郡白根町から八田村までの区間の試掘調査は平成８～10年度まで実施され、６箇所の遺跡が確認された。本遺跡は、そのうちの一つであり、平成10年度に試掘調査で発見され、平成11年度に発掘調査が実施された。

第２節　発掘調査の概要

(1)　発掘調査の経過

立石下遺跡は発掘調査実施上の都合で北側の１区と南側の２区の二つの地区に分けた。１区の調査期間は平成11年４月28日～同年７月31日、２区の調査期間は平成11年４月28日～同年12月22日である。全体の調査面積は14100㎡で、１区と２区との境には東西に走る大きな用水路が存在している。(第２図)

遺跡周囲には水田が存在し、降水量が多いときは、遺跡全体が度々完全に水没する悪条件下での発掘調査となった。このためにやむを得ず調査区周囲に排水用の溝を巡らせて最も低い場所に釜場を設け排水用のポンプを設置し、常時排水できる態勢を整えておいた。

遺跡の調査にあたっては、表土から遺構確認面直上までの土は重機により除去した。その面で５ｍメッシュのグリッドを遺跡全体１区・２区をとおして設定し、その後、人力により精査作業を実施し遺構のプラン確認を行った。この確認面は平安時代以降の遺構にかかる面であるが、２区の中央部分では平成10年度に実施された試掘調査の段階で、平安時代の土層下30cmほどの所で弥生時代中期の土器片数片が出土しており、同時期の包含層の存在が明らかになっていた。そのため２区の中央部分約3000㎡については平安時代の面の調査終了後に、再度重機の利用により土を除去し、弥生時代の包含層の調査を行った。

発掘調査終了後、平成12年１月～３月まで基礎的な整理作業を実施し、翌平成12年度４月から本格的整理を実施して報告書を作成した。

(2)　調査機関・協力者等

調査主体　　山梨県教育委員会
調査機関　　山梨県埋蔵文化財センター

１区調査担当者　望月郁也(県埋蔵文化財センター主査文化財主事)
　　田口明子(県埋蔵文化財センター主任文化財主事)

２区調査担当者　米田明訓(県埋蔵文化財センター副主幹文化財主事)
熊谷栄二(県埋蔵文化財センター主任文化財主事)

１区発掘調査作業員・整理員

秋山昭二、飯野美保、石井関造、井上九二男、井上正子、尾形千春、小田切希世巳、笠井みどり、笠井由香、笠井由美、葛生真浩、坂本公彦、清水　清、仙洞田しずえ、田鹿兼章、立川なつじ、早川紀子、松野充延、望月里子、柳沢徳則、山主直子、新津多恵、土井みさほ

２区発掘作業員

有泉千恵、今津武男、遠藤實雄、大法正悟、大森権蔵、小野一光、小野幸江、金子　綾、川住たまみ、河住照雄、河住　博、河住ふさ子、切刀とよ子、切刀正彦、越石　力、小林文造、小林素子、斉藤玲子、斉藤幸子、佐久間等、桜井理恵、清水一郎、清水正宏、志村むつみ、志村　博、中込幹一、中込琢也、中込二三子、中込みち子、中込みつえ、中村広勇、二宮明雄、根津育美、羽中田弘、原伊津子、原田みゆき、深沢照明、深沢徳子、穂坂美佐子、保延　勇、松野充延、望月泰司、望月治成、望月祐子、矢崎　舞

２区整理作業員

大法正悟、川住たまみ、越石　力、斉藤玲子、志村むつみ、中込幹一、中込二三子、中込みち子、中込みつえ、松野充延、望月祐子

２区遺物写真撮影　塚原明生(日本写真家協会)

発掘調査から整理作業にあたっては以下の方々より多大な御助言、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)

巽淳一郎(奈良国立文化財研究所)、井上喜久男(愛知県陶磁資料館)、山下孝司(韮崎市教育委員会)、斉藤秀樹(八田村教育委員会)、平野修(帝京大学山梨文化財研究所)

第２章　地理的環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

立石下遺跡は、山梨県中巨摩郡八田村野牛島字立石下2586－１外に存在し、甲府盆地西縁に位置している。標高は約335ｍを測る。甲府盆地はその地理的位置によって、峡西・峡北・峡中・峡東などといわれ、そのうち峡西といわれる地域は釜無川以西を指し、通称「にしごおり」(西郡)とも呼ばれている。八田村はこの「にしごおり」の北端に位置し、人口は2000年１月１日現在で7083名を数え、東西は４㎞・南北は3.5㎞の町域で面積が8.04k㎡の規模の村である。村の南方と西方は白根町に隣接し、東方は釜無川をへだてて竜王町に接し、北方は御勅使川をへだてて韮崎市と双葉町に接している。村内には国道52号が南北に通じ、県道竜王・芦安線が東西に走っている。

村の沿革は、明治８年(1875年)に六科村・野牛島村・上高砂村の三村が合併し御影村となり、下高砂村・徳永村・榎原村が田之岡村となった。この御影村と田之岡村が昭和31年(1956年)に対等合併して八田村となった。村名の「八田」は、往昔の「八田庄」に由来するものである。

産業は近世までは米を至上作物とし、江戸時代の年貢米の石高は巨摩郡随一であった。明治以後、綿・たばこ・桑などが栽培された。昭和40年代までは養蚕が盛んで、農業収入の一位を占めていたが、「地方病」の撲滅対策も加わり畑作への転換が奨励され、現在ではブドウ・桃・サクランボなどの大規模な果樹園地帯を形成し、出荷と観光が花形となっている。

村の西側は御勅使川扇状地に立ち、東側は釜無川氾濫原に立っている。立石下遺跡はこの御勅使川扇状地のほぼ扇央に位置している。御勅使川は芦安村唐松峠(標高1700ｍ)にその源を発し、嵐山・築山の間を流れて甲府盆地にでて、日本でも最大級の扇状地を形成し釜無川にそそいでいる。御勅使川が急流河川であることにくわえ、上流の地質が大変軟弱な櫛形山累層・桃の木累層のため、大量の土砂が浸食され下流へと押し流されたことによって広大な扇状地を形成するに至った。

この御勅使川は、往昔は村の中央を東流していたが約400年前、武田信玄が一連の治国政策のなかで、六科の西端に将棋の駒の頭のような楔形をした築堤を設け(将棋頭)、これをもって水流を前御勅使川と北御勅使川とに分け、釜無川の瀬を相殺して竜王高台へ急流を打ち付け治水をはかった、という伝承はあまりにも有名である。

この扇状地の扇端部では、地下にしみこんだ水が再び湧き出して、若草町の鏡中条・十日市場、甲西町の江原・鮎沢等と弧状に連なる湧泉列をなしている。この湧泉列から低位は極めて水の豊富な一帯となり、八田村のなかでは上高砂・下高砂地区の立つ釜無川氾濫原へ続いている。この氾濫原は水田経営を主体としてきた地域で、古来「田方」と呼ばれ釜無川沖積層の西端にあり扇状地砂層と交錯し、たび重なる水災に見舞われた。

一方、立石下遺跡の存在する、八田村のなかでは野牛島・六科・榎原の各地区が立つ扇状地の扇央部は、水に乏しい乾燥地帯で「原方」といわれ、桑畑や果樹園に利用されてきた。この近隣は、以前から「原七郷」と呼ばれ「原七郷は月夜でも焼ける」といわれるほど水に乏しい乾燥地で、かつ豪雨時には洪水におそわれる水田経営に不適切な地勢である。

この地域では堆積物は、ほとんど巨摩山地から流出した大小の砂礫と粘土である。この扇状地を形成した堆積物は極めて厚く、粘土と砂礫の互層から成り地表も粘土地帯・砂礫地帯が混在している。なお、前に記した八田村を東西に走る県道竜王・芦安線は、明治時代まで河川として扱われてきた、いわゆる「前御勅使川」と呼ばれるものであり、当時は水の流れは既に殆ど失われていたようであるが、この河川の南北に堤防が数多く残されていたらしい。現在は堤防の痕跡は全く見ることはできない。

以上のように、この地域の自然環境の特質は地域の生活・文化と密接な関係を示し、まさに地誌的な特徴をもっているといえるであろう。

第1図　立石下遺跡と周辺遺跡分布図(S＝1/5000)

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境(第１図)

立石下遺跡(1)は日本でも有数の扇状地上の中央部分に立地するため保水力がなく、水の乏しい常習旱魃地帯で恵まれた土地ではなかった。有名な徳島堰ができるまではもちろんのこと、できてからも水不足に苦しめられ水をもとめて人々が知恵をめぐらせてきた地域である。

徳島堰は、寛文４年(1664年)江戸幕府四代将軍家綱の時代に、幕府の許可を得た江戸の商人徳島兵左衛門俊正が、韮崎市円野町上円井の釜無川右岸から白根町まで堰をひく工事を着手したことにはじまる。その後工事は白根町の矢崎又右衛門に引き継がれ寛文７年(1667年)には曲輪田新田まで全長17㎞を通水し、寛文１０年(1670年)に完成した。しかし徳島堰は、堰のごく近くの村々を潤しただけに止まり原七郷などの地域では、依然として水不足の状態が続いていた。

いつでも好きなだけ水を飲むことのできる地域へ生まれ変わることができたのは、昭和35年(1960年)に完成し昭和57年(1982年)に「第三期拡張事業」が確定し給水人口４万人・一日最大配水量２万１千リットル・一人一日最大給水量525リットルを誇る野呂川水道の登場を待たねばならなかった。そのような理由で、立石下遺跡の立地する御勅使川扇状地にあっては、近年までは遺跡の非常に少ない地域という見方がなされていたことは否めない。しかし最近の調査によりさまざまな事実が確認されてきている。

まず本遺跡の存在する八田村には、縄文時代の土器や石器が採集された赤山遺跡(2)が以前から知られていた。その後平成７年度(1995年)に調査され、本遺跡の北80ｍのところに位置する大塚遺跡(3)では古墳時代の住居６軒・奈良時代から平安時代の住居33軒などが発見され、古くからこの地域に集落が形成されていたことを証明する重要な資料を提供した。

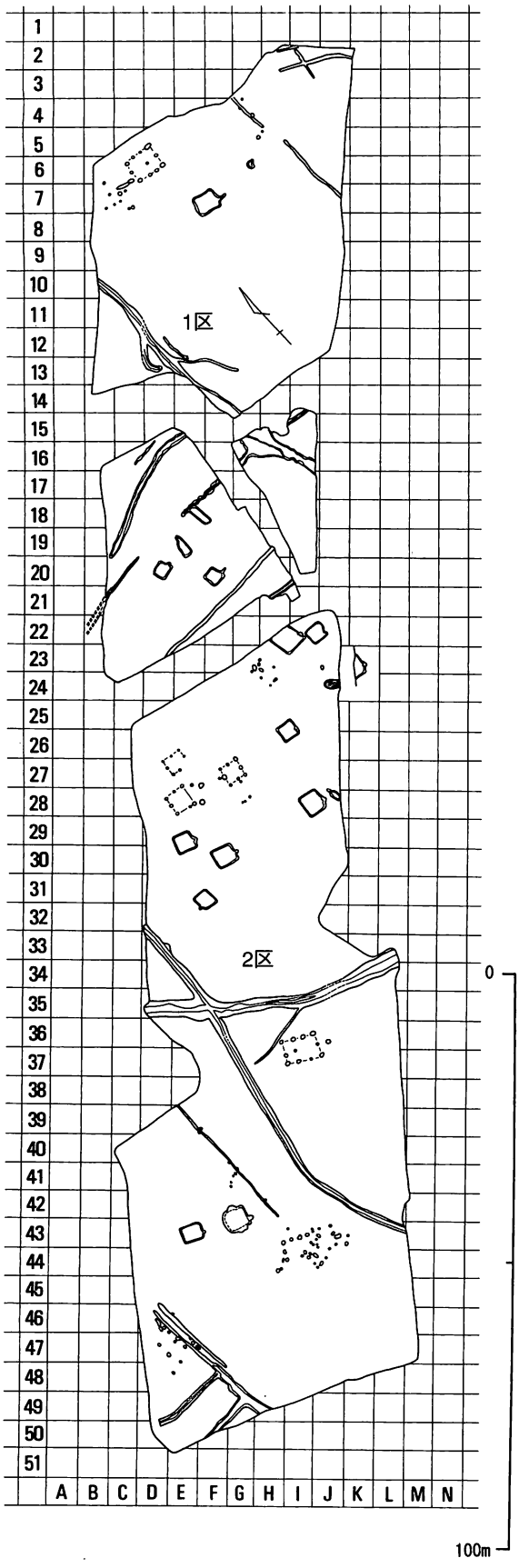
しかし、遺跡不毛の地と考えられていたこの御勅使川扇状地にも、実は多くの大小の遺跡が埋もれていることが明らかになってきたのは、何といっても甲西バイパス・中部横断道路の建設工事が契機となったことは間違いないものである。この大扇状地を南北に貫く道路の建設工事は平成５年度の試掘調査の開始に始まり、平成６年度より本格的な発掘調査が開始され、八田村から鰍沢町に至る路線の中で、かつて予想もできなかった数多くの重要な遺跡の存在を世に知らしめたのである。

八田村の中、本遺跡の北東30ｍに位置し平成10年度(1998年)に調査された石橋北屋敷遺跡(4)でも、奈良・平安時代の住居跡17軒・鎌倉から室町時代にかけての道路跡・戦国時代の区画溝や井戸や土坑墓10基などが発見され、奈良時代末から平安時代末(今から1200年前から800年前頃)まで長期的な居住活動が行われていたことが確認された。さらに石橋北屋敷遺跡に隣接する東へ一段下がった場所でも、平成11年度(1996年)に調査され、鎌倉時代から室町時代の田圃と畦の様子が確認された仲田遺跡(5)も立地している。なお、立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡、大塚遺跡の三つの遺跡に接した状況で平成11年度に八田村教育委員会が発掘調査した野牛島・大塚遺跡(16)でも平安時代の集落跡が発掘されている。

以上の立石下遺跡、石橋北屋敷遺跡、大塚遺跡、野牛島・大塚遺跡の４遺跡に展開する平安時代の住居跡群は、基本的には同一集落のものと考えて差し支えないものであろう。ここで注目すべき事実は、前御勅使川を挟み南北、つまり八田村側と白根町側で平安時代の集落分布に特徴的な相違点が存在することである。前御勅使川の北側に位置する八田村分では８世紀および９世紀前半の平安時代の集落遺跡しか確認されていないが、逆に前御勅使川南側に位置する白根町分では、百々遺跡に代表されるように９世紀末から10世紀、11世紀の平安時代の集落遺跡が発見されるているものの、８世紀代の遺構は皆無である。当時の御勅使川の位置がどの場所であったのかはまだ明確には解明されていないが、川の位置を挟んで集落の拠点移動が行われていた可能性があるかもしれない。

本遺跡と同じ御勅使川扇状地に位置する白根町の百々遺跡(6)では、まだ調査の途中ではあるものの平安時代(９世紀から11世紀)の大規模なムラのあとで、200軒近い住居跡(平成11年度現在)や多数の牛馬の骨・常滑焼・八稜鏡・石帯・鉄滓などが出土した。この百々遺跡の発掘により、県内指折りの規模をもち経済的にも政治的にも甲府盆地西部を代表する集落がこの地域に存在したと考えられるようになった。

八田村、白根町より更に南へ下り、御勅使川扇状地の扇端部にちかい櫛形町でも、平成６年度から８年度(1994年から1996年)に調査され、弥生時代中期の石器製作場跡と考えられる焼土群の周囲から、石器や土器片が多量に確認された十五所遺跡(7)が立地している。この十五所遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓群(18基)



第2図　立石下全体図(S＝1/1200)

が確認され、その中の１基からは墓坑と柱穴群がそしてこの時代の住居跡が10軒発掘された。また平成２年度から８年度(1990年～1996年)に調査され、十五所遺跡の南に隣接する村前東Ａ遺跡(8)では古墳時代前期の142軒の住居跡とともに甕・壺・高坏・器台が大量に出土し、また平安時代の64軒の住居跡も併せて確認されている。

御勅使川を越えた韮崎市では、築地遺跡(10)、羽根前遺跡(11)、長塚道下遺跡(12)が縄文～弥生時代の遺跡として知られており、甘利氏館跡の一部である大輪寺東遺跡(9)がある。

この他、御勅使川治水関連の施設として白根将棋頭(15)、竜岡将棋頭(14)、御座田遺跡(13)などが有名である。

以上のようにごく最近まで遺跡不毛の地と考えられていた御勅使川扇状地において、何世代にもわたった人々の生活の痕跡が、最近の発掘調査の結果明らかになってきている。

第３章　１区で発見された遺構と遺物

第１節　基本層序(第４図)

１区の調査前は、そのほとんどがブドウ棚で、一部水田と畑であった。東に向かって緩やかに傾斜している。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は重機で除去したが、第Ⅳ層の一部は人力で掘り下げた。層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　褐灰色土10YR4/1　明黄褐色土(6/8)少し含む=耕作土

第Ⅱ層　褐灰色土10YR4/1　明黄褐色土(6/8)多く含む=耕作土

第Ⅲ層　暗褐色土10YR3/4　褐灰色土(5/1)多く含む=Ⅱ層とⅣ層の混合土

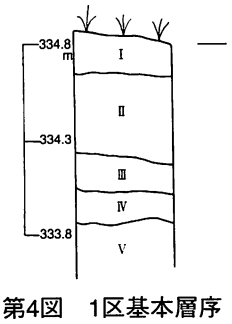
第Ⅳ層　暗褐色土10YR3/4　黒褐色土(3/2)・にぶい黄褐色土(5/4)・褐灰色土(5/1)ブロック少し含む=遺物包含層

第Ⅴ層　にぶい黄褐色土10YR4/3　褐灰色土(5/1)ブロック微量含む=上面が遺構確認面

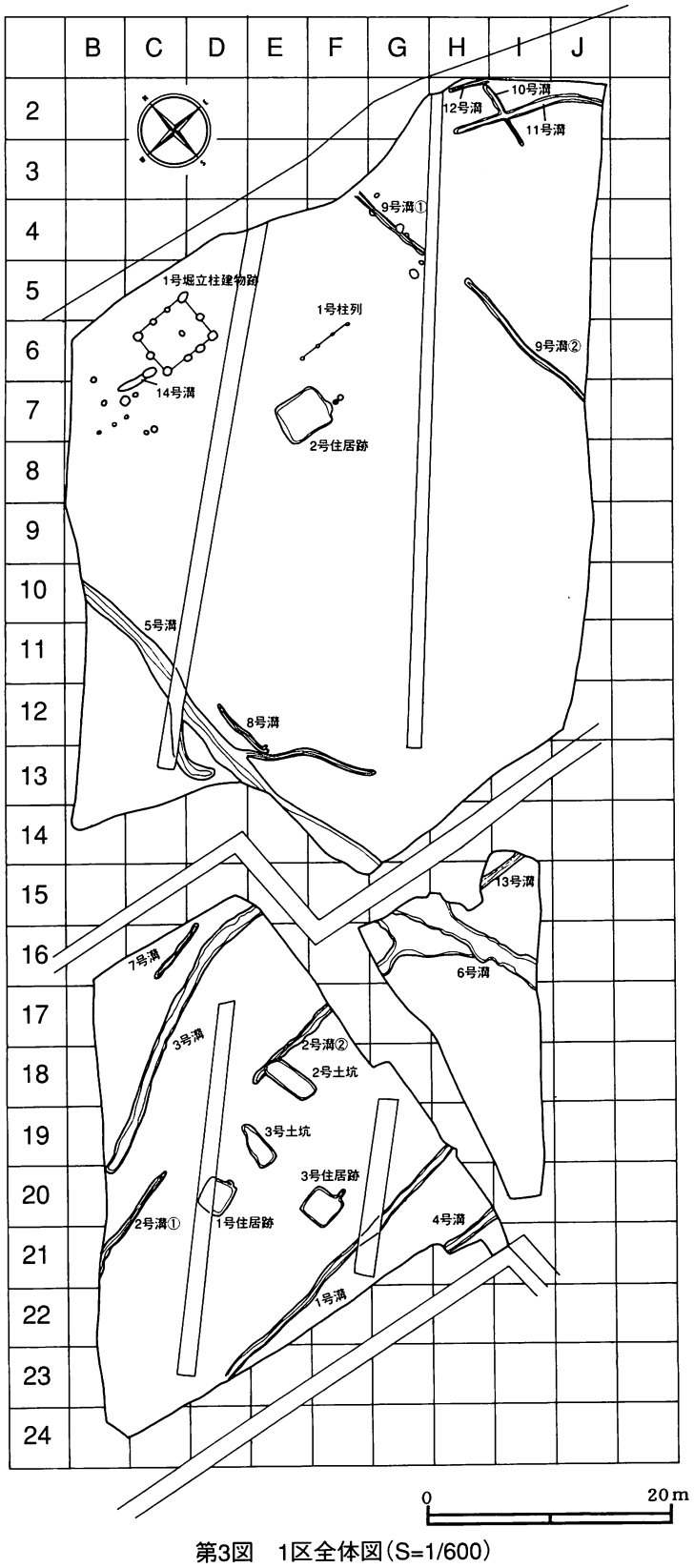
第２節　住居跡と出土遺物

(1) １号住居跡(第５～７図、図版３)

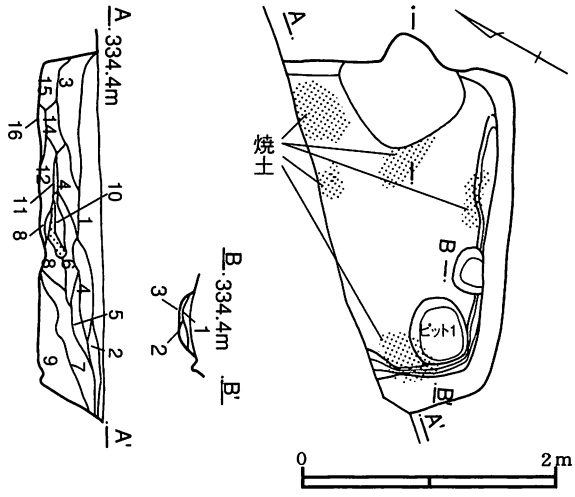
D-20グリッドに位置し、北側約半分が試掘トレンチに削られている。平面形は隅丸方形を呈すると思われる。東西2.7mで、壁高は0.5mを測り、東側はやや緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-68°-Eである。周溝は、南と西壁際に幅0.05～0.10m、深さ約0.05mで認められる。南壁際の周溝中央よりやや西寄りに周溝を切



第4図　1区基本層序



第3図　1区全体図(S=1/600)



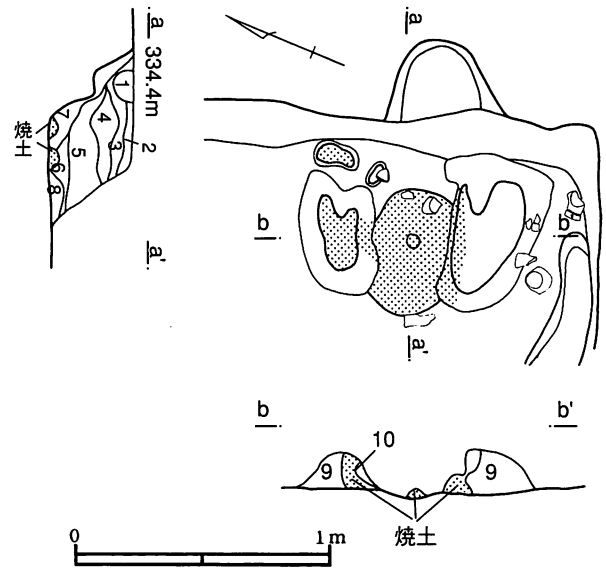
1号住居跡

1.暗褐色土　10YR3/3　しまりあり　粘性弱　径2～3mmの焼土・径5mmの炭化物少し含む
2.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　径1～5mmの焼土多く含む
径1～10mmの炭化物少し含む
3.黒褐色土　10YR3/2　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）・褐灰色土ブロック含む
径1～3mmの炭化物少し含む
4.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む　径1mmの炭化物含む
5.黒褐色土　10YR3/2　しまり・粘性あり　径2mmの焼土・炭化物少し含む
6.黒褐色土　10YR3/2　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む
褐灰色土（4/1）ブロック少し含む　径1～2mmの炭化物少し含む
7.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む
褐灰色土（4/1）ブロック少し含む　径1～3mmの焼土・炭化物若干含む
8.黒褐色土　10YR3/2　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む
径1～20mmの焼土少し含む
9.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む
径2～5mmの焼土少し含む　径1mmの炭化物若干含む
10.にぶい黄褐色土　10YR5/4　しまり・粘性あり　褐灰色土（4/1）ブロック少し含む
径1mmの焼土少し含む
11.褐色土　10YR4/4　しまり・粘性あり　ほとんど焼土　径1mmの炭化物少し含む
12.にぶい褐色土　10YR4/3　しまり・粘性あり　暗褐色土（3/3）・褐灰色土ブロック少し含む
径1～3mmの焼土含む　径1mmの炭化物若干含む
13.にぶい黄褐色土　10YR5/4　しまり・粘性あり　焼土を50%含む　径20mmの炭化物若干含む
14.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック多く含む
15.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック多く含む
黒褐色土（3/2）ブロック含む　径1～2mmの炭化物若干含む
16.暗褐色土　10YR3/3　しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む　焼土多く含む
径1mmの炭化物若干含む

1住ピット

1.にぶい黄褐色土　10YR4/3しまり・粘性あり　黒褐色土（3/2）多く含む　焼土多く含む　炭化物微量含む
2.にぶい黄褐色土　10YR4/3しまり・粘性あり　黒褐色土（3/2）少し含む　焼土・炭化物微量含む

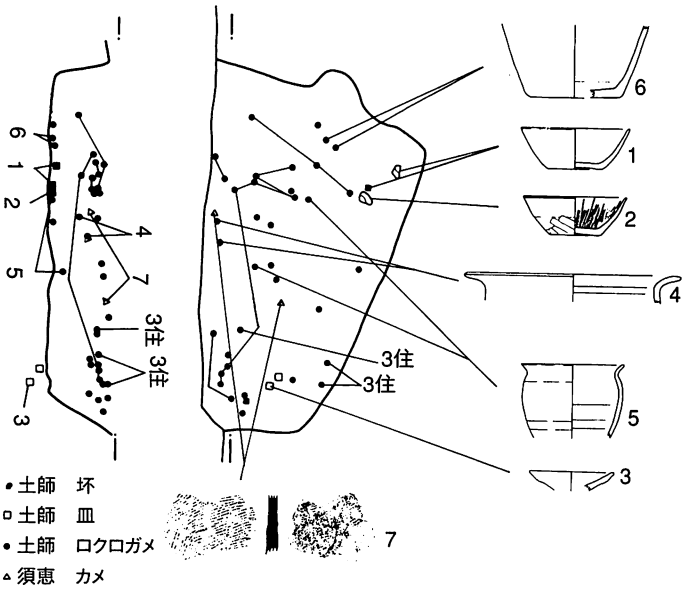
第5図　1区1号住居跡（S=1/60）



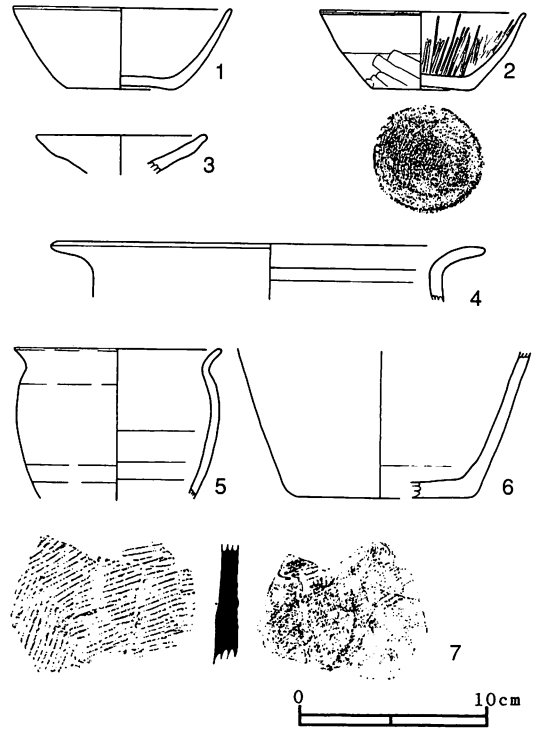
1住カマド

1.黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性あり　褐灰色土（4/1）ブロック50%含む
焼土粒微量含む
2.黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性あり　褐灰色土（4/1）ブロック少し含む
にぶい黄褐色土（5/4）ブロック多く含む　焼土粒微量含む
3.黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性あり　褐灰色土（4/1）ブロック少し含む
にぶい黄褐色（5/4）ブロック多く含む
径2～3mmの焼土少し含む
4.黒褐色土　10YR3/2　しまり強　粘性あり　褐灰色土（4/1）ブロック少し含む
にぶい黄褐色（5/4）ブロック少し含む　焼土粒微量含む
5.黒褐色土　10YR3/2　しまり・粘性あり　褐灰色土（4/1）所々多く含む
黄褐色土（5/6）50%含む　焼土粒微量含む
6.暗褐色土　10YR3/4　しまり・粘性あり
褐灰色土（4/1）・黄褐色土（5/6）多く含む
焼土ブロック含む
7.暗褐色土　10YR3/4　しまり・粘性あり
褐灰色土（4/1）・黄褐色土（5/6）少し含む
焼土ブロック多く含む
8.褐色土　10YR4/4　しまり強　粘性あり　径1～3mmの焼土多く含む
径5mmの炭化物含む
9.にぶい黄褐色土 10YR5/4　しまり強　粘性弱
10.にぶい黄褐色土 10YR5/4　しまり強　粘性弱　暗褐色土（3/3）ブロック含む
径5mmの焼土含む

第6図　1区1号住居跡カマド（S=1/30）



第7図　1区1号住居跡遺物出土状況

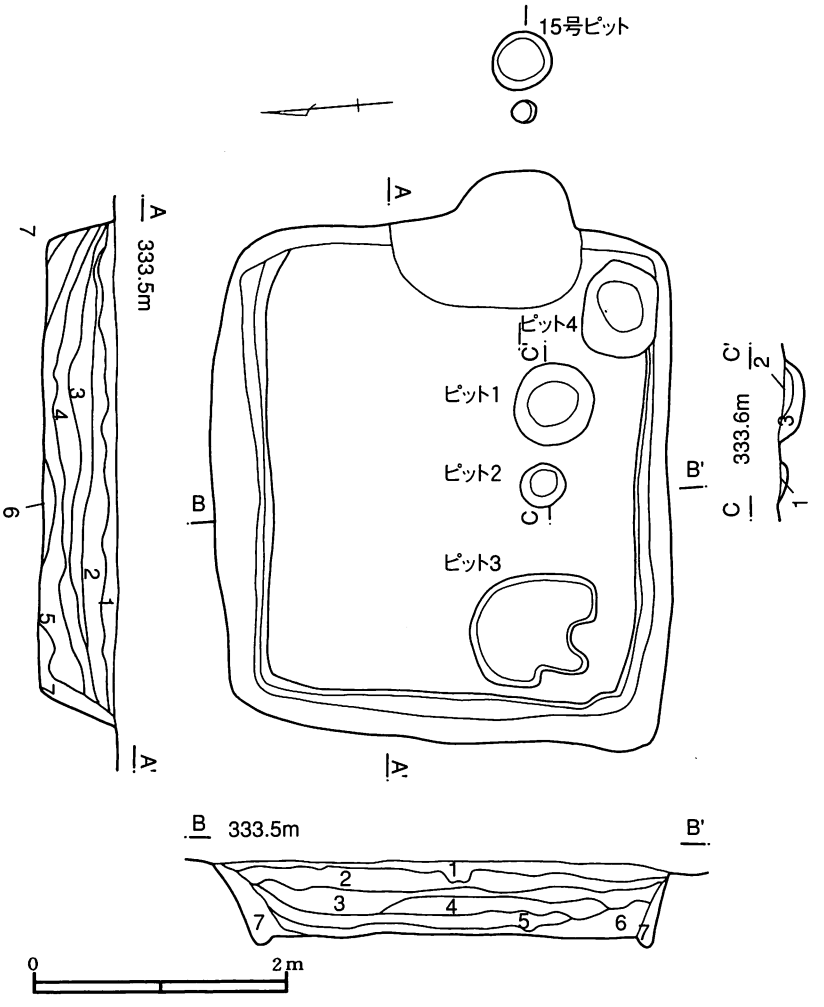


第8図　1区1号住居跡出土遺物

るように径約0.3m、深さ約0.1mの不整形をした掘り込みが確認された。覆土は焼土ブロックを多く含む。また、南西角には0.5×0.45mのやや長円形を呈したピットがあり、手捏土器片２点が出土した(第８図３)。ピットの深さは床面から15cmを測る。床面の硬化は認められない。五箇所で焼土ブロックの集中がみられた。西端の集中は床面より約0.4m上にあったが、他の集中はほぼ床面直上である。五箇所すべての下面に被熱の痕跡は認められない。カマドは粘土を主体に東壁の南寄りに設けられており、南北1.05m、東西0.95mの規模を測る。煙道は長さ0.3m、幅0.4mである。[遺物出土状況]垂直分布からは確認面より10～20cm下と、床面近くの２ヶ所に集中がみられる。床面に近い遺物はカマドの前面に集中する。

出土遺物　(第８図、図版６)

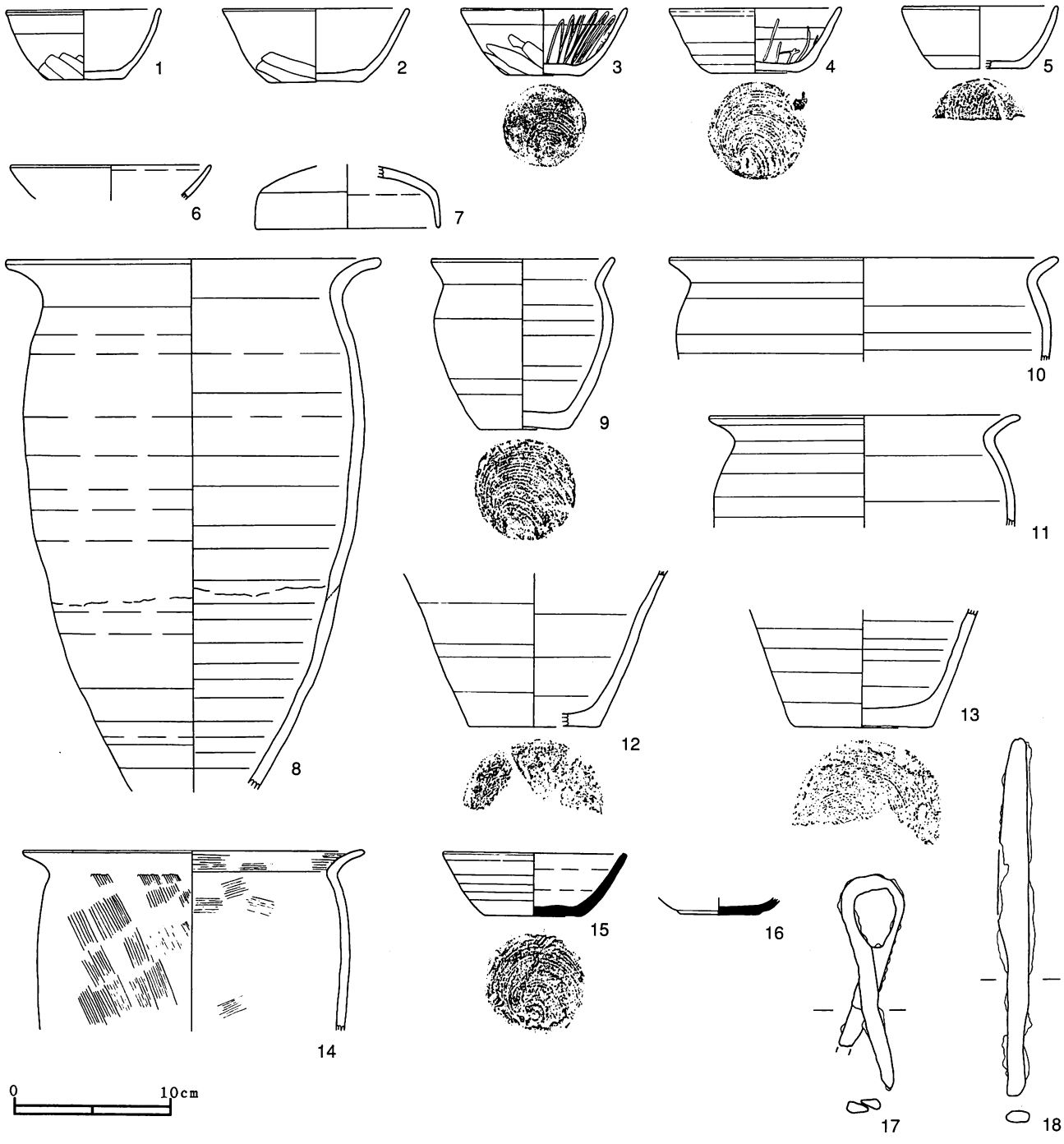
半分削平されているためか、約40片と少ない量である。その中で図示し得たものは７点である。１・２は土師器坏である。１は２分の１が残存。口径11.6cm、底径5.6cm、器高4.3cmで、橙色を呈し、胎土に赤色粒、石英を含む。内外面ともにロクロナデされている。２は３分の２が残存。口径11cm、底径5.5cm、器高4.1cmを測る。にぶい橙色を呈し、胎土は１と同じである。外面は体部下半に斜め方向のヘラケズリ、内面には放射状暗文が施されており、底面に回転糸切り痕を有す。３は手捏土器の口縁部破片で、口径９cmと推定される。にぶい黄橙色を呈し、胎土に赤色粒と小石を含む。外面に指頭痕が残る。４～６は土師器のロクロ整形甕の破片である。４は口縁部で、口径23cmと推定される。明赤褐色を呈し、胎土に石英を含む。５は口縁部で、口径11cmと推定される。明褐色を呈し、胎土に石英を含む。６は底部破片で、底径９cmと推定される。底面は回転糸切り後、周囲をヘラケズリしている。７は須恵器甕の胴部破片である。黄灰色を呈し、胎土に白・赤色粒、石英を含む。外面に擬格子目叩き、内面に平行叩き目が施されている。



第9図　1区2号住居跡(S=1/60)

(2) ２号住居跡(第９・11・12図、図版３)

E・F-７・８グリッドに位置する。東西２m、南北1.75mの隅丸長方形を呈する。壁高は0.6mで、立ち上がりは急である。主軸は、N-4°-Eの方向である。床面の硬化は認められない。カマドは東壁南寄りに粘土により構築されていたようだ。住居跡の覆土中には石がほとんどみられない。[遺物出土状況]１・２はカマドの南側袖際の床面直上から、３はピット１の覆土中より、４・７は住居の覆土中の上層部から出土し、特に７は３号

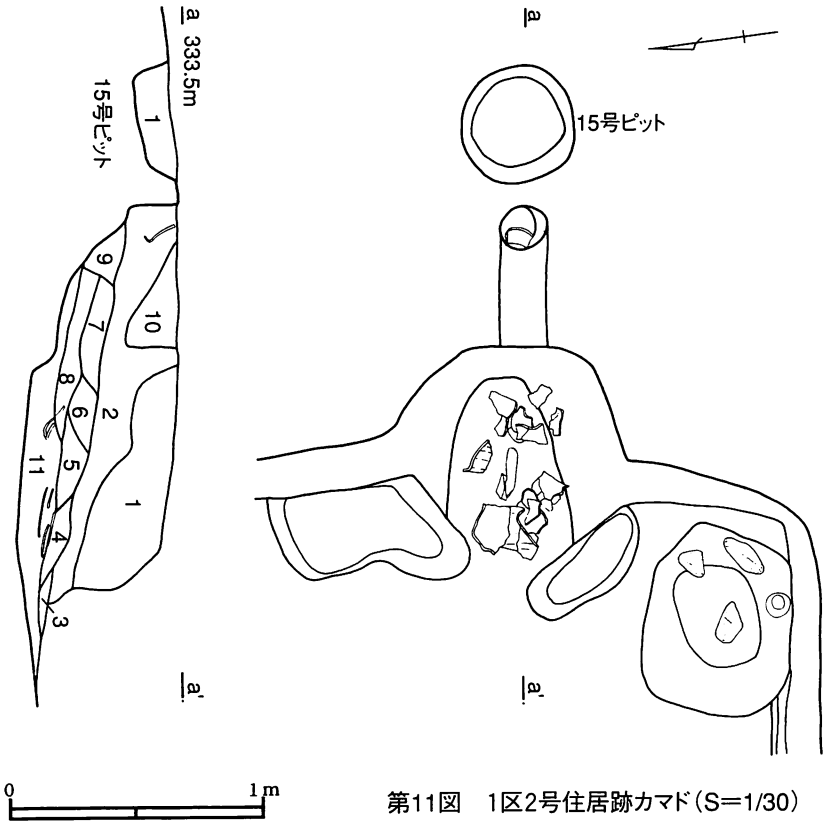


第10図　1区2号住居跡出土遺物

住居跡出土の破片と接合した。5・6はほぼ床面直上からの出土である。

出土遺物(第10図、図版6)

土師器坏・ハケ目調整の甕・ロクロ整形の甕・蓋・手捏土器、須恵器坏破片が約120片、鉄製品2点が出土した。1～6は土師器坏である。1は3分の1が残存し口径10cm、底径5cmと推定され、器高は4.5cmを測り、橙色を呈し、胎土に赤色粒を含む。体部下半に斜め方向のヘラケズリ、内面はロクロナデ、底面にはヘラケズリが施されている。2は5分の1が残存し、口径12cm、底径6cmと推定され、器高は4.7cmを測り、にぶい橙色を呈し、胎土に赤色粒と石英を含み、外面の体部下半に斜め方向のヘラケズリ、底面は回転糸切り後にナデが施される。3は完形である。口径は10.8cm、底径5cm、器高4.3cmを測る。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒と石英を含む。内外面ともにロクロナデで内面は放射状暗文、外面下半には斜め方向のヘラケズリが施されている。底面は回転糸切り痕を残す。4は完形で、口径11cm、底径6cm、器高4.2cmを測る。色調・



2住カマド

1.にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり強 粘性弱
径2～10mmの焼土若干含む
暗褐色土（3/3）多く含む

2.灰黄褐色土 10YR4/2 しまりあり 粘性強
径1～5mmの焼土含む

3.褐色土 10YR4/4 しまり強 粘性あり
径1～10mmの焼土多く含む
径2mmの炭化物多く含む

4.にぶい黄褐色土 10YR5/3 しまり・粘性強
径1～20mmの焼土多く含む

5.にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり・粘性強
径1～20mmの焼土多く含む

6.にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり・粘性強
径2～10mmの焼土若干含む

7.暗褐色土 10YR3/3 しまり強 粘性あり
径5～10mmの焼土含む
径20mmの炭化物若干含む

8.暗褐色土 10YR3/3 しまり・粘性強
径2～30mmの焼土多く含む

9.暗褐色土 10YR3/4 しまり強 粘性あり
径5mm以下の焼土含む

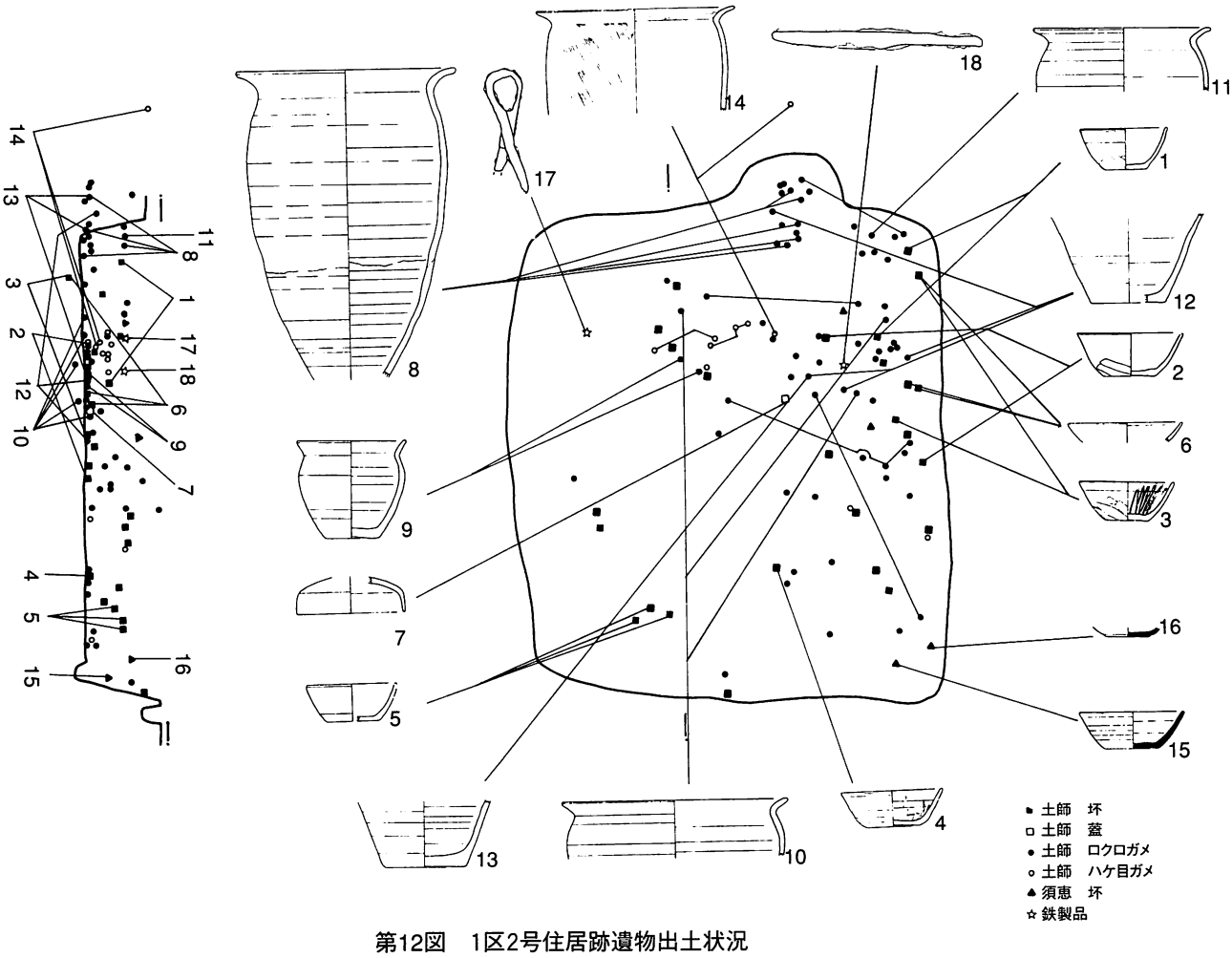
10.にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり強 粘性弱
径2～5mmの焼土若干含む
下部は被熱により赤化

11.暗褐色土 10YR3/3 しまり弱 粘性強
焼土ブロックを非常に多く含む

15号ピット

1.暗褐色土 10YR3/3 径10～30mmの焼土多く含む
炭化物粒少し含む
にぶい褐色土粒多く含む

第11図 1区2号住居跡カマド（S=1/30）



第12図 1区2号住居跡遺物出土状況

胎土は３と同じである。内外面ともにロクロナデが施される。底面は回転糸切り痕を残す。５は５分の１が残存する。口径10cm、底径5.8cmと推定され、器高は4.1cmでにぶい橙色を呈し、胎土・内外面の調整は３と同じ。底面は回転糸切り後ナデが施されている。６は口縁部破片で、口径13cmと推定される。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。内外面ともにロクロナデが施されている。７は土師器蓋の破片で、口径12cmと推定される。暗褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英、雲母を含む。外面はよく磨かれ、内面はロクロナデである。８～13は土師器ロクロ整形甕である。８は口縁～胴部の約２分の１が残存し、口径24cm、残存器高34cmを測る。明赤褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。内外面はロクロナデである。胴部に接合痕が残る。９は口縁～底部３分の２が残存し、口径12cm、底径６cm、器高10.7cmを測る。にぶい赤褐色を呈し、胎土は８と同じである。底面は回転糸切り痕を残す。10は口縁～胴部破片で、口径25cmと推定される。橙色を呈し、胎土は８と同じである。11も口縁～胴部破片で、口径20cmと推定される、色調・胎土は10と同じである。12・13は底部破片である。12は底径8.5cmと推定され、明赤褐色を呈し、胎土は８と同じである。底面は回転糸切り後ヘラケズリが施されている。13は底径９cmと推定され、にぶい赤褐色を呈する。胎土は８と同じである。底面は回転糸切り痕を残す。14は土師器ハケ目調整甕の口縁～胴部破片で、口径22cmと推定される。明赤褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英の他に雲母を含む。15・16は須恵器坏である。15は完形で口径12cm、底径6.5cm、器高４cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、白・黒色粒、石英を含む。焼成は不良で、全体に磨滅している。底面は回転糸切り痕を残す。16は底部破片で、底径５cmと推定される。にぶい黄橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。焼成は不良で、全体に磨滅している。17・18は鉄製品である。17は長さ10.2cmで、１本の棒を折り曲げて交差させている。18は現存長17.1cm、最大幅1.5cmの棒状を呈する。

(3) ３号住居跡（第13～15図、図版４）

E・F-20グリッドに位置する。規模は東西、南北ともに2.6mで、隅丸方形を呈する。壁高は0.45mを測り、やや緩やかに立ち上がる。主軸はN-76°-Eの方向である。床面の硬化はみられない。カマドは東壁南寄りに粘土で構築されており、煙道の立ち上がりがなだらかである。南北0.97m、東西1.5mの規模で、煙道の残りが比較的よく、長さ0.73m、幅0.32mを測る。[遺物出土状況]平面分布は北西部分に集中がみられるが、垂直分布をみると覆土の上層から下層まで分布している。

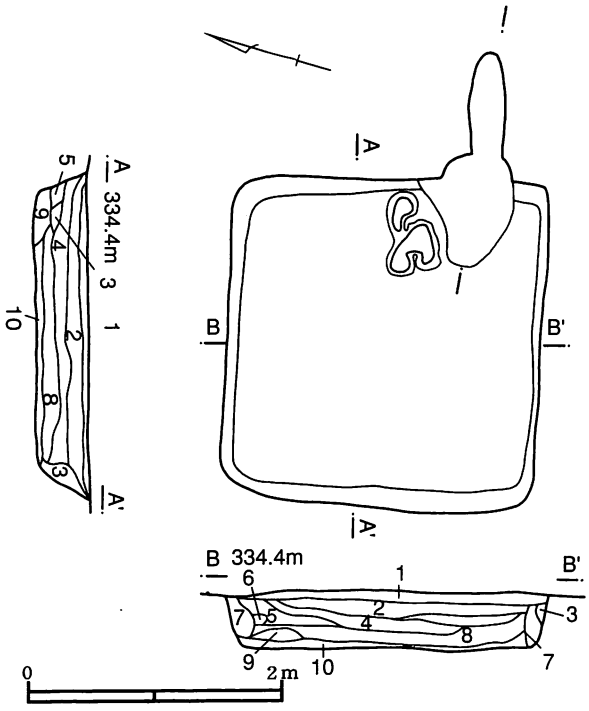
出土遺物（第16図、図版７）

土師器坏・ロクロ整形甕・蓋、須恵器甕等の31片が発見された。その内で図示できるのは６点のみである。１～４は土師器坏、５は須恵器甕、６は弥生土器である。１は完形で、口径11cm、底径６cm、器高3.9cmを測る。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。外面はロクロナデ後下半にヘラケズリ、内面はロクロナデ後放射状暗文が施されている。底面は回転糸切り後、周囲にヘラケズリが施されている。２は２分の１が残存する。口径12cm、底径６cm、器高４cmを測る。にぶい橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。内外面ともにロクロナデ、底面は回転糸切り後周囲にヘラケズリが施されている。３は口縁～底部の破片である。口径12cm、底径６cmと推定され、器高は4.5cmを測り、にぶい橙色を呈する。胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。内外面ともにロクロナデ。４は底部破片で、底径5.5cmと推定される。橙色を呈し、胎土は３と同じで、磨滅している。5は胴部破片で、灰白色を呈し、胎土は白・黒色粒を含む。外面にタタキが施される。６は弥生土器の口縁部破片である。明赤褐色を呈し、胎土に白・黒色粒、石英、雲母を含む。

第３節　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第17図、第１表、図版４・７）

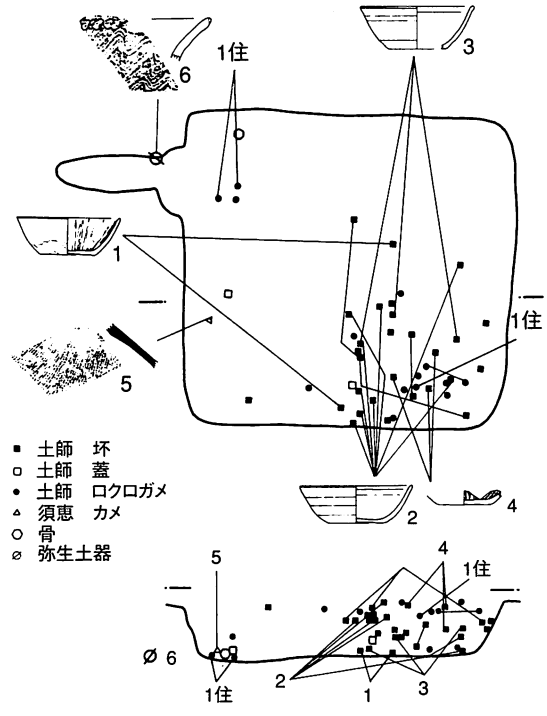
調査区北東端のC・D-５・６グリッドに位置する。南7.5mに２号住居跡がある。２間×３間の東西に長い長方形を呈し、主軸方位はほぼ東西になる。北東・南東角の柱穴は方形に近い平面形をもつが、残りは円から長円形を呈し、深さは0.3～0.5mを測る。⑤の覆土中より羽口の破片１点が出土した（第19図）。羽口は外径６cm、内径1.7cmと推定され、厚さ2.2cmを測り、外側は灰黄色、内側は明赤褐色を呈する。胎土は石英、雲母を多く含む。⑥は形状や位置から本跡に伴わない可能性が高い。



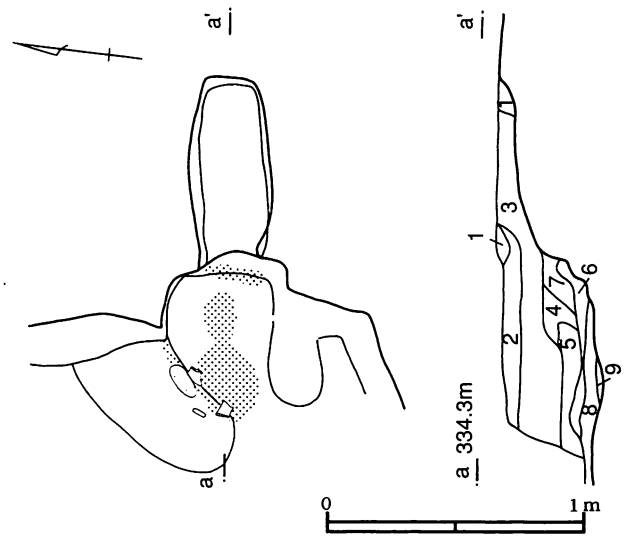
3号住居跡

1.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック微量含む
2.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック少し含む
3.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック斑に含む
4.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック斑に含む
焼土微量含む
5.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック多く含む
6.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土多量に含む
7.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）ブロック少し含む
褐灰色土（4/1）少し含む
8.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）まだらに含む
径2～3mmの焼土微量含む
9.にぶい黄褐色土　10YR5/4 しまり強　粘性あり　黒褐色土（3/2）少し含む
焼土ブロック微量含む
10.にぶい黄褐色土　10YR5/4 しまり強　粘性あり　黒褐色土（3/2）微量含む
焼土ブロック少し含む

第13図　1区3号住居跡（S=1/60）



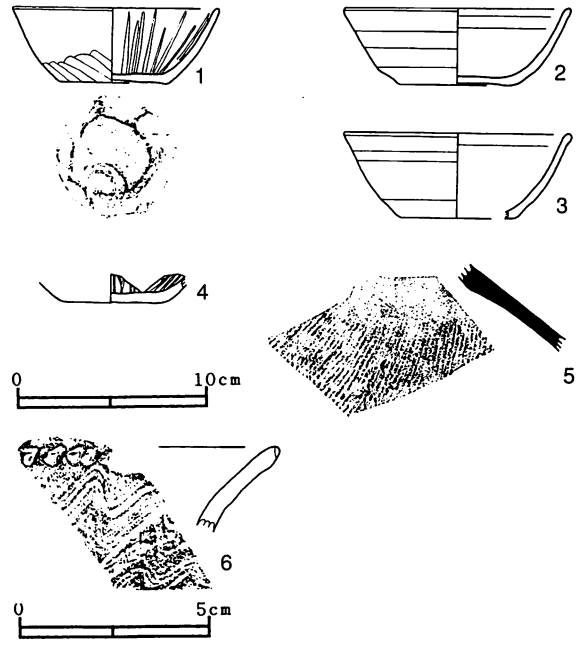
第15図　1区3号住居跡遺物出土状況



3住カマド

1.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　焼土ブロック多く含む
2.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　径1～2mmのにぶい黄褐色土微量含む
焼土ブロック微量含む
3.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり　径2～3mmのにぶい黄褐色土少し含む
4.黒褐色土　10YR3/2 しまり・粘性あり　にぶい黄褐色土（5/4）多く含む
5.にぶい黄褐色土　10YR5/4 しまり・粘性あり　黒褐色土（3/2）ブロック含む
6.暗褐色土　10YR3/4 しまり弱　粘性あり　焼土・炭化物ブロック多く含む
7.暗褐色土　10YR3/3 しまり強　粘性あり　焼土粒少し、炭化物粒若干含む
8.にぶい黄褐色土　10YR4/3 しまり強　粘性あり　径10～30mmの焼土多く含む
径5～30mmの炭化物含む
9.褐色土　7.5YR4/4 しまり強　粘性あり　焼土粒多く含む

第14図　1区3号住居跡カマド（S=1/30）



第16図　1区3号住居跡出土遺物

第４節　柱列

１号柱列(第18図、第２表、図版４)

E・F-６グリッドに位置する４基の柱穴からなる。径0.2m前後の円形を呈した浅い穴が直線に並ぶことから柱列とした。方位はほぼ東西を示し、深さは0.7～0.12mを測る。遺物の出土はない。

第５節　土坑(炭焼き窯跡)

２基の土坑を確認した。１号土坑は、欠番である。２・３号土坑は、炭焼き窯跡であることを調査の途中で確認したが、図面等の記録は土坑番号で行った。２・３号土坑から出土した炭化材はすべてコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。

(1) ２号土坑(第20図、図版４)

E・F-18グリッドに位置し、２号溝を切っている。長軸4.4m、短軸1.6mの隅丸長方形を呈し、深さは0.1mである。土坑の底面には長軸に沿って溝状の窪みを伴う。長さ3.6m、幅約0.15m、土坑の底面からの深さは最大で0.13mを測る。土坑の底面は南から北に緩く傾斜し、その比高差は約0.09mである。長軸の方位はN-15°-W。土坑の底面は溝状の窪みに沿ってよく焼けている。炭化材のみの出土であり、その中で最も大きいものは、長さ0.3m、径0.05m。その他の炭化材も比較的大きな固まりで残っている。炭化材のみを出土した。

(2) ３号土坑(第21図、図版５)

２号土坑の西約４mのD・E-19グリッドに位置する。長軸3.85m、短軸1.5mの北側部分が突出した不整隅丸長方形を呈し、深さは0.35mを測る。土坑の底面には長軸に沿って、長さ2.7m、幅0.2～0.3m、底面からの深さ0.03mの浅い溝が伴う。長軸の方位はN-３°-Eで、壁は緩やかに立ち上がる。土坑の底面は平坦で、南西・南東角と北側の突出部を除き非常によく焼けている。炭化材は２号土坑よりも細かい。他に土師器坏・ハケ目調整甕の小破片が出土した(図示不能)。

第６節　ピット(第11・22図)

ピットは15基を確認し、そのうち１～14号はまとまって検出された。

(1) １号ピット

C-６グリッドに位置する(14号溝を切っている)。長軸1.1m、短軸0.55mの楕円形を呈し、深さは0.15mを測る。断面は皿形である。深さは0.15m。

(2) ２号ピット

C-６・７グリッドに位置する。長軸0.26m、短軸0.19mの楕円形を呈し、深さは0.14mを測る。断面はU字形である。

(3) ３号ピット

B-６・７グリッドに位置する。長軸0.35m、短軸0.27mの楕円形を呈し、深さは0.14mを測る。

(4) ４号ピット

B-６グリッドに位置する。長軸0.3m、短軸0.19mの楕円形を呈し、深さは0.13mを測る。断面はU字形。

(5) ５号ピット

B-６・７グリッドに位置する。径0.4mの円形を呈し、深さは0.17mを測る。断面はU字形。

(6) ６号ピット

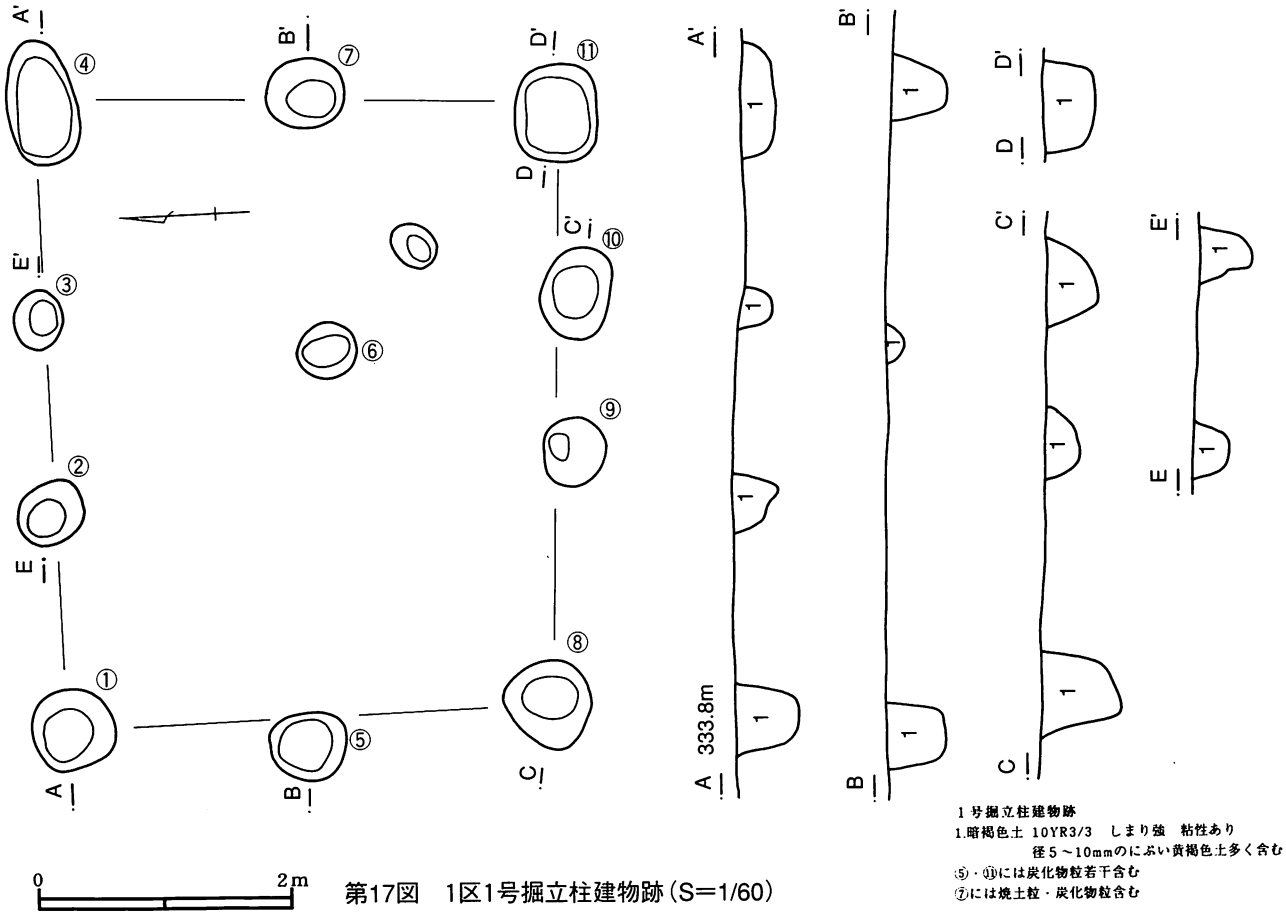
B-７グリッドに位置する。遺構確認時に範囲が不明確なため東側半分を掘り抜いて確認した。径0.4mの円形を呈すると推定され、深さは0.3mを測る。断面はU字形。

(7) ７号ピット

B・C-７グリッドに位置する。長軸0.72m、短軸0.6mのほぼ円形を呈し、深さは0.25mを測る。断面は逆台形。

(8) ８号ピット

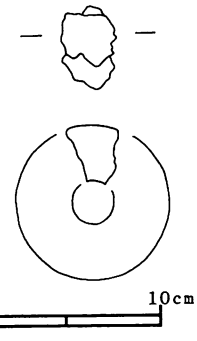
C-７グリッドに位置する。径0.33mの円形を呈し、深さは0.28mを測る。断面はU字形。



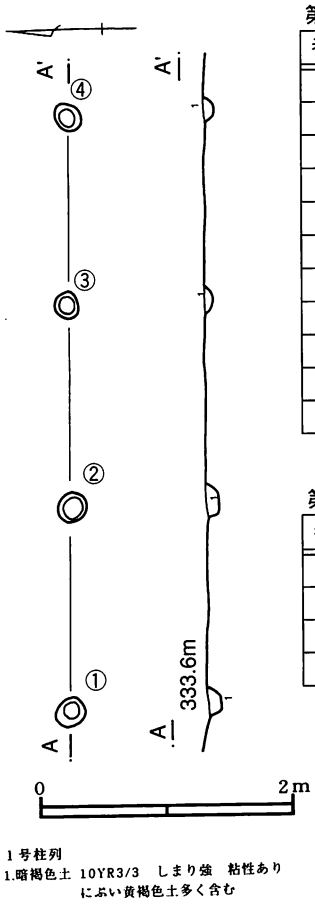
第17図　1区1号掘立柱建物跡（S=1/60）

第1表　1号掘立柱建物跡柱穴　(m)

番号	規模	深さ	平面形	備　考
1	0.62×0.66	0.5	円	
2	0.53×0.45	0.35	円	
3	0.4×0.45	0.4	円	
4	0.97×0.55	0.3	長円	
5	0.6×0.53	0.46	不整円	羽口片出土
6	0.45×0.43	0.25	円	本遺構に伴わないか?
7	0.6×0.55	0.44	円	
8	0.7×0.7	0.6	円	
9	0.55×0.5	0.3	円	
10	0.7×0.53	0.4	長円	
11	0.75×0.65	0.42	方	



第19図　1号掘立柱建物跡
⑤出土遺物



第2表　1号柱列柱穴　(m)

番号	規模	深さ	平面形
1	0.2×0.23	0.12	円
2	0.24×0.23	0.1	円
3	0.2×0.2	0.08	円
4	0.21×0.18	0.07	円

第18図　1区1号柱列（S=1/60）

(9) 9号ピット

C-7グリッドに位置する。長軸0.55m、短軸0.53mの円形を呈し、深さは0.27mを測る。

(10)10号ピット

C-7グリッドに位置する。径0.35mの円形を呈し、深さは0.18mを測る。断面はU字形。

(11)11号ピット

C-7グリッドに位置する。長軸0.38m、短軸0.3mの楕円形を呈し、深さは0.23mを測る。

(12)12号ピット

C-7グリッドに位置する。径0.3mの円形を呈し、深さは0.15mを測る。断面はU字形。

(13)13号ピット

B-7グリッドに位置する。長軸0.27m、短軸0.23mの楕円形を呈し、深さは0.3mを測る。断面はV字形。

(14)14号ピット

B-7グリッドに位置する。長軸0.3m、短軸0.26mの楕円形を呈し、深さは0.14mを測る。断面はV字形。

(15)15号ピット

F-7グリッドに位置する。2号住居跡のカマドの煙道の東側に近接する。径0.45mの円形を呈し、深さは0.13mを測る。断面は逆台形。覆土中より土師器ハケ目甕の胴部破片が1点出土(図示不能)。

第7節　溝

1～14条の溝を確認したが、番号は途中で繋がらない溝でも、覆土や溝ののびる方向で判断し同一の番号にした。また、溝が異なる区画にまたがるものは、区画ごとに番号を付した。

(1) 1号溝(第23図)

D～H-19～23グリッドに位置する。全長26.4m、幅は0.4～0.8m、ほぼ西から東へまっすぐに延びている。西端は調査区外に伸びるが、東端は道を境に消滅する。断面は皿形。

(2) 2号溝①(第23図)

B・C-20～22グリッドに位置する。全長15.5m、幅0.3～0.6m、深さ0.04～0.175mを測る。覆土は主に小石で、断面が不定形を呈する。西から東へほぼまっすぐ延びる。土師器坏・甕の小破片が5点出土した(図示不能)。

(3) 2号溝②(第23図)

E・F-17・18グリッドに位置する。①の東端から約10m東に始まり、西から東へまっすぐ延びる。2号土坑に切られる。全長8.8m、幅0.4～0.8m、深さ0.17～0.38mを測る。断面は不定形を呈し、覆土は小石である。出土遺物は土師器坏破片5点である。その内図示できるのは1点である(第26図)。1は口縁～底部の4分の1が残存する。口径12cm、底径6cmと推定され、器高は4.5cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。内外面ともにロクロナデされている。

(4) 3号溝(第23図)

B～E-15～20グリッドに位置する。全長25.5m、幅0.8～1.35m、深さ0.07～0.23mを測る。南西から緩やかに東へ曲がる。断面は皿形。東端は5号溝ないし6号溝に合流する可能性がある。C-17・18グリッドでは径0.05～0.15mの石が覆土中に集中する。

(5) 4号溝(第23図)

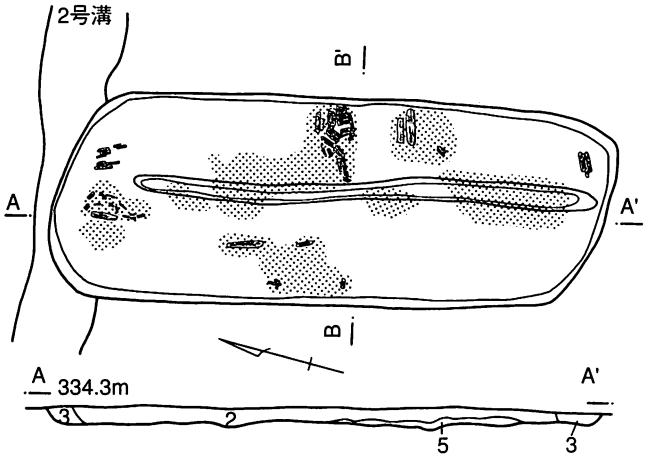
H・I-20・21グリッドに位置する。水切り溝の掘削中に壁面で落ち込みを確認した。全長5m、幅0.7～1m、深さ0.3～0.48mを測る。断面は逆台形。東から西へ延びる。両端とも調査区外にまっすぐ延びる。

(6) 5号溝(第24図、図版5)

B～G-10～15グリッドに位置する。全長32.6m、幅0.3～2.2m、深さ0.03～0.37mを測る。ほぼ北から南へまっすぐ延び、途中2ヶ所で分流する。E・F-14グリッドでは、覆土中より貝殻がまとまって出土した。そのほとんどがヤマトシジミであるが、オオノガイが1片、アサリが1対出土した。また、北端付近では、須恵器の坏が伏せて潰れたような状態で出土した。その他に土師器坏・皿・甕、須恵器坏・壷の破片が出土している。

出土遺物(第26図、図版7)

1は土師器坏である。口縁～底部の破片で、口径11cm、底径5cmと推定され、器高は4.5cmを測る。橙色



2号土坑

1.褐灰色土　10YR6/1 しまり強　粘性弱
径2mmの炭化物少し含む

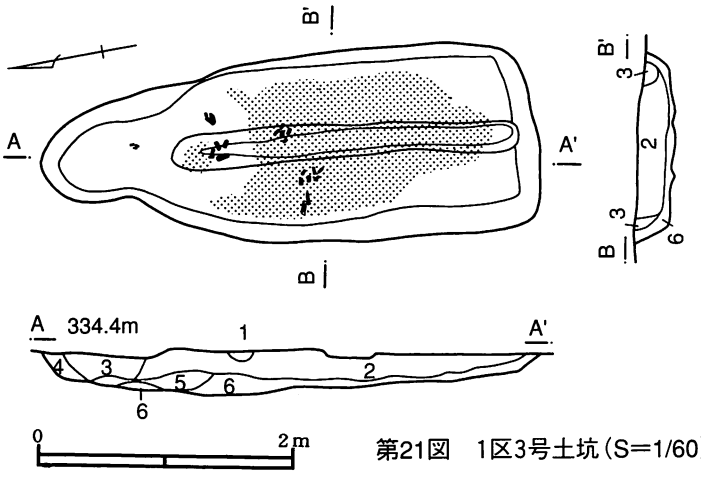
2.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性弱
径2～70mmの炭化物多く含む
径2mmの焼土少し含む
褐灰色土（5/1）ブロック30%含む

3.にぶい黄褐色土　10YR5/3 しまり強　粘性弱
径2mmの炭化物少し含む

4.黒褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性弱
褐灰色土（5/1）50%含む

5.にぶい黄褐色土　10YR5/3 しまり強　粘性弱
径2mmの焼土30%、
炭化物少し含む

第20図　1区2号土坑（S=1/60）



3号土坑

1.にぶい黄褐色土　10YR5/3 しまり強　粘性あり
径2mmの炭化物少し含む

2.暗褐色土　10YR3/2 しまり強　粘性あり
径10mmの炭化物含む
褐灰色土（4/1）多く含む
にぶい黄褐色土（5/3）ブロック少し含む

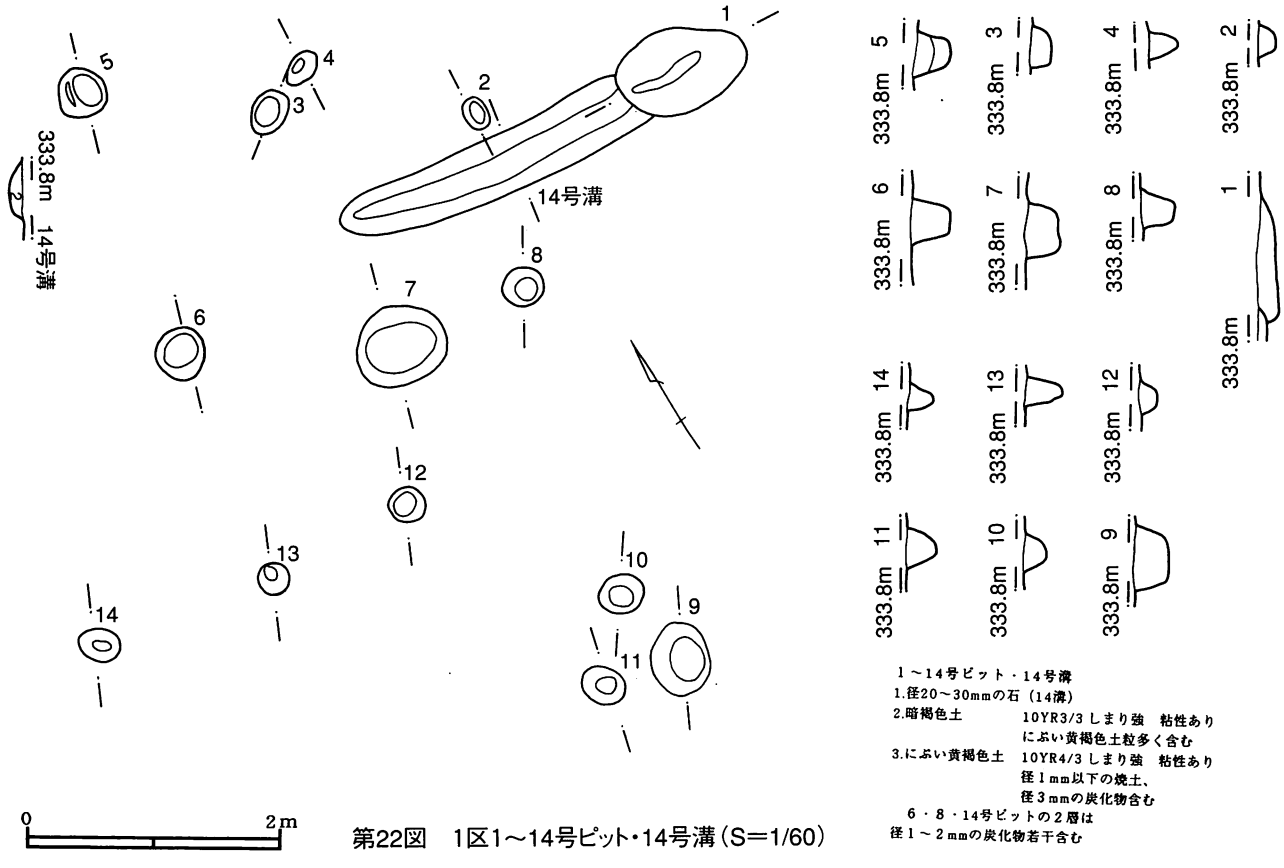
3.暗褐色土　10YR3/2 しまり・粘性あり
径2mmの炭化物少し含む
褐灰色土（4/1）多く含む
径3mmのにぶい黄褐色土（5/3）多く含む

4.にぶい黄褐色土　10YR5/3 しまり・粘性あり
径2mmの炭化物少し含む
褐灰色土（4/1）少し含む

5.黒褐色土　10YR3/2 しまり・粘性あり
径2mmの焼土・炭化物少し含む
褐灰色土（4/1）少し含む

6.暗褐色土　10YR3/2 しまり・粘性あり
径2mmの焼土所々含む
径20～30mmの炭化物多く含む

第21図　1区3号土坑（S=1/60）



1～14号ピット・14号溝

1.径20～30mmの石（14溝）

2.暗褐色土　10YR3/3 しまり強　粘性あり
にぶい黄褐色土粒多く含む

3.にぶい黄褐色土　10YR4/3 しまり強　粘性あり
径1mm以下の焼土、
径3mmの炭化物含む

6・8・14号ピットの2層は
径1～2mmの炭化物若干含む

第22図　1区1～14号ピット・14号溝（S=1/60）

を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。内外面ともロクロナデ、内面は放射状暗文が施されている。底面は回転糸切り痕が残る。2は土師器皿で、口縁～底部2分の1が残存する。口径16cm、底径6.5cm、器高2cmを測る。黄橙色を呈し、胎土は1と同じである。内外面ともロクロナデ、底面は回転ヘラ切りされている。3は土師器ロクロ整形甕の底部破片で、底径6.5cmと推定される。褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。底面は回転糸切り痕が残る。4・5は須恵器坏である。4は完形で、口径12cm、底径6cm、器高4.5cmを測る。にぶい黄色を呈し、胎土は白・黒色粒、石英を含む。焼成は不良で全体が磨滅している。5は底部破片で、底径6.5cmと推定される。褐灰色を呈し、胎土は白・赤色粒、石英、雲母を含む。底面は回転糸切り痕を有す。

(7) 6号溝(第24図)

F～I-15・16グリッドに位置する。遺構確認時には1条の幅広の溝としたが、掘り進めるうちに2条の溝が合流し1条の溝になっていることがわかった。2号溝②の続きとおもわれる西からの流れと3号溝または5号溝もしくはその両方からの続きである北からの流れが合流し、南東へ延びている。出土遺物は貝殻1点(オオノガイ)と土師器坏・甕、須恵器坏である。

出土遺物(第26図、図版7)

1～7は土師器坏である。1は口縁～底部約6分の1が残存する。口径9.5cm、底径5.5cmと推定され、器高は4.6cmを測る。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。内外面ともロクロナデされ、外面下半はヘラ削りと思われるがはっきりしない。底面は回転糸切り後、ヘラケズリされている。2は口縁～底部5分の4が残存する。口径11.5cm、底径5cm、器高4.4cmを測る。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、雲母を含む。内外面ともロクロナデされ、内面には放射状暗文が施されている。底面は回転糸切り後、周囲がヘラケズリされている。3は口縁～体部破片で、口径12cmと推定される。明赤褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。4は口縁部破片で、口径12cmと推定される。明赤褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。5は底部破片で、底径5cmと推定される。にぶい橙色を呈し、胎土は、白・黒・赤色粒を含む。外面に斜め方向のヘラケズリ、内面は放射状暗文が施されている。底面は回転糸切り痕が僅かに残る。6は底部破片で、底径5cmと推定される。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。外面は斜め方向のヘラケズリ、内面はロクロナデされ、底面はヘラケズリされている。7も底部破片で、底径5cmと推定される。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、雲母を含む。全体に磨滅している。8は土師器高台付坏の底部破片で、高台径は8cmと推定される。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。削り出し高台である。9は土師器皿の底部破片で、底径は6.5cmと推定される。橙色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒を含む。10は土師器ハケ目調整甕の口縁部破片で、口径28cmと推定される。暗褐色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英、雲母を含む。11～13は須恵器坏である。11は口縁～底部の3分の1が残存する。口径11.6cm、底径6.5cmと推定され、器高は4.7cmを測る。にぶい黄色を呈し、胎土は白・黒色粒を含む。12は底部破片で、底径7cmと推定される。褐灰色を呈し、胎土は白・赤色粒、石英を含む。13も底部破片で、底径は6.5cmと推定される。褐灰色を呈し、胎土は白・黒・赤色粒、石英を含む。

(8) 7号溝(第23図)

C・D-15・16グリッドに位置する。3号溝の北側にほぼ西から東へ延びる。全長5.9m、幅0.2～0.4m、深さ0.055～0.095mを測る。

(9) 8号溝(第24図、図版5)

D・E-12・13グリッドに位置する。5号溝の東側にほぼ平行にはしる。全長5.5m、幅0.6～1.1m、深さ0.05mを測る。断面は皿形。

(10) 9号溝①(第25図、図版5)

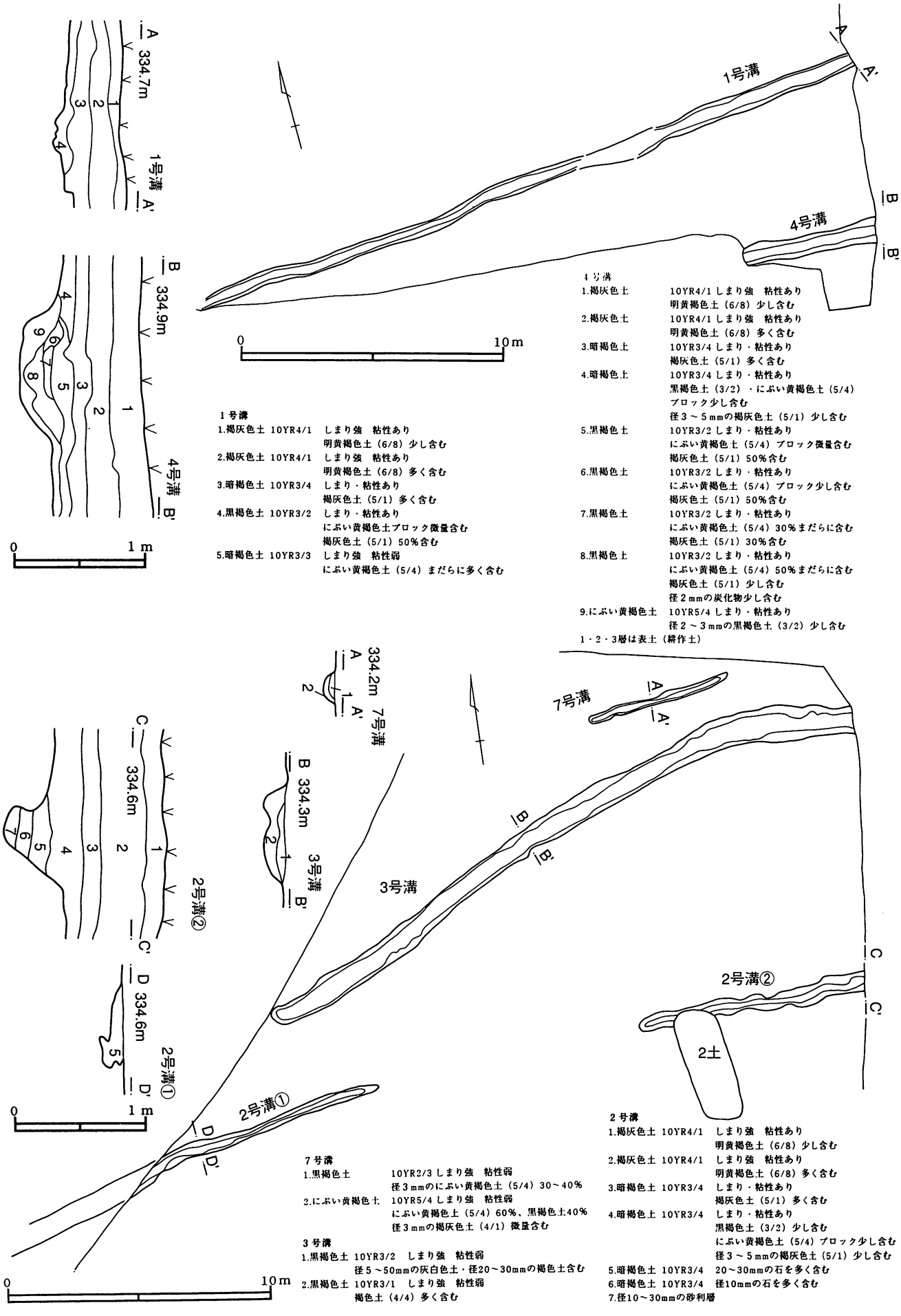
F・G-3・4グリッドに位置する。ほぼ南北の方向に延びる。長さ7.43m、幅0.3～0.5m、深さ0.11～0.15mを測る。

(11) 9号溝②(第25図、図版5)

①の南端から約4m南に始まる。長さ13.8m、幅0.4～0.6m、深さ0.02～0.19mを測る。

(12) 10号溝(第24図、図版5)

H・I-2・3グリッドに位置する。11号溝と交差する。長さ5.95m、幅0.14～0.56m、深さ0.04～0.15mを測る。



1号溝

1.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）少し含む

2.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）多く含む

3.暗褐色土 10YR3/4 しまり・粘性あり
褐灰色土（5/1）多く含む

4.黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性あり
にぶい黄褐色土ブロック微量含む
褐灰色土（5/1）50%含む

5.暗褐色土 10YR3/3 しまり強　粘性弱
にぶい黄褐色土（5/4）まだらに多く含む

4号溝

1.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）少し含む

2.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）多く含む

3.暗褐色土 10YR3/4 しまり・粘性あり
褐灰色土（5/1）多く含む

4.暗褐色土 10YR3/4 しまり・粘性あり
黒褐色土（3/2）・にぶい黄褐色土（5/4）
ブロック少し含む
径３～５mmの褐灰色土（5/1）少し含む

5.黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性あり
にぶい黄褐色土（5/4）ブロック微量含む
褐灰色土（5/1）50%含む

6.黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性あり
にぶい黄褐色土（5/4）ブロック少し含む
褐灰色土（5/1）50%含む

7.黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性あり
にぶい黄褐色土（5/4）30%まだらに含む
褐灰色土（5/1）30%含む

8.黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性あり
にぶい黄褐色土（5/4）50%まだらに含む
褐灰色土（5/1）少し含む
径２mmの炭化物少し含む

9.にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまり・粘性あり
径２～３mmの黒褐色土（3/2）少し含む

1・2・3層は表土（耕作土）

7号溝

1.黒褐色土 10YR2/3 しまり強　粘性弱
径３mmのにぶい黄褐色土（5/4）30～40%

2.にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまり強　粘性弱
にぶい黄褐色土（5/4）60%、黒褐色土40%
径３mmの褐灰色土（4/1）微量含む

3号溝

1.黒褐色土 10YR3/2 しまり強　粘性弱
径５～50mmの灰白色土・径20～30mmの褐色土含む

2.黒褐色土 10YR3/1 しまり強　粘性弱
褐色土（4/4）多く含む

2号溝

1.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）少し含む

2.褐灰色土 10YR4/1 しまり強　粘性あり
明黄褐色土（6/8）多く含む

3.暗褐色土 10YR3/4 しまり・粘性あり
褐灰色土（5/1）多く含む

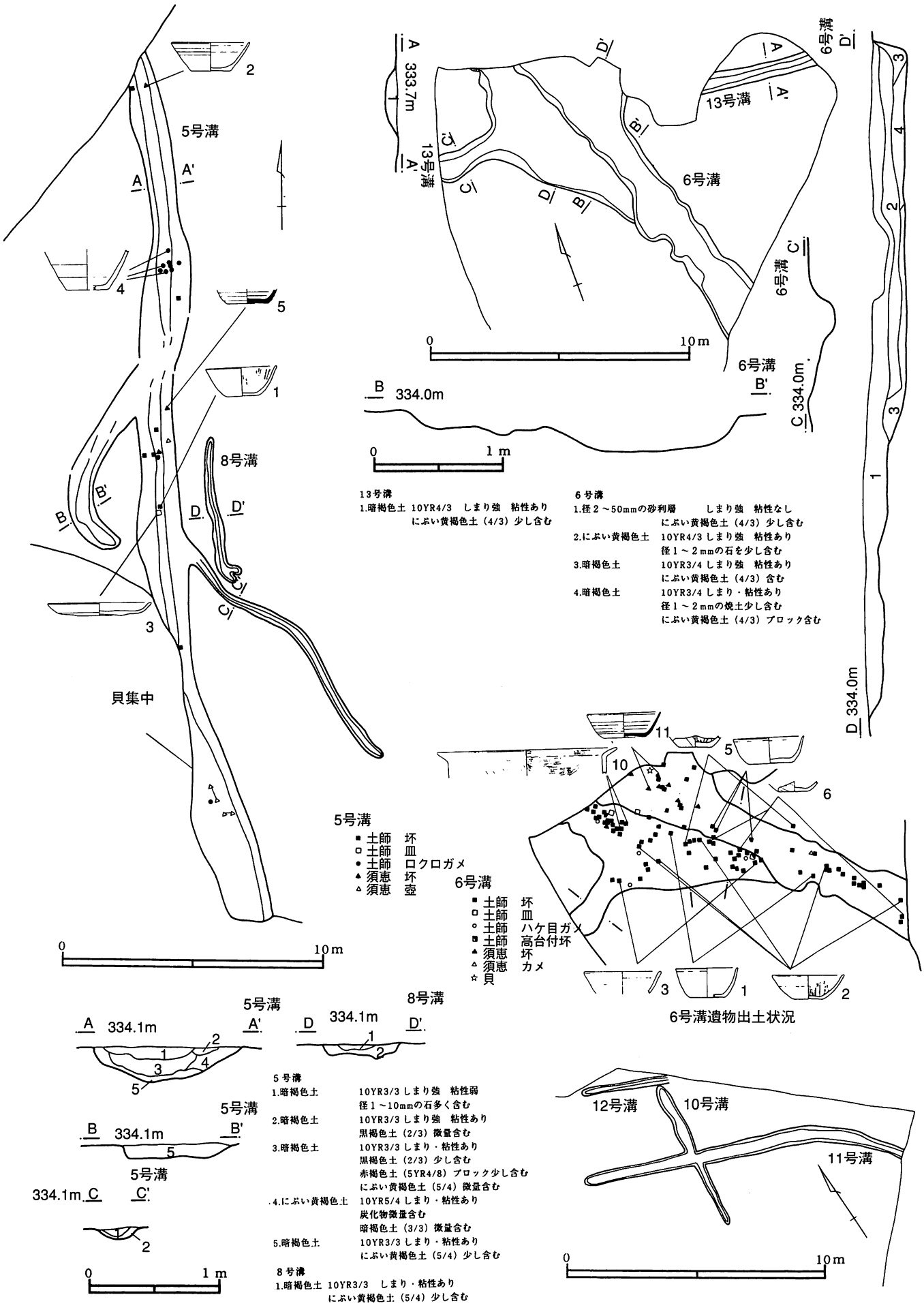
4.暗褐色土 10YR3/4 しまり・粘性あり
黒褐色土（3/2）少し含む
にぶい黄褐色土（5/4）ブロック少し含む
径３～５mmの褐灰色土（5/1）少し含む

5.暗褐色土 10YR3/4 20～30mmの石を多く含む

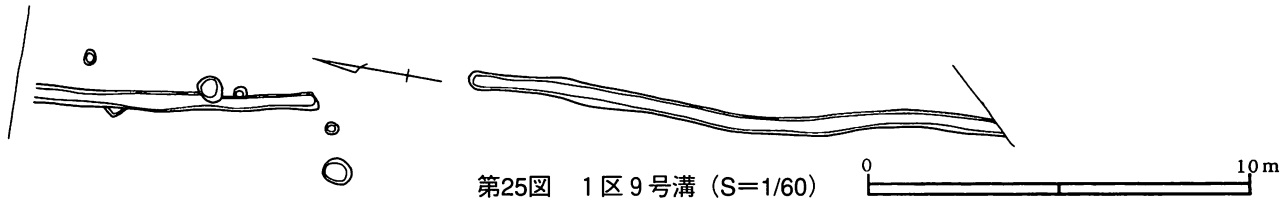
6.暗褐色土 10YR3/4 径10mmの石を多く含む

7.径10～30mmの砂利層

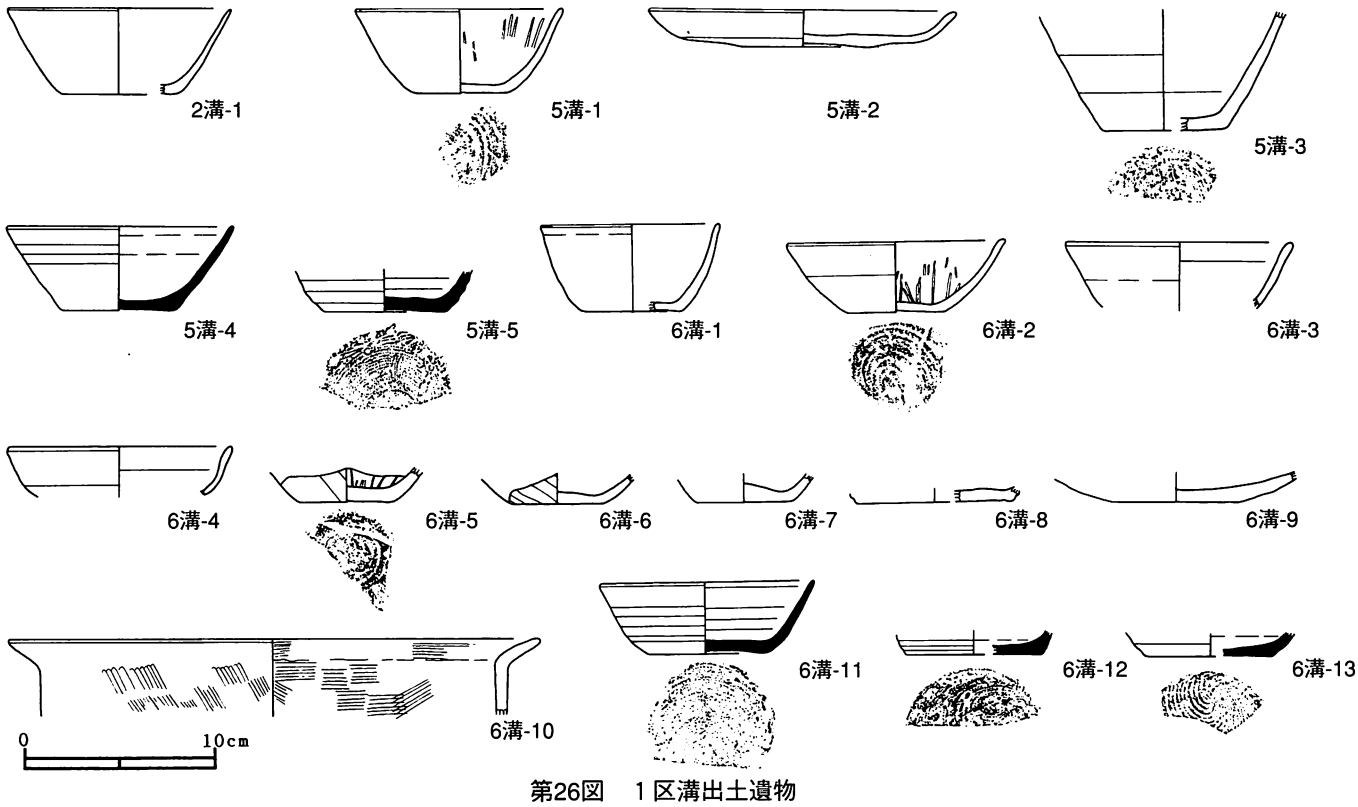
第23図　1区1～4・7号溝（S=1/60）



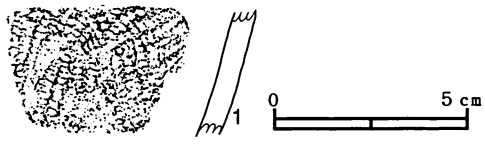
第24図　１区５・６・８・10～13号溝（S＝1/60）

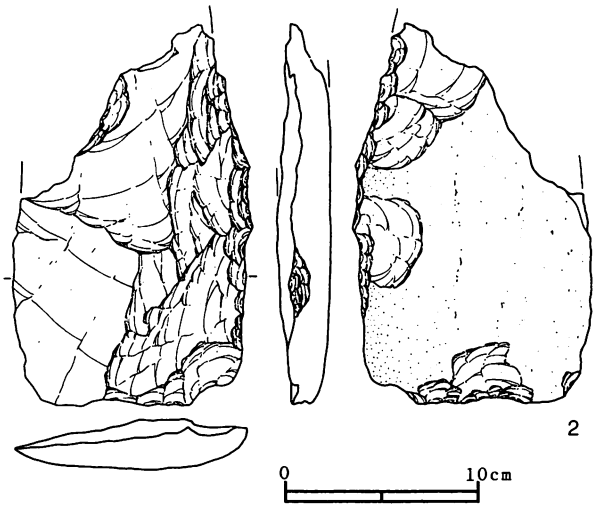


第25図　1区9号溝（S=1/60）



第26図　1区溝出土遺物





第27図　1区遺構外出土遺物

(13)11号溝(第24図、図版５)

H～J-２・３グリッドに位置する。10号溝と交差する。長さ12.7m、幅0.34～0.66m、深さ0.02～0.22mを測る。西北西から南東に緩やかに曲がる。

(14)12号溝(第24図、図版５)

H-２グリッドに位置する。長さ3.35m、幅0.22～0.3m、深さ0.08～0.12mを測る。西北西から東南東に延びる。

(15)13号溝(第24図)

H・I-14・15グリッドに位置する。西から東へ向かい、長さ0.45m、幅0.54～0.6m、深さ0.11～0.19mを測る。断面は皿形。出土遺物は土師器甕の口縁部破片(図示不能)のみである。

(16)14号溝(第22図)

B・C-６・７グリッドに位置する。ほぼ東から西へ延びる。東端は１号ピットに切られる。長さ2.4m、幅0.4～0.5m、深さ0.1mを測る。断面は皿形。出土遺物は土師器甕の小片２点である(図示不能)。

第８節　遺構外出土遺物(第27図、図版７)

１はI-4グリッド出土の縄文時代前期の物と思われる土器破片である。２はB-８グリッド出土の打製石斧。現存長20cm、最大幅12.5cm、最大厚2.8cm。石材は粘板岩である。１・２ともに表採である。

第４章　２区で発見された遺構と遺物

第１節　住居跡と出土遺物

(1) １号住居跡（第29～32図）

（形状）　遺跡調査のための排水用の溝によって住居跡全体のおよそ半分が欠損している。このため北壁と西壁の大半が失われているものの、隅丸方形プランと推測される。

（規模）　東壁の状況から推測して一辺が350cmほどと思われる。

（主軸）　Ｎ－101°－Ｅ

（床面）　ほぼ平坦であるが、南側がわずかに低くなっている。

（壁）　確認できた範囲で、壁高は42cm～62cmを測り、ほぼ垂直である。

（柱穴）　確認できなかった。

（周溝）　確認できなかった。

（カマド）　東壁の中央よりやや南側に設けられており、両袖の形状がよく残されている。煙道については発掘調査区域外であるために調査できなかった。

（出土遺物）　土師器では甕形土器、坏形土器、皿形土器、蓋坏が、須恵器では坏形土器が出土している。土師器の坏形土器は内面に暗文、表面・底部はヘラ削りが施されるものが主体である。甕形土器については内外面に刷毛調整が施されるものの他に、ロクロ調整のみのものも目立つ。

(2) ２号住居跡（第33～35図）

（形状）　北東隅がわずかに欠損しているが、隅丸方形プランを呈する。

（規模）　東西425cm×南北400cmを測る。

（主軸）　Ｎ－85°－Ｅ

（床面）　全体的にほぼ平坦で水平である。

（壁）　ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は43cm～44cmを測る。

（柱穴）　確認できなかった。

（周溝）　確認できなかった。

（カマド）　東壁中央よりやや南側に設けられ、両袖・両袖石が極めて良好な状態で残っている。カマド内に中心よりやや北側に支柱と考えられる細長い石が埋設して立てられていた。煙道については明確には確認できなかった。

（出土遺物）　住居跡の南半分に集中して遺物が出土している。土師器では甕形土器、坏形土器、皿形土器が、須恵器では鉢形土器、坏形土器が出土している。最も完形に近い甕形土器は住居跡南西隅から出土したものである。土師器の坏形土器は口径に対して底径がやや小さめのものが特徴的である。甕形土器は内外面ともに刷毛調整が施され、底部には木葉痕が見られるものが多い。

(3) ３号住居跡（第36～38図）

（形状）　隅丸方形プランを呈する。

（規模）　東西325cm×南北295cmを測る。

（主軸）　Ｎ－105°－Ｅ

（床面）　全体的にほぼ平坦で水平である。

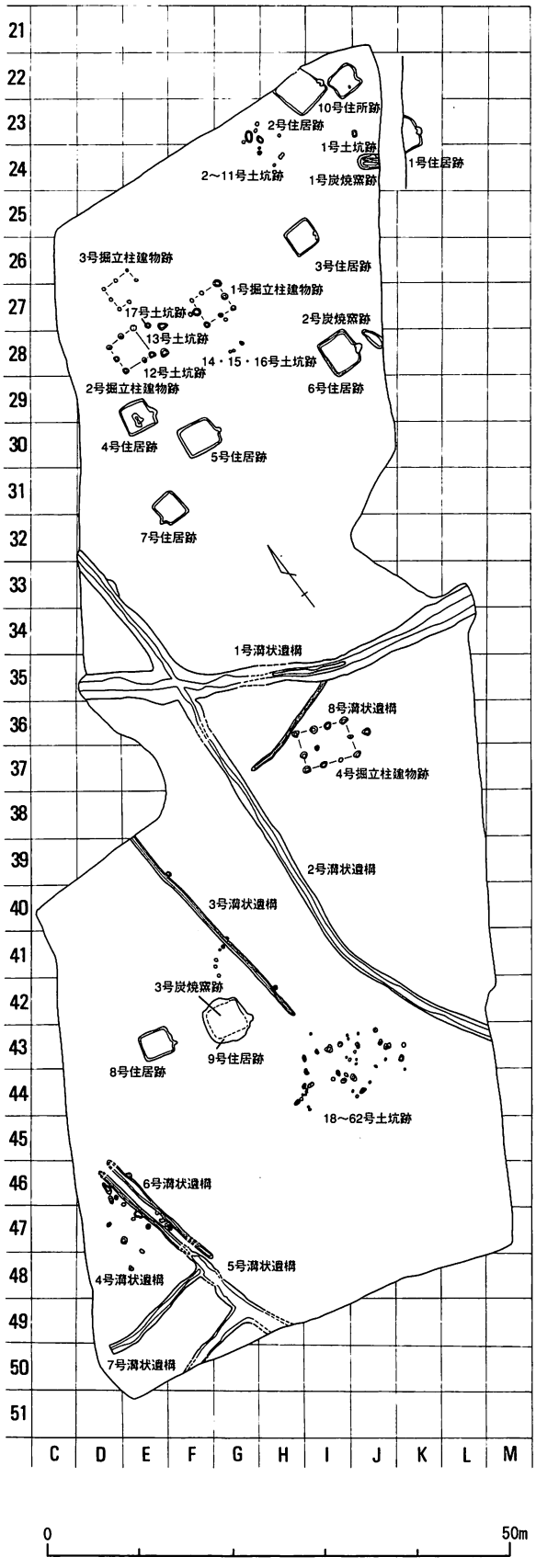
（壁）　ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は12cm～35cmを測る。

（柱穴）　確認できなかった。

（周溝）　確認できなかった。

（カマド）　東壁の南端に設けられている。両袖石が良く残っているものの、煙道は確認できなかった。

（出土遺物）　破片として出土したものが多く、一括土器はほとんど無い。いずれもカマドの周辺に散らばっ



第28図　2区全体図(S=1/750)

て出土したものである。土師器では坏形土器、甕形土器が、須恵器では甕形土器が出土している。

(4) 4号住居跡(第39～41図)

(形状)　隅丸方形プランを呈する。

(規模)　東西325cm×南北330cmを測る。

(主軸)　N－101°－E

(床面)　ほぼ平坦な床であるが、住居跡中心より南部分に径が100cm×130cm、深さが16cm～20cmのピットが存在し、そのピットの更に南寄りで壁との間に焼土が2箇所形成されていた。

(壁)壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は43cm～47cmを測る。

(柱穴)　確認できなかった。

(周溝)　確認できなかった。

(カマド)　東壁の南端に設けられている。両袖石が良好に残るが、煙道は明確ではない。(出土遺物)土師器では皿形土器、坏形土器、甕形土器が、須恵器では甕形土器片と高台坏形土器が出土している。坏形土器は口縁が彎曲して立ち上がるもの、皿形土器は回転ヘラ削りが施されたものが特徴的である。

(5) 5号住居跡(第42～45図)

(形状)　隅丸方形プランを呈する。

(規模)　東西405cm×南北355cmを測る。

(主軸)　N－94°－E

(床面)　ほぼ水平で平坦である。ピット等の施設は発見できなかった。

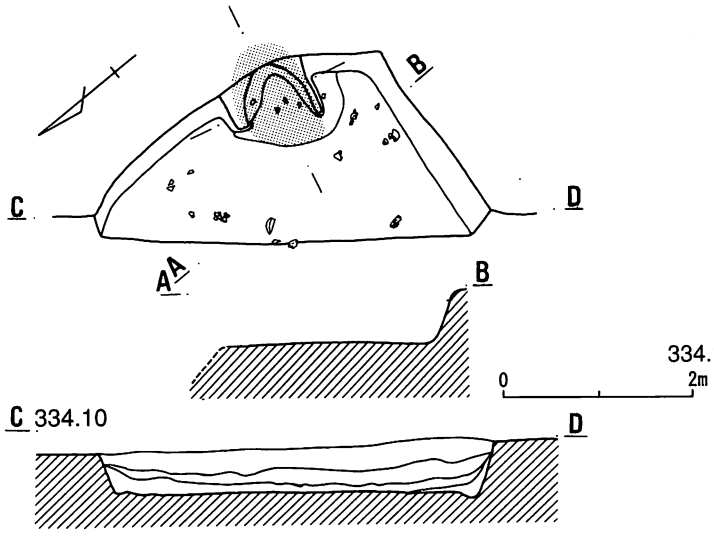
(壁)　壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cm～51cmを測る。

(柱穴)　確認できなかった。

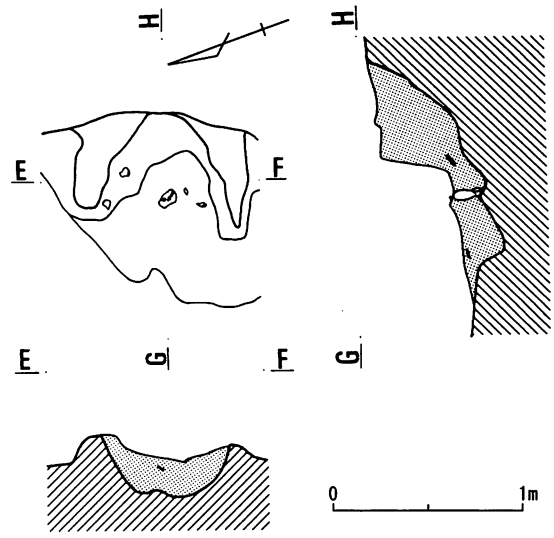
(周溝)　確認できなかった。

(カマド)　東壁の中央よりやや南側に設けられている。内部に石組等は確認できなかったし、煙道も遺存状態は良くなっかた。焚口が床面より僅かに深くなっている。

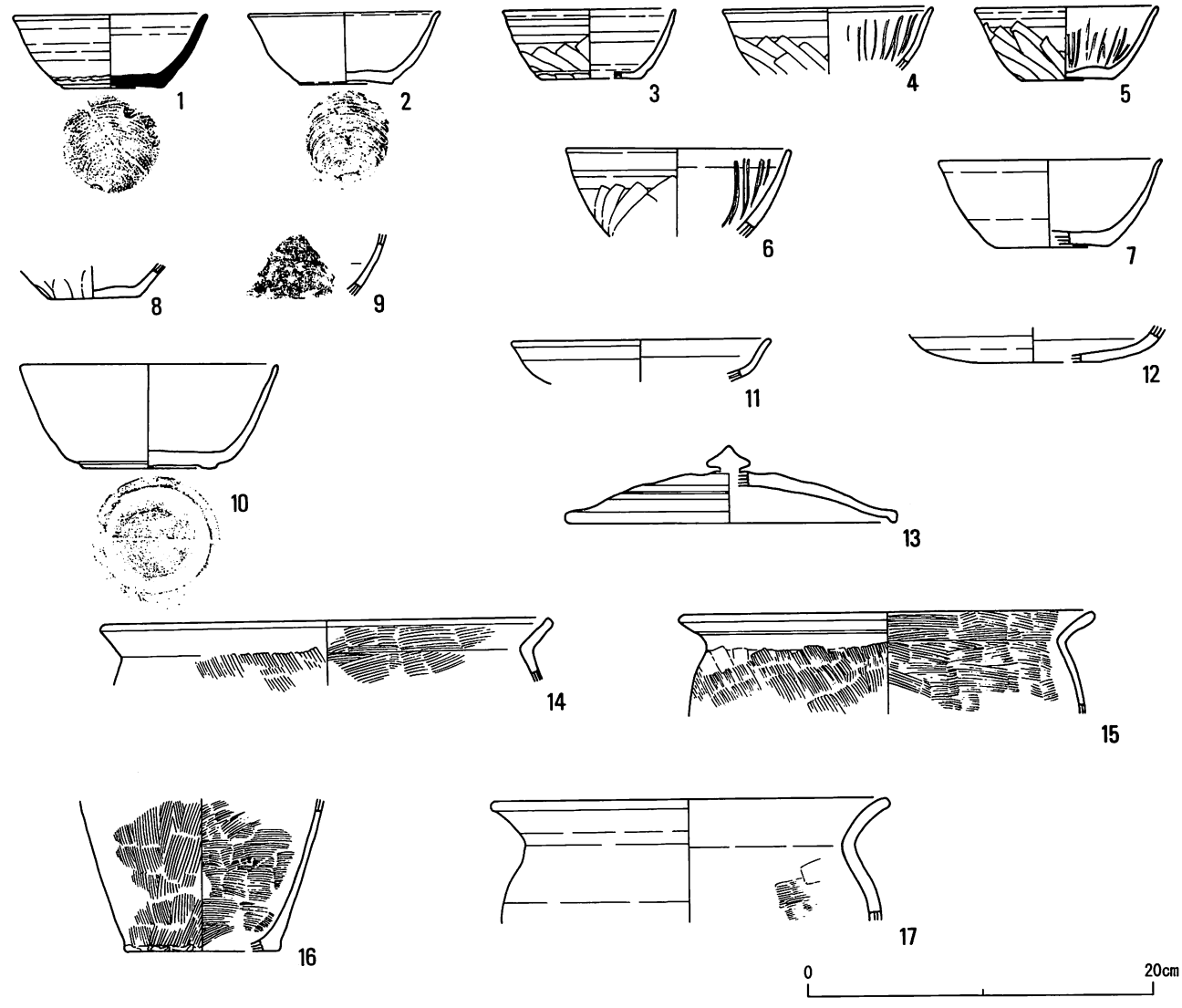
(出土遺物)　土師器では坏形土器、皿形土器、高台坏形土器、甕形土器、蓋坏を、須恵器では長頸壷形土器の口頸部と甕形土器の破片が出土している。本住居跡は、この発掘調査で確認された住居跡の中で、最も豊富で良好な土器資料を出土した住居跡である。とくに土師器の坏形土器は大量に出土しており、ほぼ同じ特徴を備えた土器群である。外面はロクロ調整後にヘラ削り、内面は暗文を施す。底部は糸切り痕を残すもの、残さないもの双方存在している。器形は緩く彎曲した立ち上がりを見せ、底径は小さいものが多い。



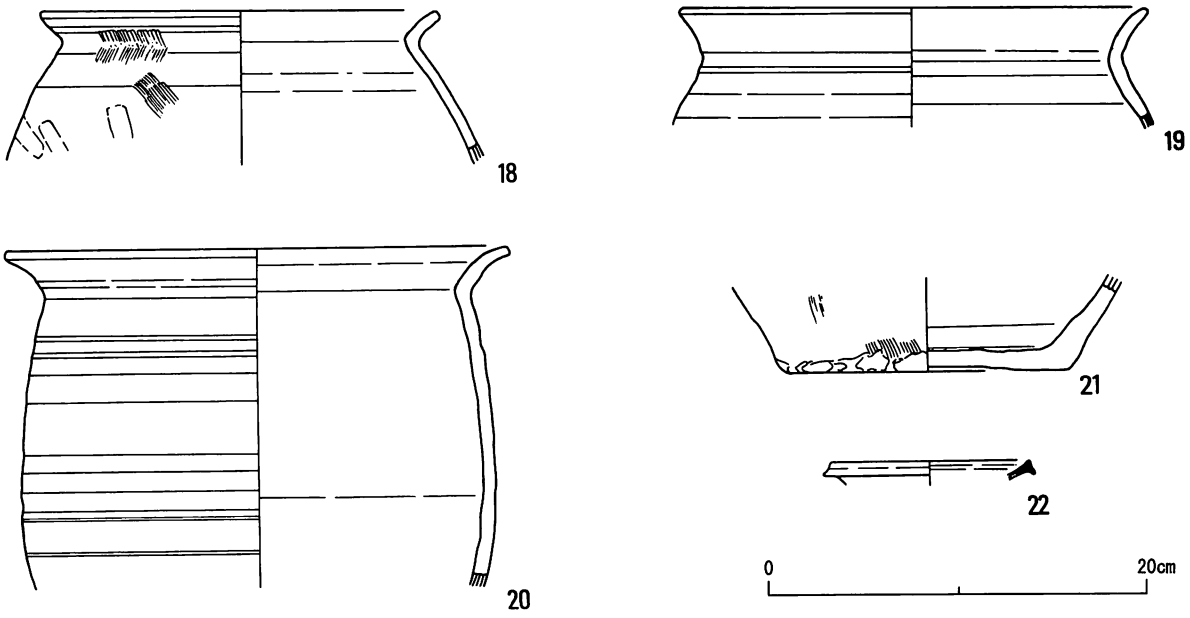
第29図　1号住居跡(S=1/80)



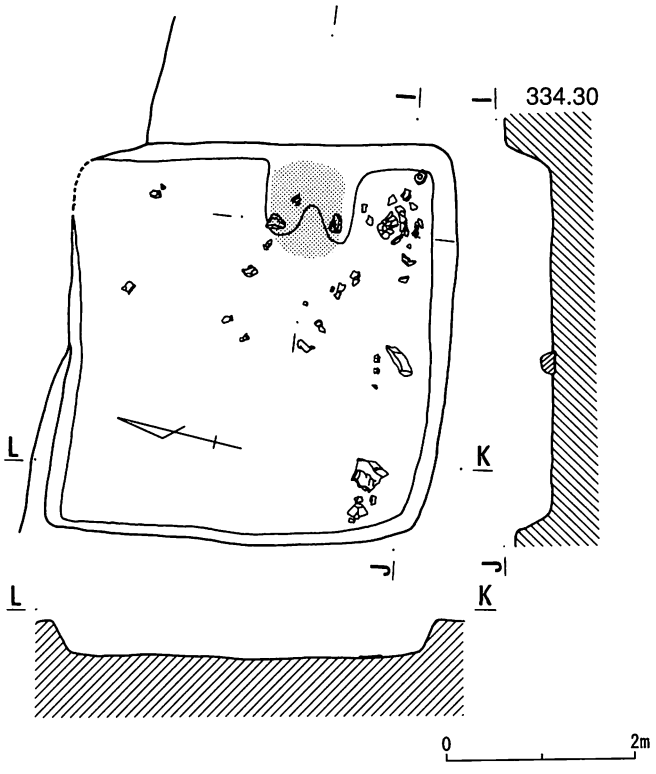
第30図　1号住居跡カマド(S=1/40)



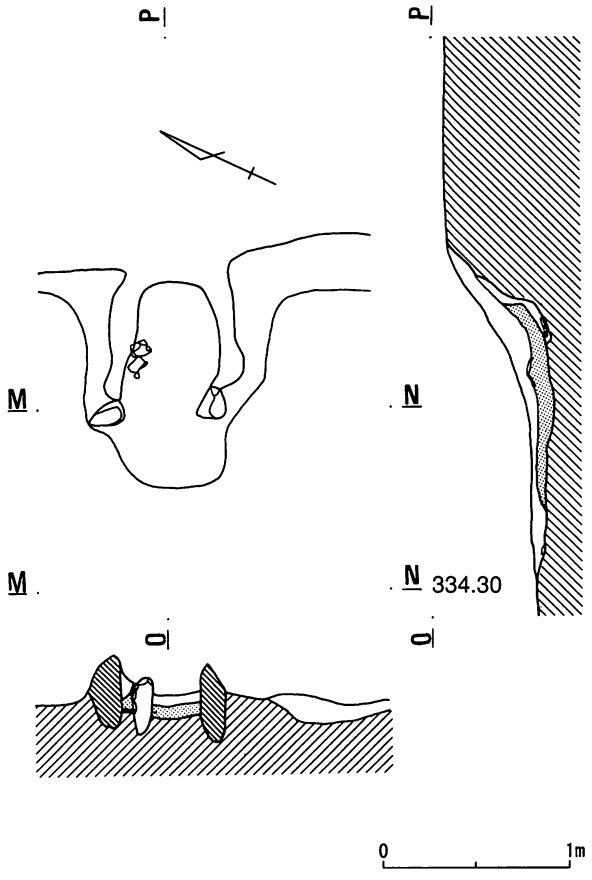
第31図　1号住居跡出土土器(1)(S=1/4)



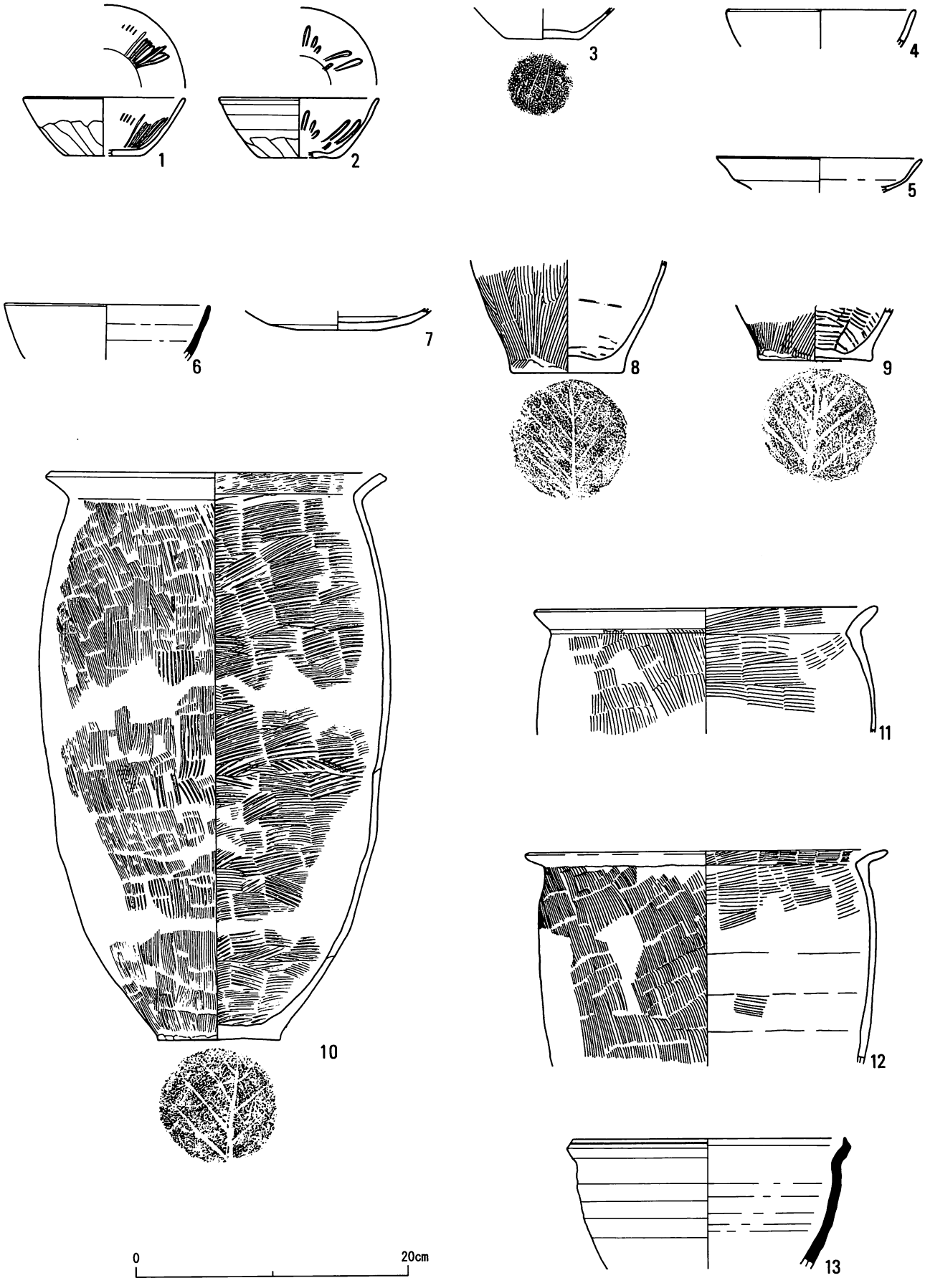
第32図　1号住居跡出土土器(2)(S=1/4)



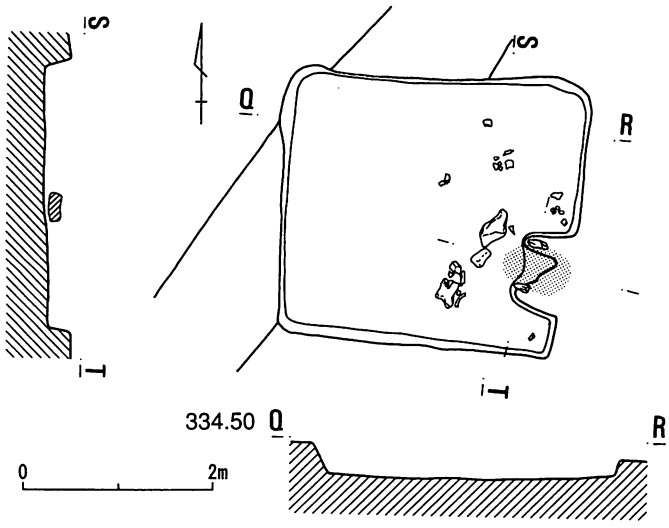
第33図　2号住居跡(S=1/80)



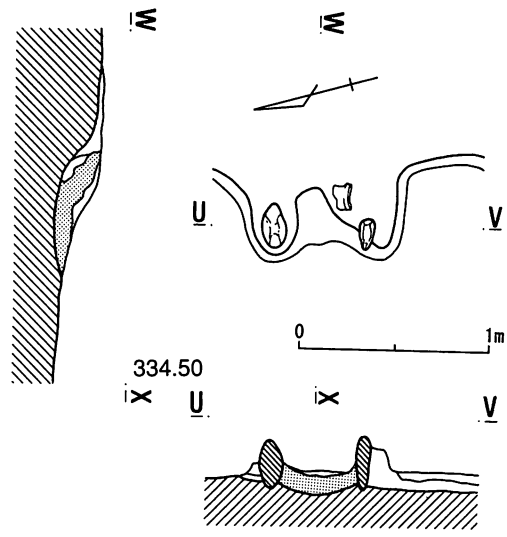
第34図　2号住居跡カマド(S=1/40)



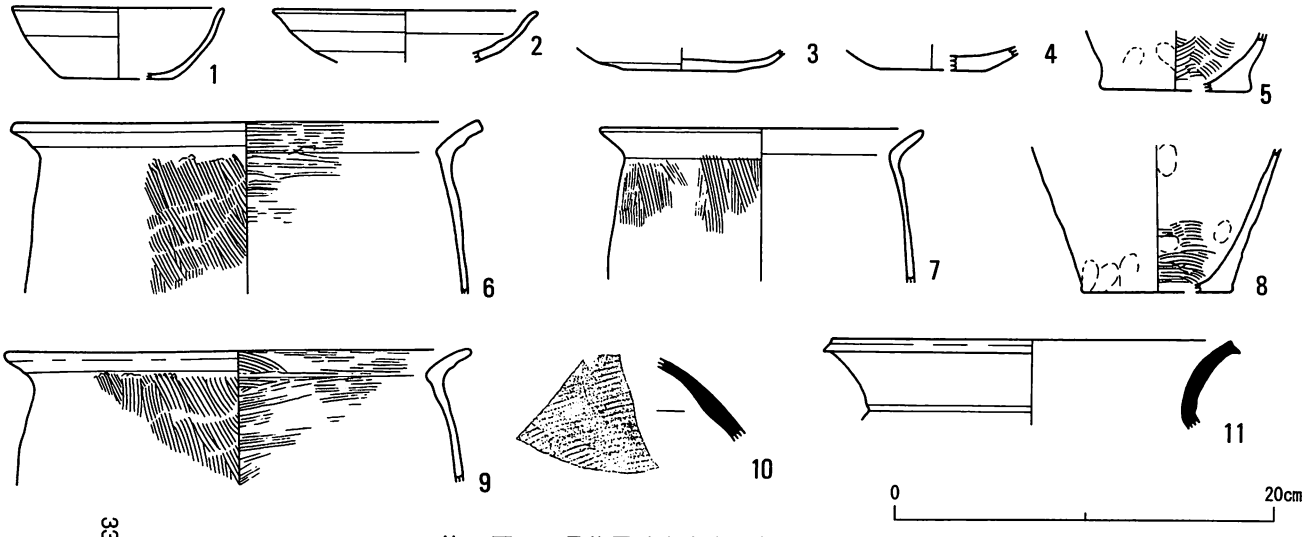
第35図　2号住居跡出土土器(S=1/4)



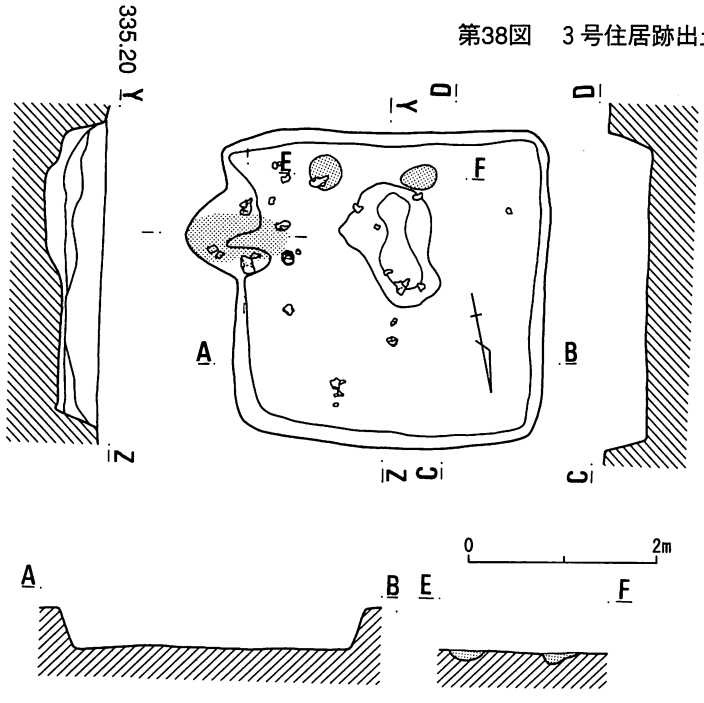
第36図　3号住居跡(S=1/80)



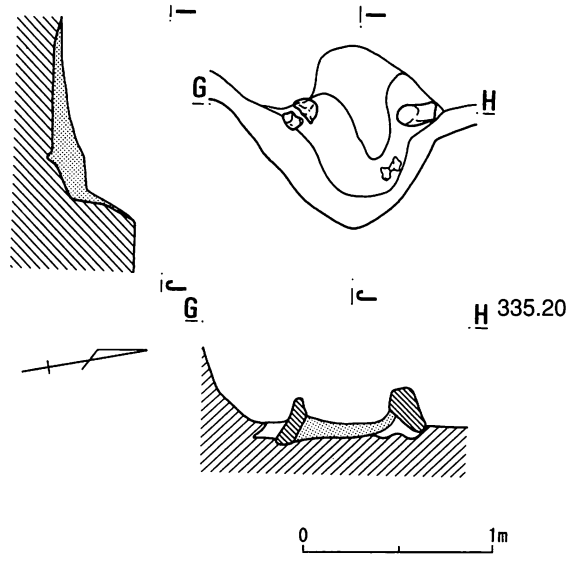
第37図　3号住居跡カマド(S=1/40)



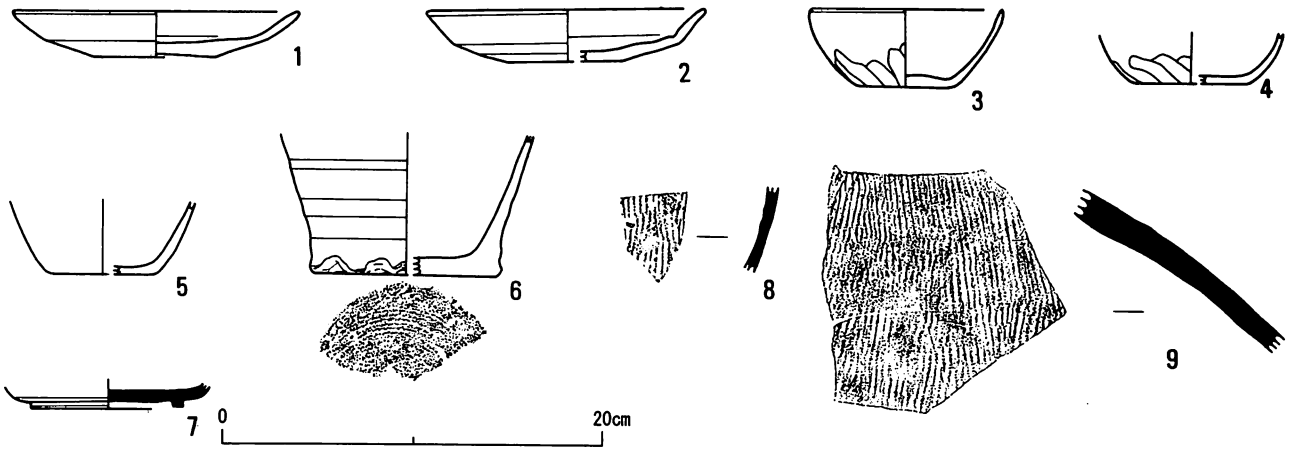
第38図　3号住居跡出土土器(S=1/4)



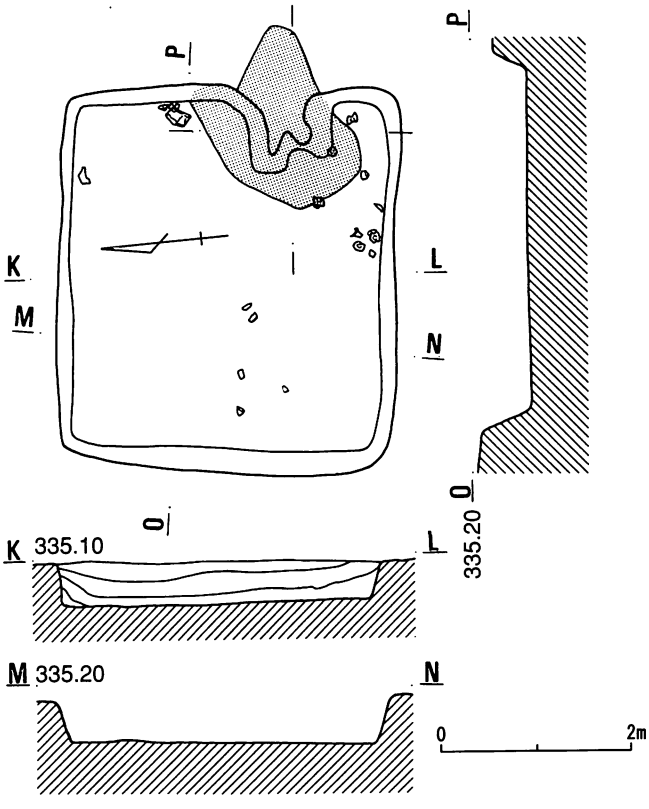
第39図　4号住居跡(S=1/80)



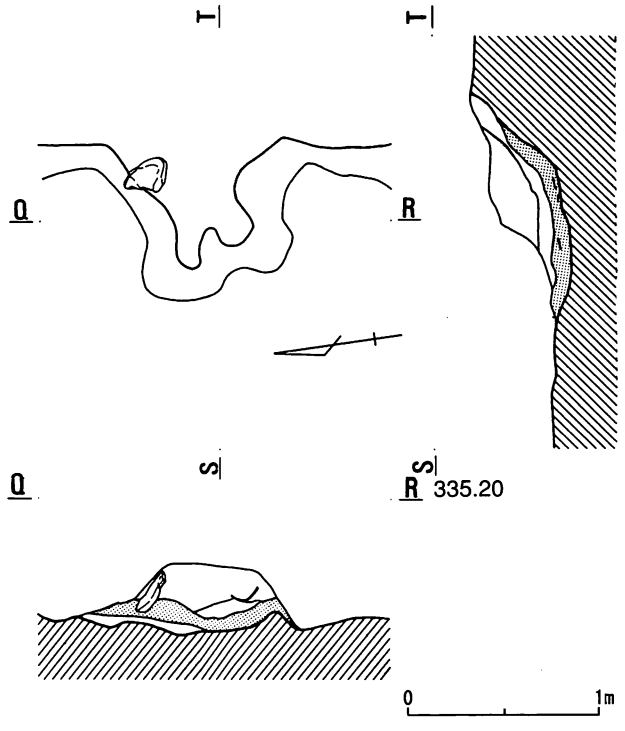
第40図　4号住居跡カマド(S=1/40)



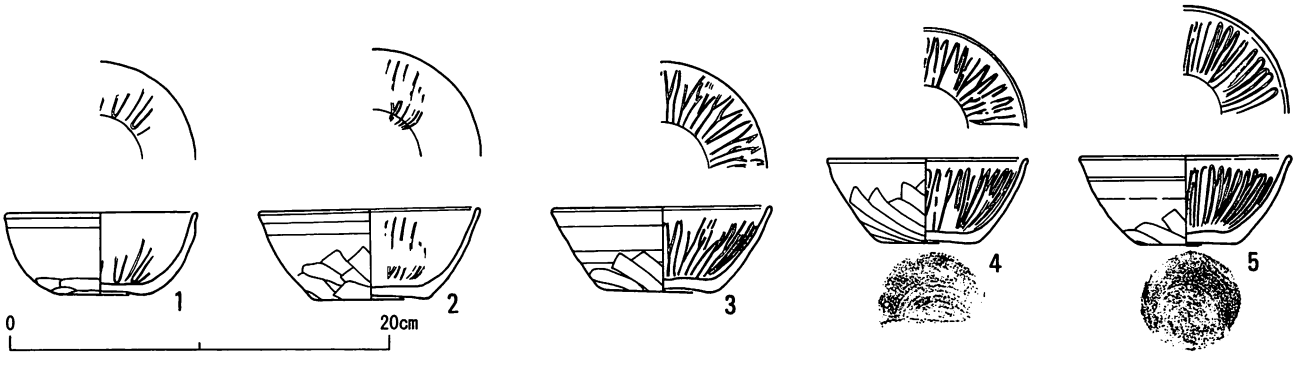
第41図　4号住居跡出土土器(S=1/4)



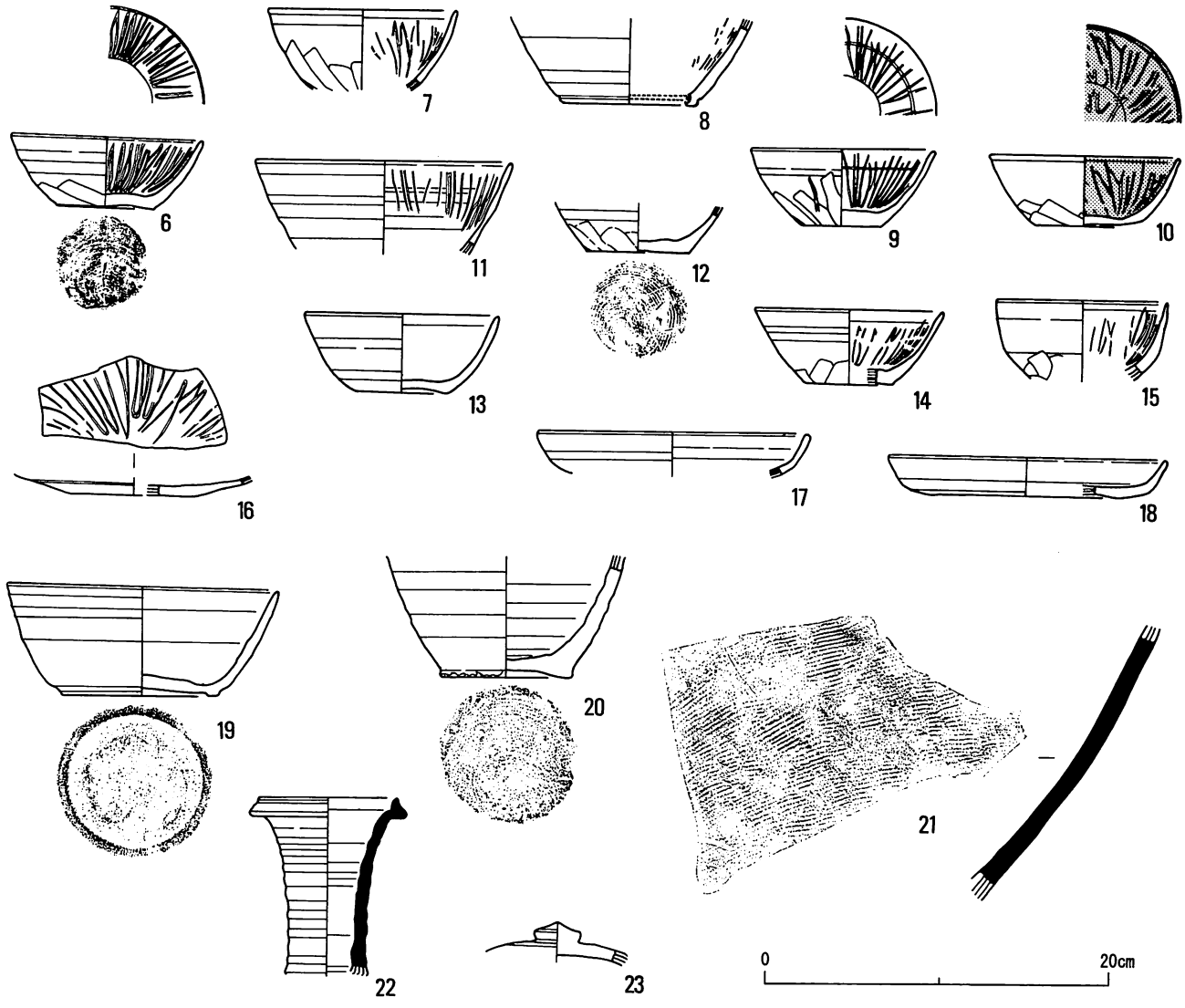
第42図　5号住居跡(S=1/80)



第43図　5号住居跡カマド(S=1/40)



第44図　5号住居跡出土土器(1)(S=1/4)



第45図　5号住居跡出土土器(2)(S=1/4)

(6) 6号住居跡(第46～48図)

(形状)　隅丸方形プランを呈する。

(規模)　東西355cm×南北405cmを測る。

(主軸)　N－94°－E

(床面)　ほぼ水平で平坦である。ピット等の施設は発見できなかった。

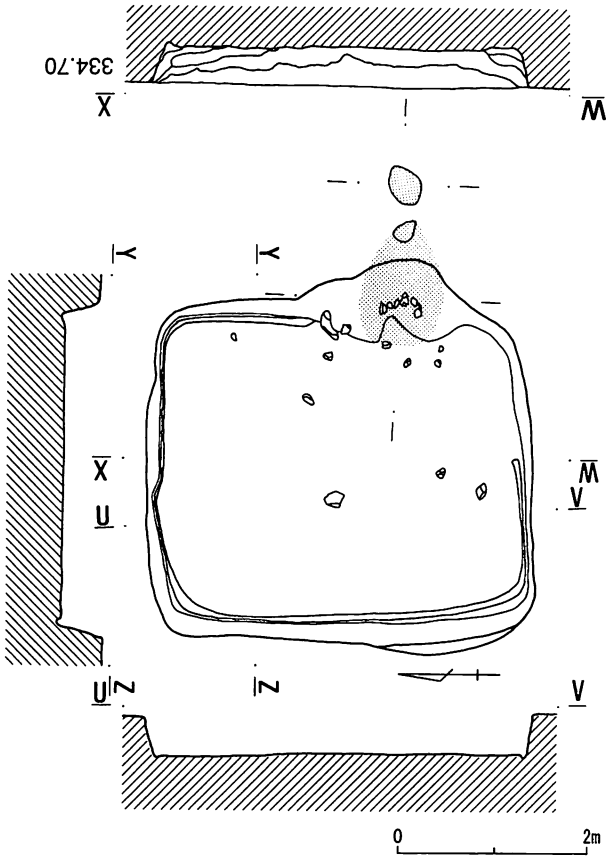
(壁)　壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は37cm～44cmを測る。

(柱穴)　確認できなかった。

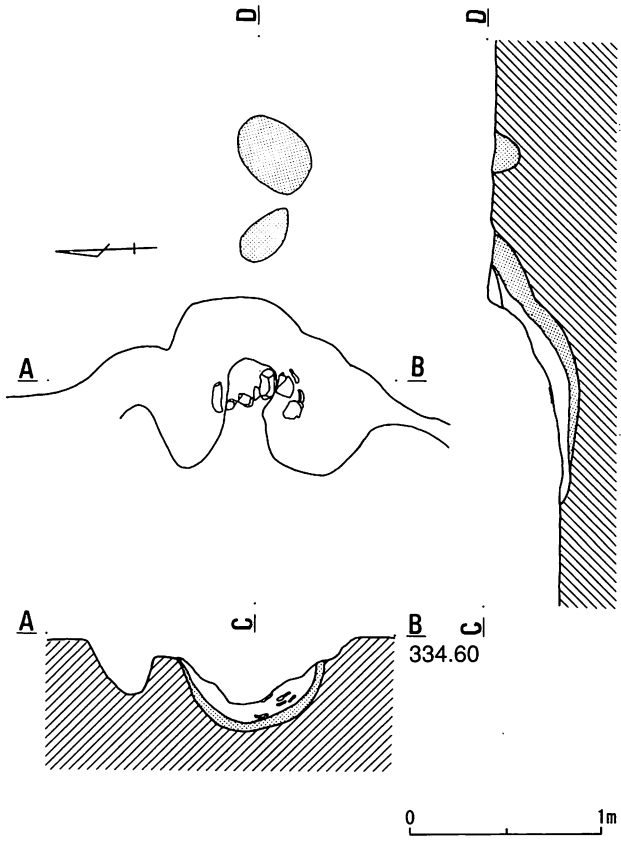
(周溝)カマド部分と南壁東半分の部分を除いて壁に沿って巡らされている。幅は2cm～12cm、深さは3cm～5cmを測る。

(カマド)　東壁の中央よりやや南側に設けられている。内部に石組等は確認できなかったし、煙道も残存状態は良くなっかた。カマドからやや離れた場所、住居跡の外側に焼土が2箇所見られるが、カマド本体との構造上から見て、煙道の一部を構成していたものと思われる。なお、図示はできなかったが、この焼土は北の端でほんの僅か2号炭焼窯跡に切られていた。カマドの焚口は床面より僅かに深くなっている。

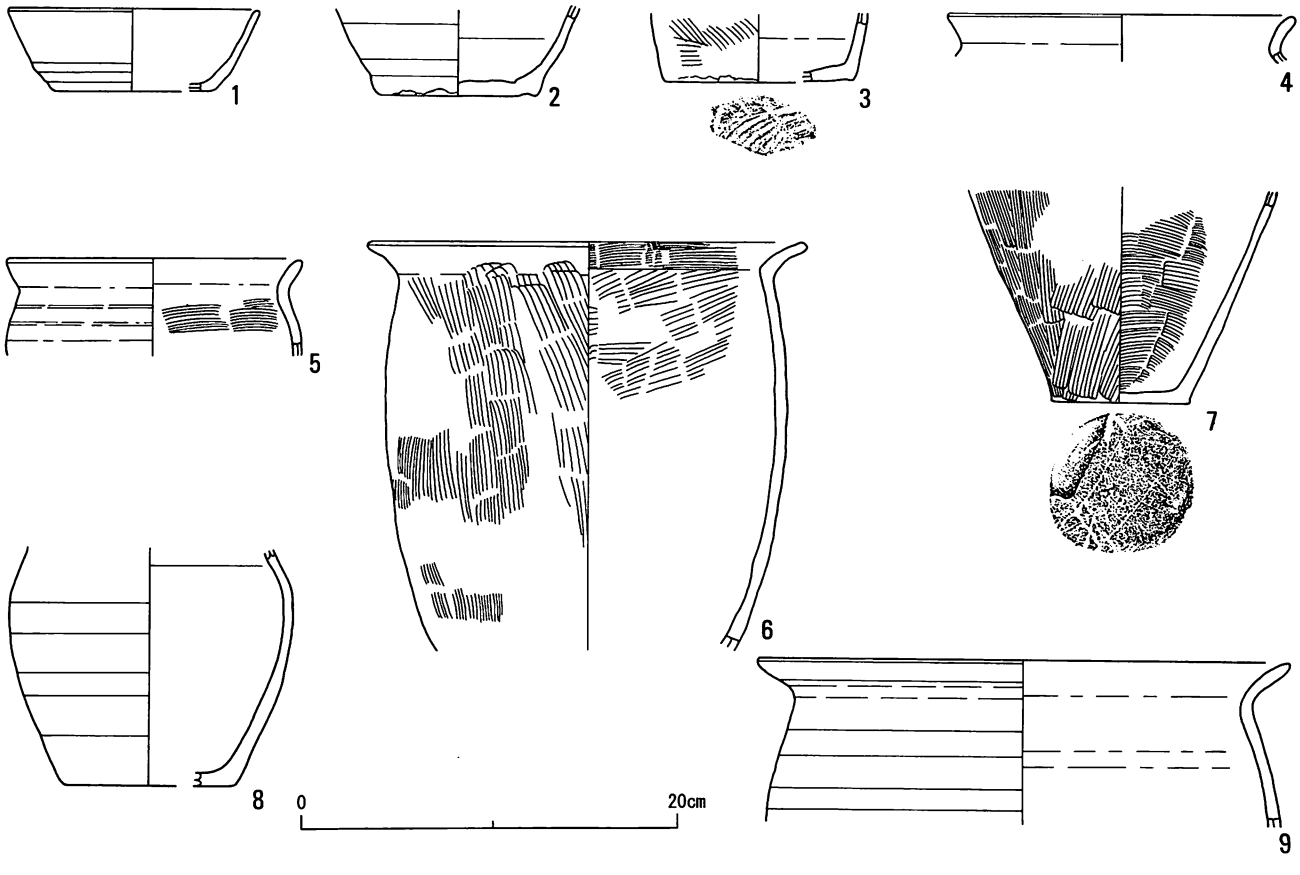
(出土遺物)　土師器の坏形土器と甕形土器を出土しているが、いずれも一括土器と言えるまとまったものではない。



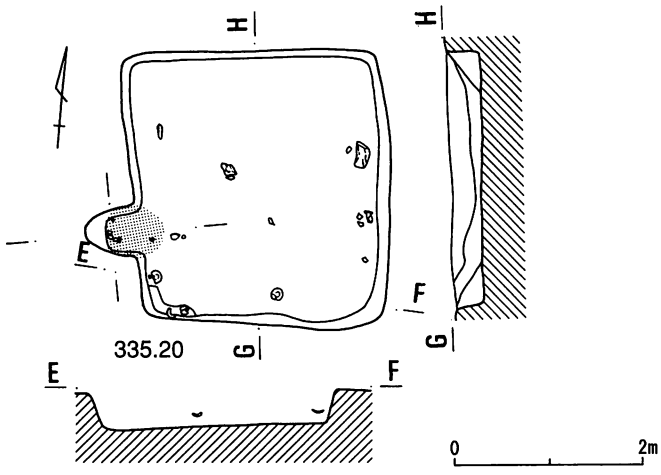
第46図　6号住居跡(S=1/80)



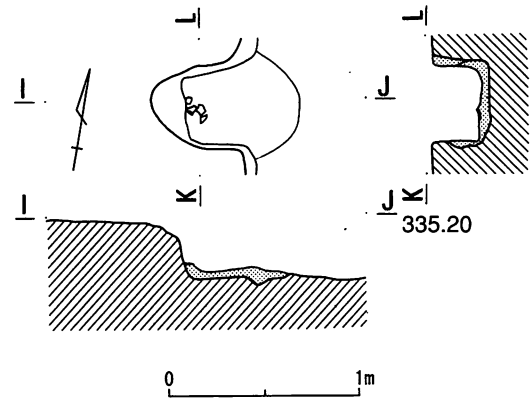
第47図　6号住居跡カマド(S=1/40)



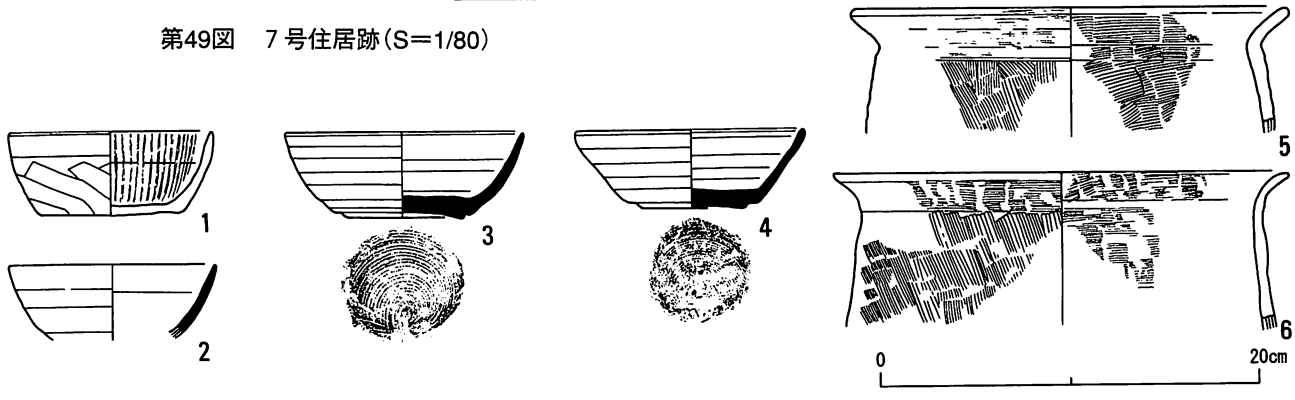
第48図　6号住居跡出土土器(S=1/4)



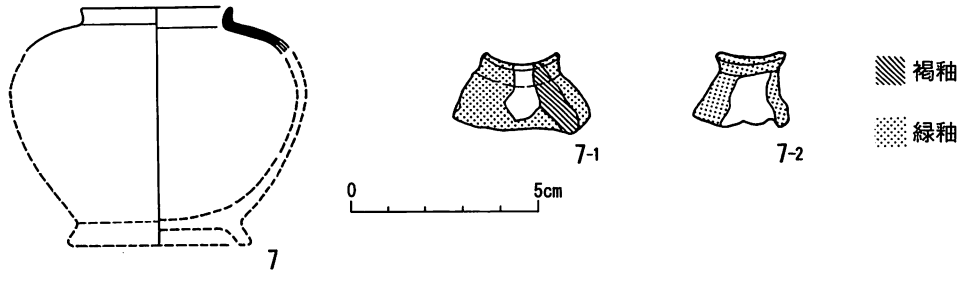
第49図　7号住居跡(S=1/80)



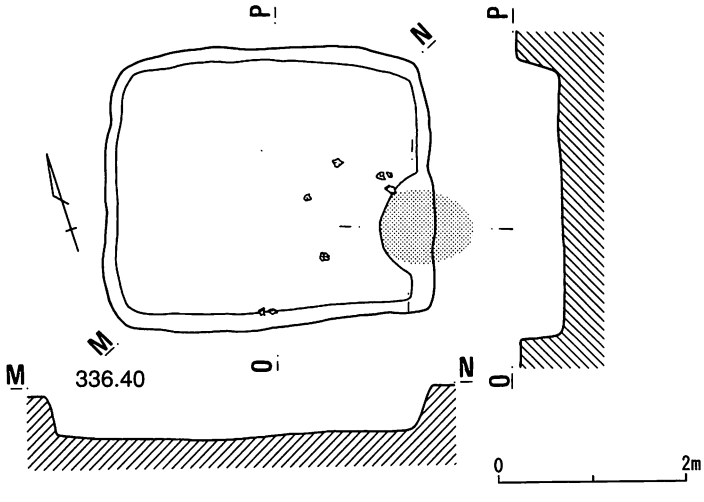
第50図　7号住居跡カマド(S=1/40)



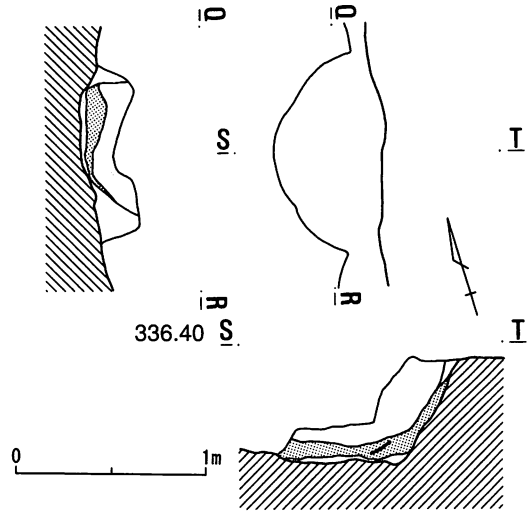
第51図　7号住居跡出土土器(1)(S=1/4)



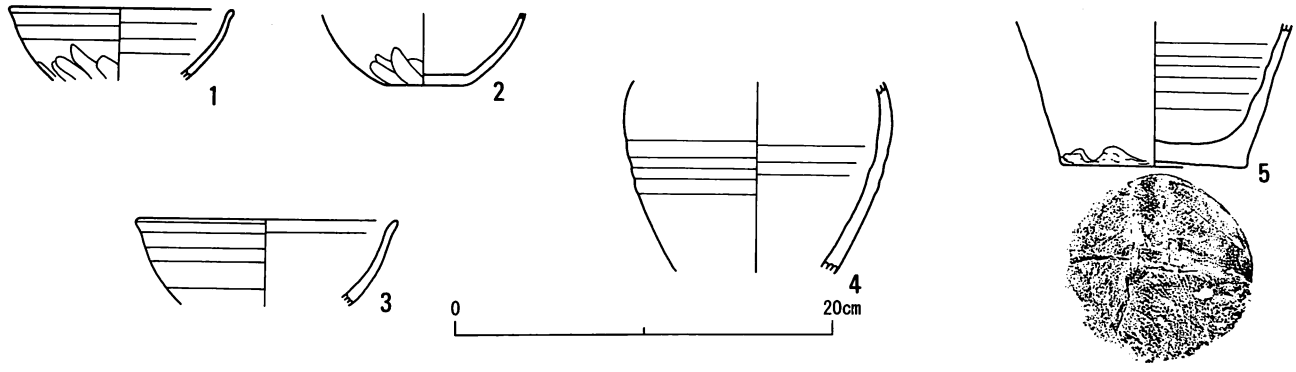
第52図　7号住居跡出土土器(2)(S=1/2)



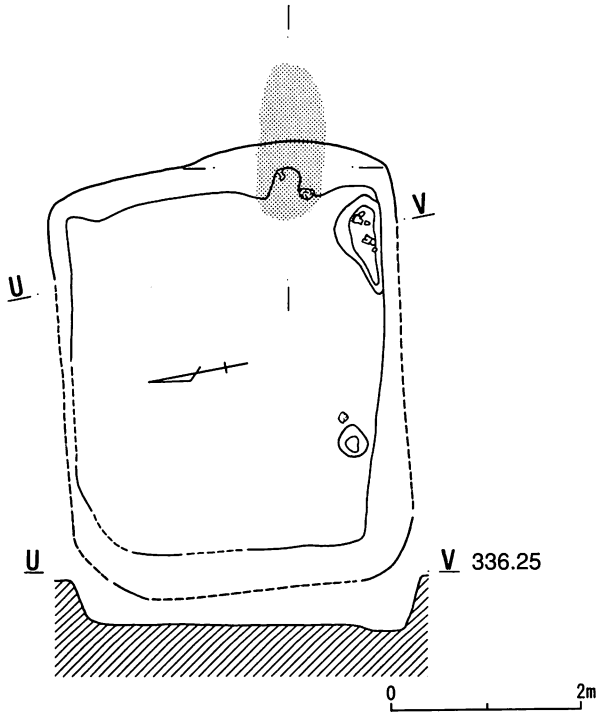
第53図　8号住居跡(S=1/80)



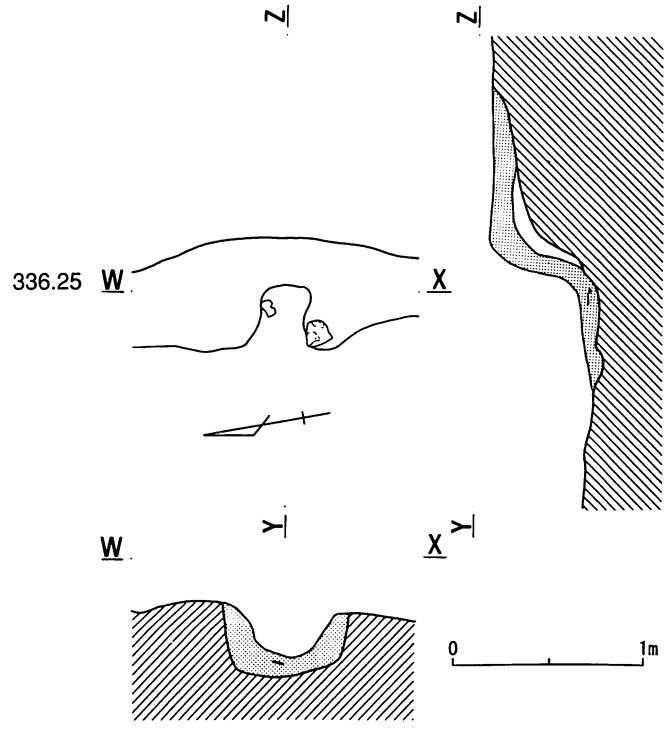
第54図　8号住居跡カマド(S=1/40)



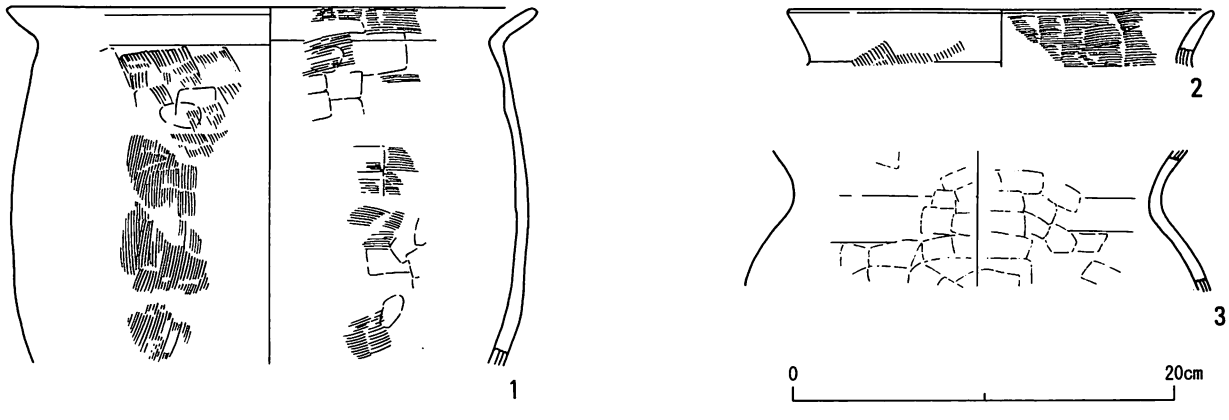
第55図　8号住居跡出土土器(S=1/4)



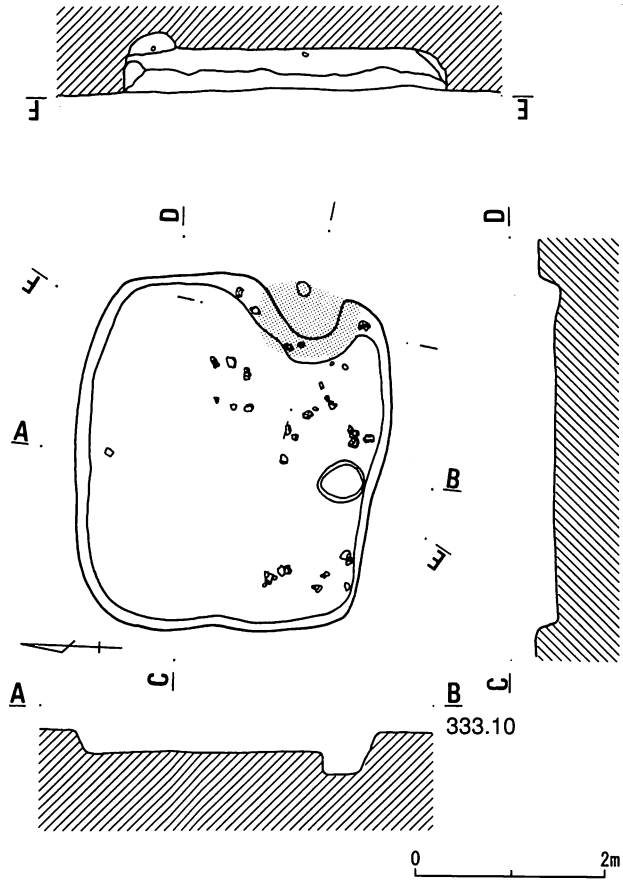
第56図　9号住居跡(S=1/80)



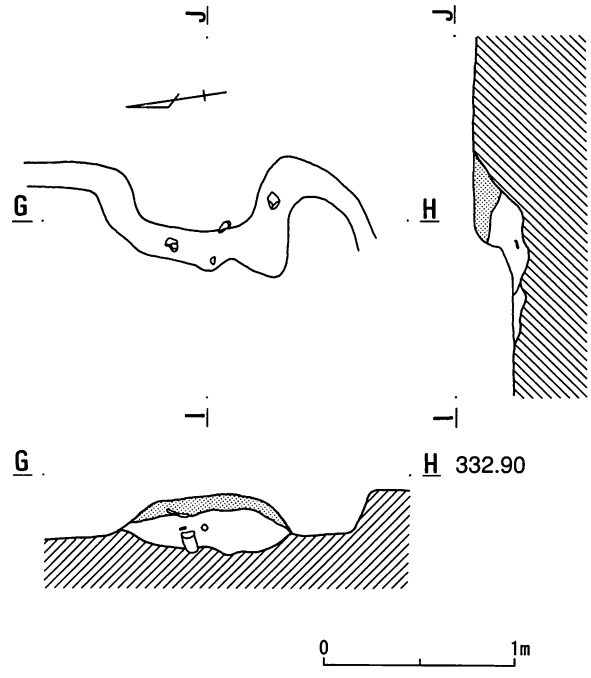
第57図　9号住居跡カマド(S=1/40)



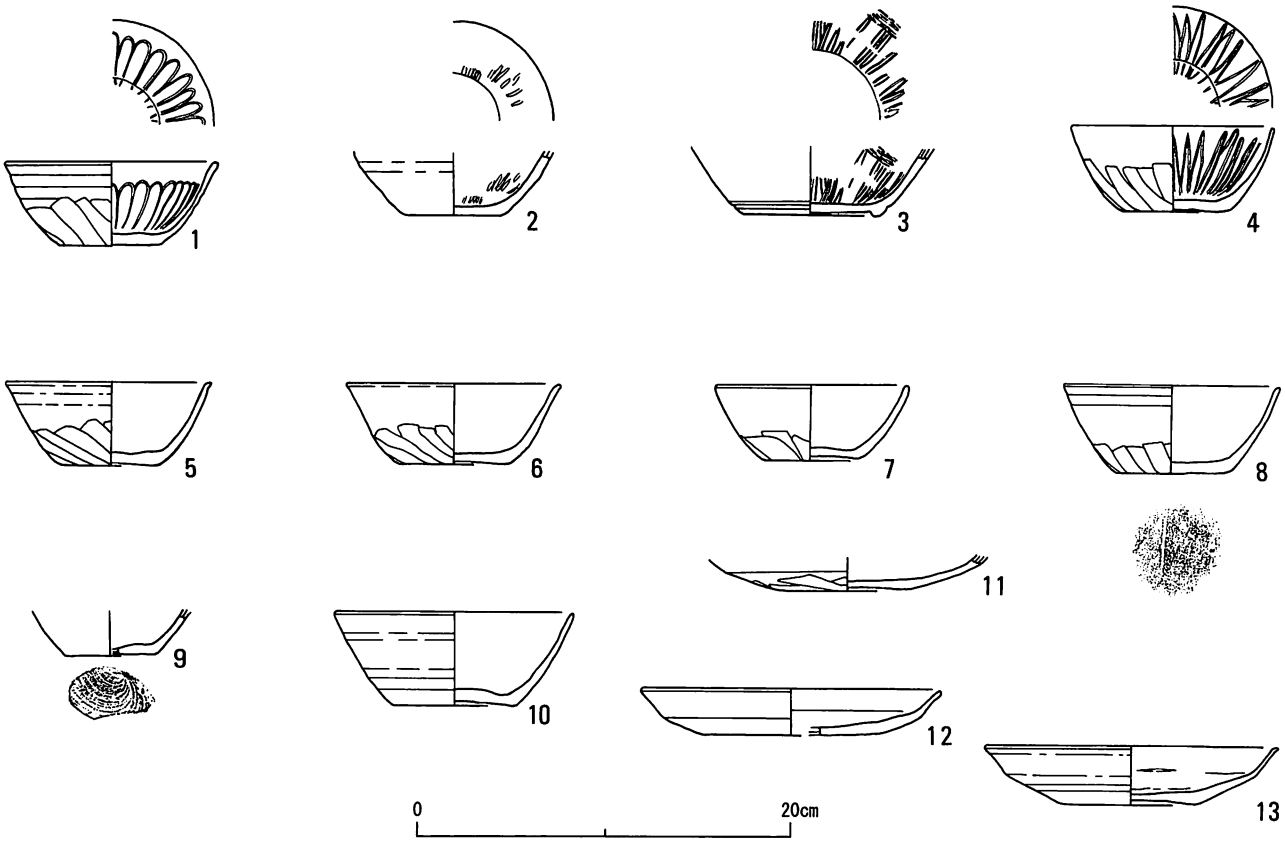
第58図　9号住居跡出土土器(S=1/4)



第59図　10号住居跡(S=1/80)



第60図　10号住居跡カマド(S=1/40)



第61図　10号住居跡出土土器(1)(S=1/4)

(7) 7号住居跡(第49～52図)

(形状) 隅丸方形プランを呈する。

(規模) 東西275cm×南北295cmを測る。一辺の長さが3mを切る本遺跡の中では飛び抜けて最も規模が小さい住居跡である。

(主軸) N－100°－W

(床面) ほぼ水平で平坦である。ピット等の施設は発見できなかった。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は28cm～36cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 南西の隅にわずかに確認できたが、他では全く確認できなかった。残っている部分の幅は10cm前後で深さは6cmを測る。

(カマド) 他の全ての住居跡と比べると本遺跡の中では極めて特殊な例である。つまり一般的な東カマドとは正反対となる住居跡西壁の南端の方に設けられている。内部に石組等は確認できなかったし、煙道は住居外部に60cmほど突出した張り出しのような形状を見せている。他の住居跡に比べて焼土の量も極めて少なく、簡単に作られた上に使用頻度も低いようである。構造的にも焚口が床面とほとんど変わらないレベルになっている。

(出土遺物) ほぼ完全な形で土師器の坏形土器1個体と須恵器の坏形土器2個体が床面から出土している。土師器の坏形土器は外面ヘラ削りで底径が口径と比較してやや大きめの形状である。他に須恵器の坏形土器の大型破片と土師器の甕形土器片が出土している。本住居跡での特筆すべき出土遺物は、床面から2箇所に離れて出土した奈良三彩の小型壷形土器の破片である。奈良三彩については、本県では韮崎市宮ノ前遺跡での出土例に続く2例目となるものである。2片は接合できなかったが、共に同一個体の一部と考えて間違いないものであろう。

(8) 8号住居跡(第53～55図)

(形状) 隅丸方形プランを呈する。

(規模) 東西290cm×南北340cmを測る。

(主軸) N－106°－E

(床面) ほぼ水平で平坦である。ピット等の施設は発見できなかった。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45cm～48cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(カマド) 東壁の中央よりやや南側に設けられている。内部に石組等は確認できなかったし、煙道の状態も不明で、全体的な残存状態は極めて悪い。焚口が床面より僅かに深くなっている。

(出土遺物)カマドの周辺から土師器の破片が僅かに出土したのみである。土師器の坏形土器と甕形土器が出土している。坏形土器の内面には暗文が見られるものは無い。

(9) 9号住居跡(第56～58図)

(形状) 3号炭焼き窯跡と広い範囲で重複しているために、東壁を除く他の壁で多くの部分でプランを明確に確認することはできなかった。しかし残存する部分から推測すれば、隅丸方形プランを呈するものと思われる。炭焼き窯跡は、この住居の廃絶後に構築されたものである。

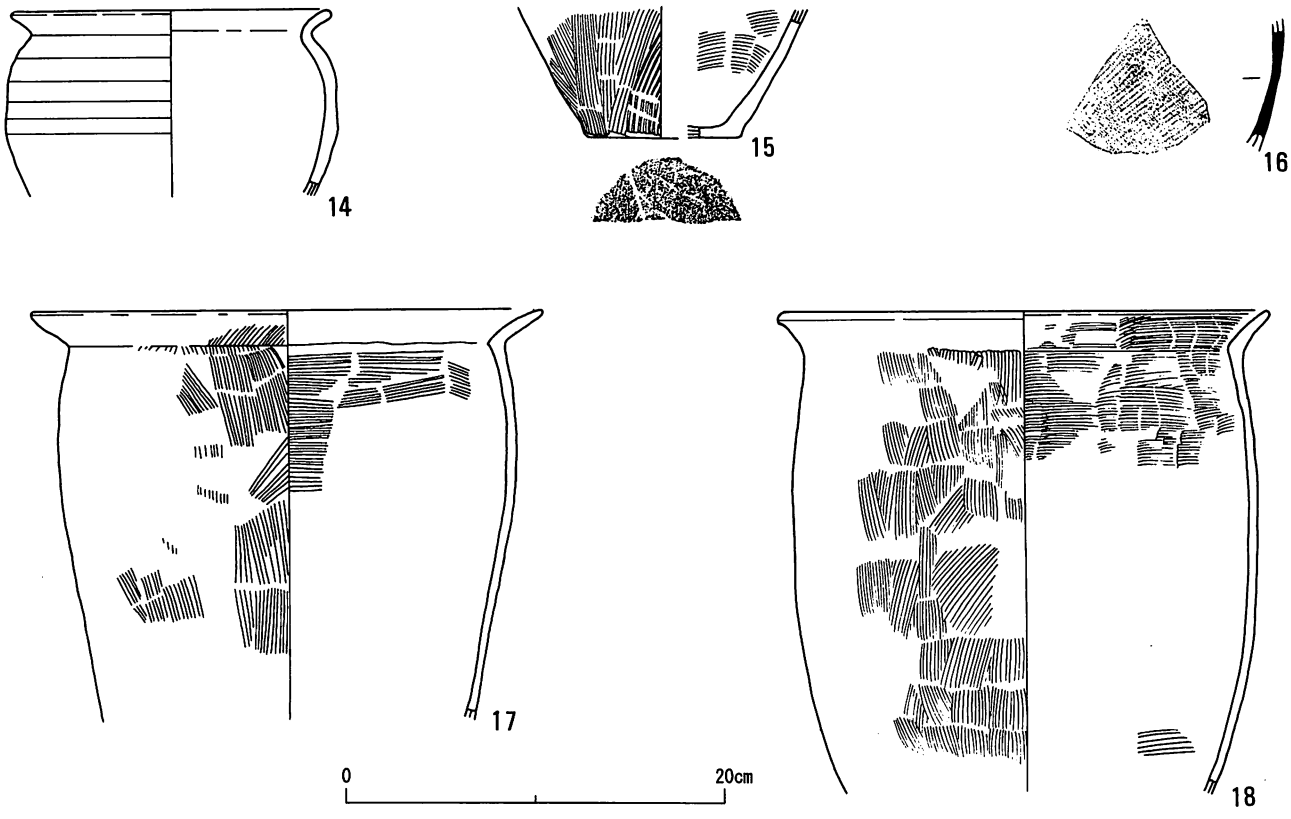
(規模) 推定で、東西455cm×南北355cmを測る。

(主軸) N－102°－E

(床面) 炭焼き窯跡の底面が住居跡の床面まで到達していなかったために破壊から免れた。床面はほぼ水平で平坦である。カマドの南、住居跡南東隅に100cm×50cm深さ16cmほどのピットが確認された。他に南壁沿いに中央よりやや西寄りに30cm×35cm深さ16cmのピットも確認できた。

(壁) 残存する範囲で、壁高は47cm～55cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

(柱穴) 確認できなかった。



第62図　10号住居跡出土土器(2)(S=1/4)

(周溝)　確認できなかった。

(カマド)　東壁でも南東隅に近いところに設けられている。内部に石組等は確認できなかったし、煙道も全く痕跡をとどめていない。焚口が床面より僅かに深くなっている。

(出土遺物)　出土遺物が極めて少ない住居跡である。土師器の甕形土器の破片が3点ほど出土したのみである。

(10)10号住居跡(第59～62図)

(形状)　形は整っていないものの、隅丸方形プランと考えられる。

(規模)　東西375cm×南北330cmを測る。

(主軸)　N－100°－E

(床面)　ほぼ水平で平坦である。南壁の中央部分に接して45cm×50cm深さ21cmのピットが1基確認された。

(壁)　壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cm～26cmを測る。

(柱穴)　確認できなかった。

(周溝)　確認できなかった。

(カマド)　東壁の南半分の広い範囲にカマドと考えられる焼土を伴う土の盛り上がりが認められる。内部には石組等は確認できなかったし、煙道も確認できなかった。カマド内部に上部が欠けた細長い石が立てて埋められていたが、支柱と考えて良いものであろう。

(出土遺物)　多量の土師器を出土している。坏形土器、削りだし高台坏形土器、皿形土器、甕形土器があり、須恵器は甕形土器の破片が1個のみである。坏形土器は底径が口径に比べて大きめの特徴を有する一群であり、外面はヘラ削り整形が施されている。内面は暗文があるものと無いものが共存する。皿形土器は底部寄りに回転ヘラ削りが施され、形状で一段屈折部が生じるものである。甕形土器は口縁が肥厚せず小さく外反する形状のもので内外面に刷毛調整が施される。

第2節　掘立柱建物跡

(1) 1号掘立柱建物跡(第63図)

(規模)　東西2間(340cm)×南北2間(320cm)。ピットの深さは26cm～47cmを測る。

(柱間寸法)　東西方向、南北方向共に144cm～190cmの範囲で設けられている。

(主軸)　N－4°－E

(備考)　主柱穴の外側に3個所ピットが見られるが、建物跡との関連は不明である。出土遺物は無かった。

(2) 2号掘立柱建物跡(第64図)

(規模)　東西2間(340cm)×南北2間(360cm)。ピットの深さは34cm～46cmを測る。

(柱間寸法)　東西方向、南北方向共に160cm～204cmの範囲で設けられている。

(主軸)　N－1°－E

(備考)　南辺の中間に掘り込まれたピットは、その位置から考えて、本建物跡に伴わない、ものかもしれない。本建物跡の一部は試掘時のトレンチで削平されているために、南辺の中央部分の柱穴が既に失われている可能性もある。出土遺物は無かった。

(3) 3号掘立柱建物跡(第65図)

(規模)　東西2間(324cm)×南北2間(290cm)。ピットの深さは19cm～37cmを測る。

(柱間寸法)　東西方向、南北方向共に144cm～190cmの範囲で設けられている。

(主軸)　N－1°－W

(備考)　建物跡の南東部分が試掘時のトレンチで削られているため、南東隅に位置するピットが確認できなかった。出土遺物は確認できなかった。

(4) 4号掘立柱建物跡(第66図)

(規模)　東西3間(564cm)×南北2間(380cm)。ピットの深さは19cm～37cmを測る。

(柱間寸法)　東西方向、南北方向共に172cm～204cmの範囲で設けられている。

(主軸)　N－68°－W

(備考)　東側で主軸上でピットが1基だけ突出して設けられている。この掘立柱建物跡は、他の3基の建物跡が主軸をほぼ真北に向けているのに対して、北西に近い方向を向いている点や間取りなどで相違点が見られる。突出部したピットを梯子等などの施設の基部と考えれば、高床式の建物跡である可能性が強いと思われる。出土遺物は確認できなかった。

第3節　炭焼窯跡

(1) 1号炭焼窯跡(第67図)

(形状・規模)　南東側が排水用の溝によって削られているが、残る部分の規模は255cm×155cmを測る。長楕円形プランを呈するものと思われる。遺構の深さは確認面から最深24cmを測る。

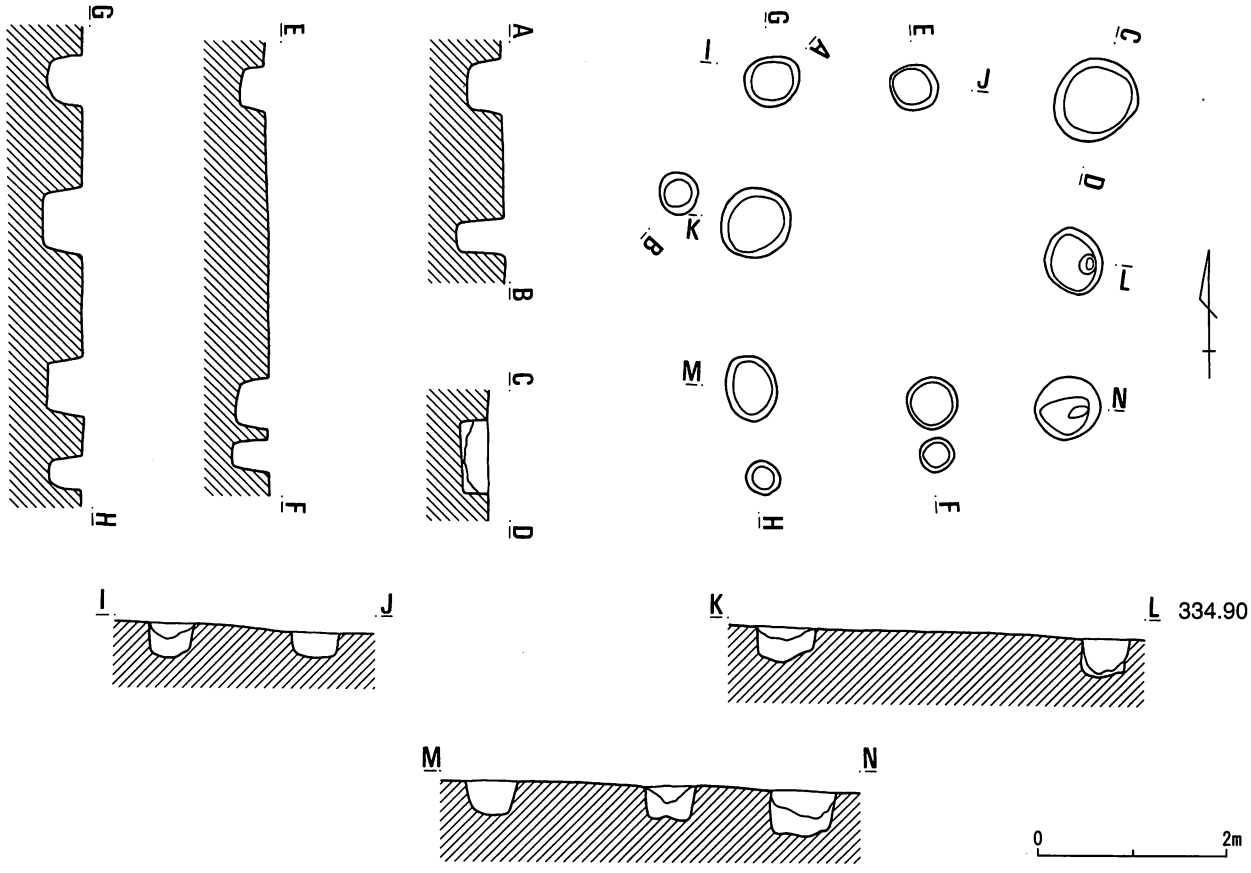
(主軸)　N－55°－W

(構造)　底面に溝を3条平行に掘り込んでいる。覆土は2層で、底面に接する下層は木炭の破片が一面に敷き詰められたような状態であった。底面には所々焼土も形成されている。上層は木炭片が混ざる暗褐色土層であった。溝の中だけ特に炭が濃いとか多いとかという事実は確認できなかった。出土遺物は無い。

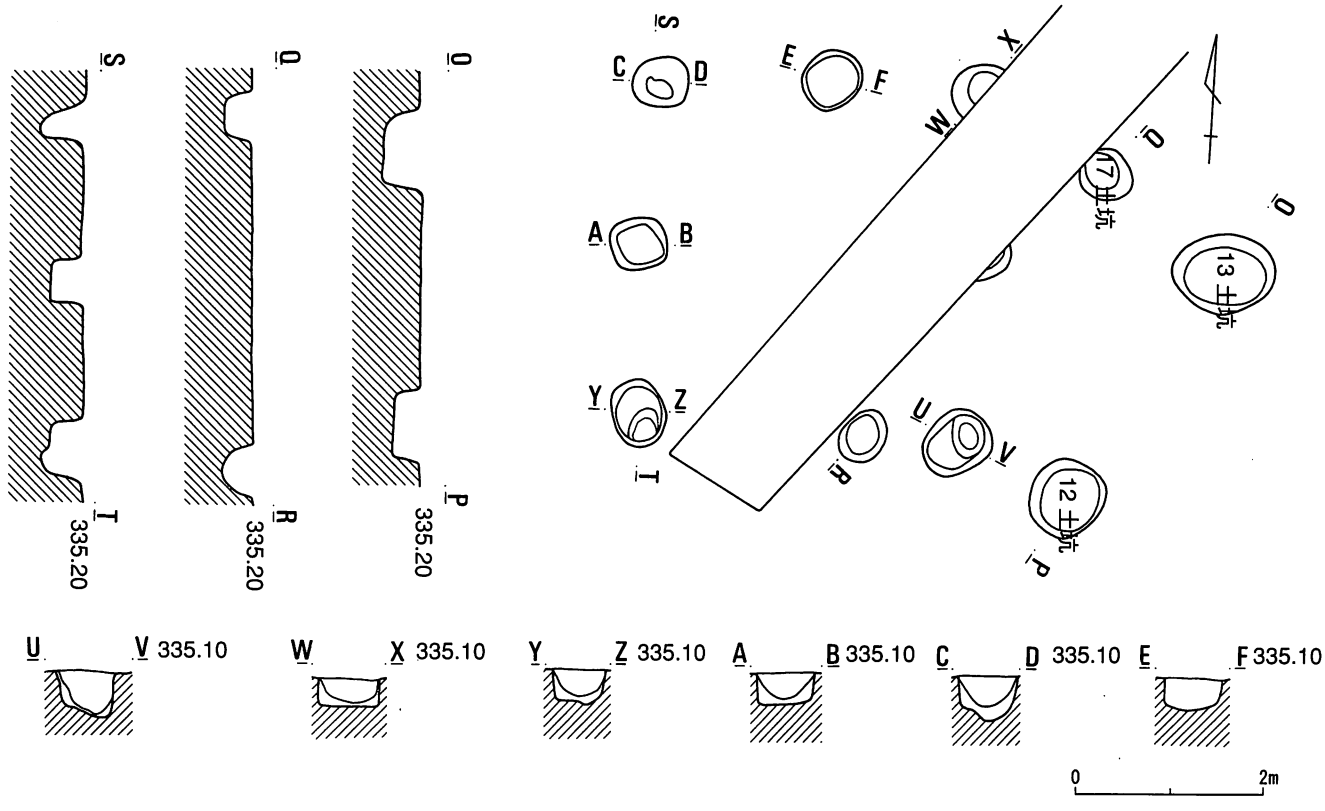
(2) 2号炭焼窯跡(第68図)

(形状・規模)　東西110cm×南北283cmを測る長楕円形プランを呈する。北端がわずかに突出した形状を示す。

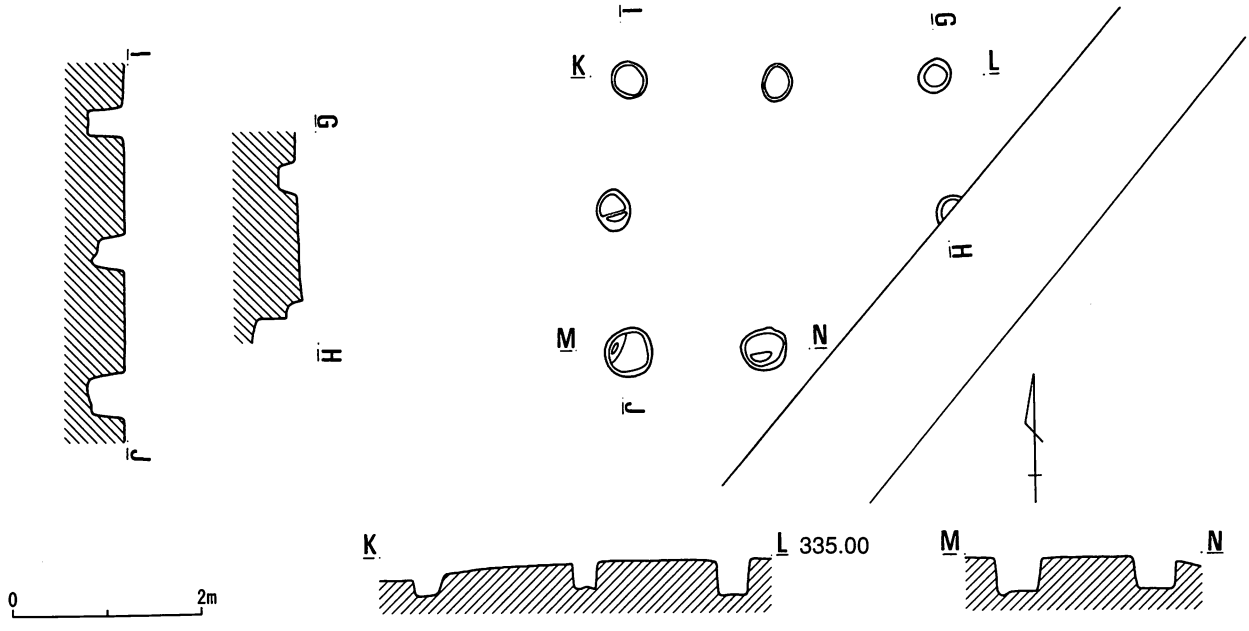
(主軸)　N－19°－W



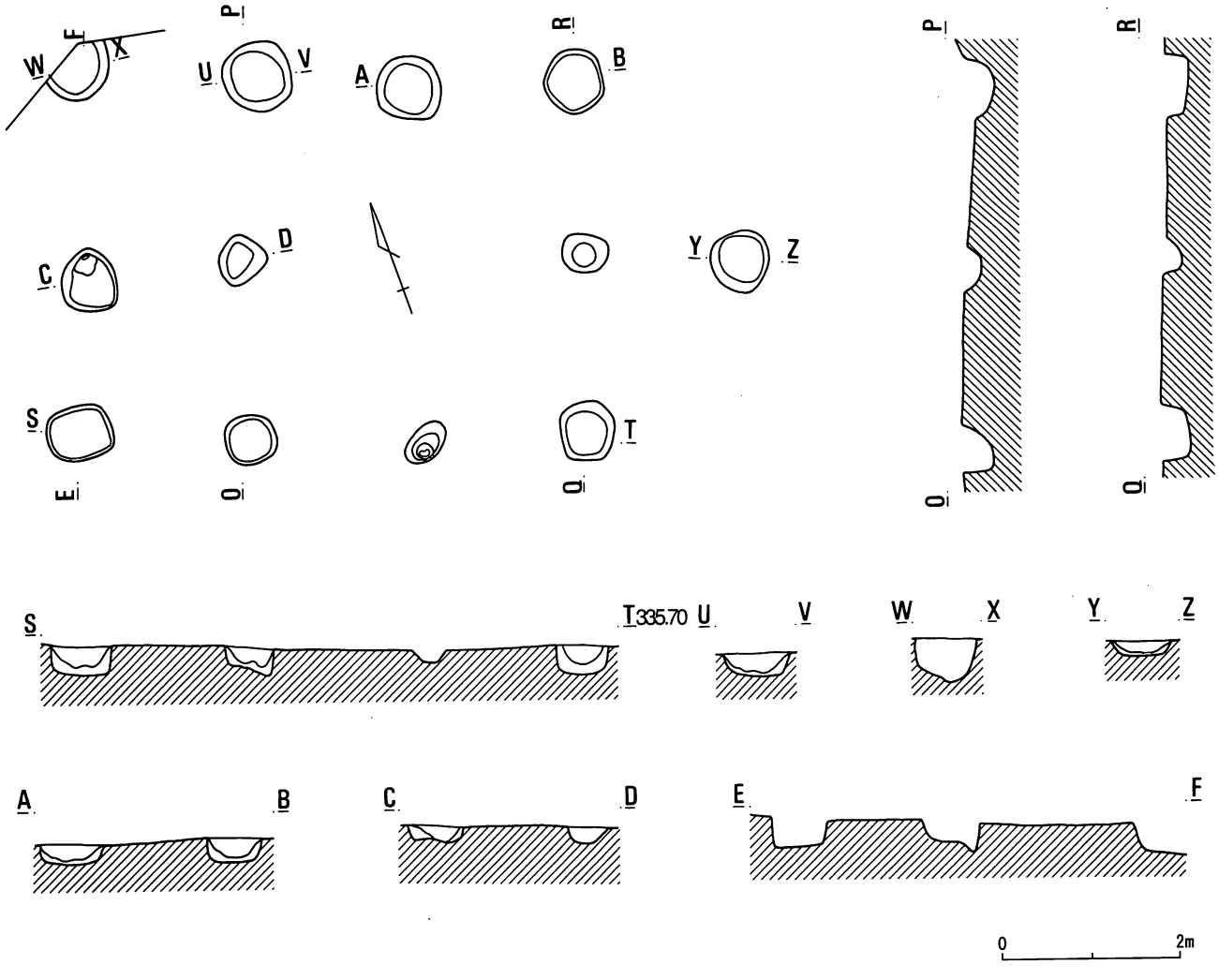
第63図　1号掘立柱建物跡(S=1/80)



第64図　2号掘立柱建物跡(S=1/80)



第65図　3号掘立柱建物跡(S=1/80)



第66図　4号掘立柱建物跡(S=1/80)

（構造）　底面はほぼ平坦で水平であるが、北端の突出部分のところが一段高くなってテラス状になっており、そのテラスの南側の底面が、やや他の場所より深くなっている。遺構の深さは確認面から最深21cmを測る。底面に溝を３条平行に掘り込んでいる。覆土は、１号炭焼窯跡の場合とほぼ同様で、２層に分けられ、底面に接する下層は木炭の破片が一面に敷き詰められたような状態であった。底面には所々焼土も形成されている。上層は木炭片が混ざる暗褐色土層であった。出土遺物は無い。６号住居跡のカマド煙道をほんのわずか切っている。

(3) ３号炭焼窯跡（第69図）

（形状・規模）　平安時代の９号住居跡の上に後から重複して作られた遺構である。そのため正確な形状を掘り出すことはできなかったが、セクションベルト等からプランを推定することができた。規模は東西250cm×南北505cmを測り、隅丸五角形プランを呈するものと思われる。北側が三角形に突出している。遺構の深さは確認面から最深35cmを測る。

（主軸）　N－4°－E

（構造）　１号炭焼窯跡と同様で底面に溝を３条平行に掘り込まれているが、本来はもっと多くの溝が存在していたと思われる。覆土も１号・２号と同様で２層に分けられ、底面に接する下層は木炭の破片が一面に敷き詰められたような状態であった。底面には所々焼土も形成されている。上層は木炭片が混ざる暗褐色土層であった。溝の中だけ特に炭が濃いとか多いとかという事実は確認できなかった。出土遺物は無い。

第４節　土坑（第70～74図）

本遺跡からは62基の土坑が発掘されている。しかしその形状や規模は個々まちまちである上、時期決定可能な出土遺物も全く存在しない。一部に建物跡の存在を思わせる配列が見られるものもあるが（第73図）、積極的にその存在を肯定するまでには至らなかった。

発見された土坑の分布状況を見ると、調査区全体に分散しているわけではなくて、調査区の北東隅で２号住居跡の西側、調査区南で３号溝状遺構南側のおよそ２個所に集中している。

上記のとおり出土遺物が無いために直接の時期決定は不可能であるが、覆土の状況は掘立柱建物跡の竪穴の覆土に類似しており、平安時代以降のものであると思われる。

第５節　溝状遺構

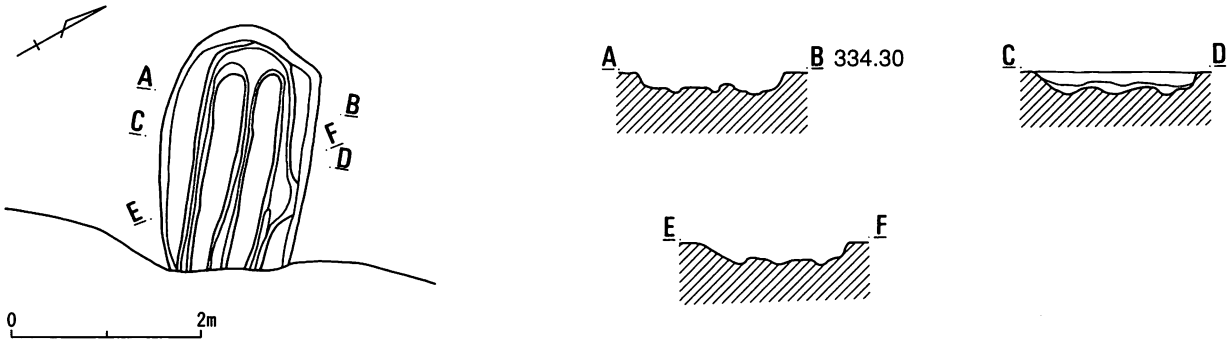
２区では７条の溝状遺構が発掘された。この中でその時期が限定できるものは唯一１号溝状遺構のみであり、他のものについては出土遺物も無く、時期決定は困難であった。

(1) １号溝状遺構（第76図）

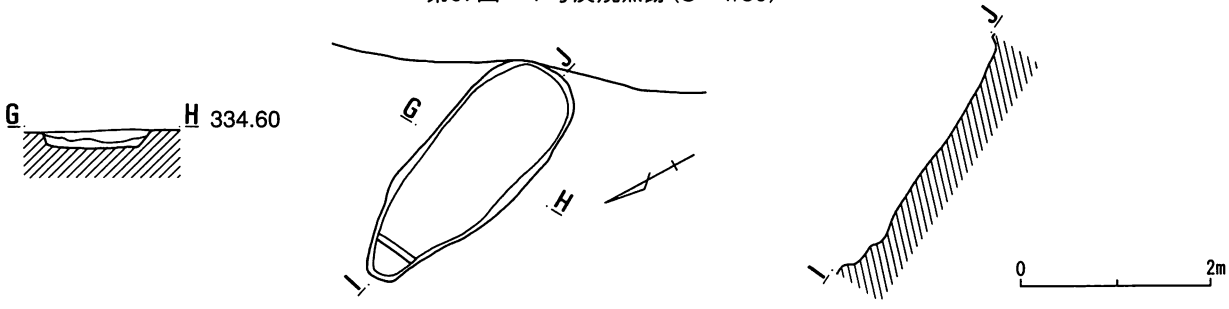
調査区の中央部分をほぼ東西に走る遺構である。幅は３ｍ～４ｍ、深さは１ｍ前後である。調査区を完全に横断しているために、溝の始まりと終わりについては不明である。南側の方が低くなっているが、長さ40ｍの間での高低差が僅かに20cmであるから、ほぼ水平な底部と言える。出土した遺物は比較的多くの平安時代の土師器であり、完全な形をしたものを含め、砂層とその直上から出土している。堆積土層を見ると、発掘された範囲すべての場所で、最下部に砂層の堆積が認められており、水路として利用されていた可能性が高い。また遺物の出土状態から考えると祭祀に利用された可能性もある。２号溝状遺構と交差しているが、２号は１号の上面を走っており、この１号の方が古い遺構である。

(2) ２号溝状遺構（第77図）

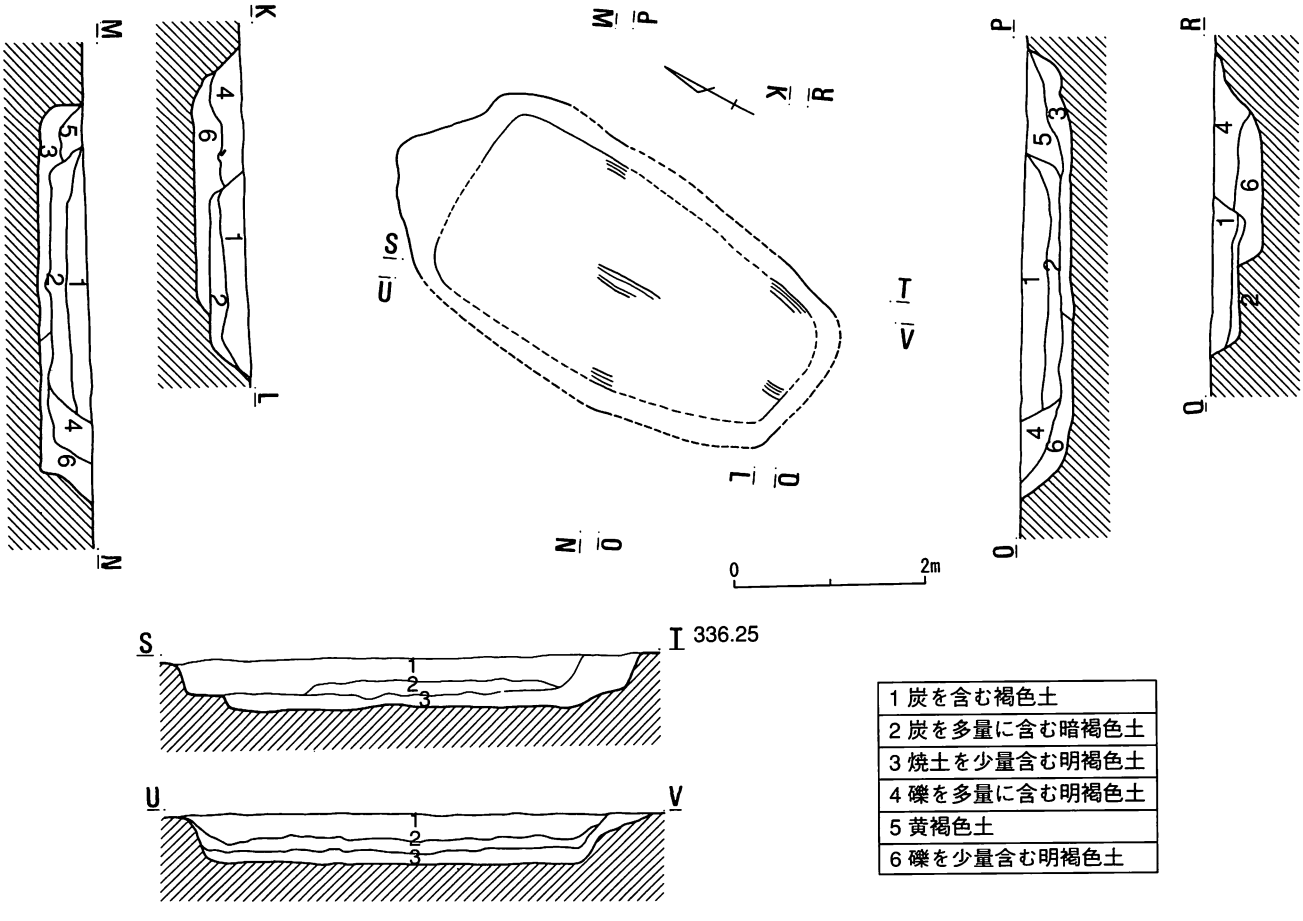
調査区の中央部分をほぼ南北に走る遺構である。幅は１ｍ前後、深さは50cm以下である。１号と同様で調査区を斜めに横断しているために、溝の始まりと終わりについては不明である。１号とは逆に南側の方若干高く



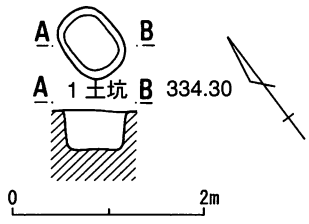
第67図　1号炭焼窯跡(S=1/80)



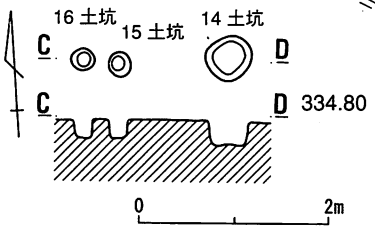
第68図　2号炭焼窯跡(S=1/80)



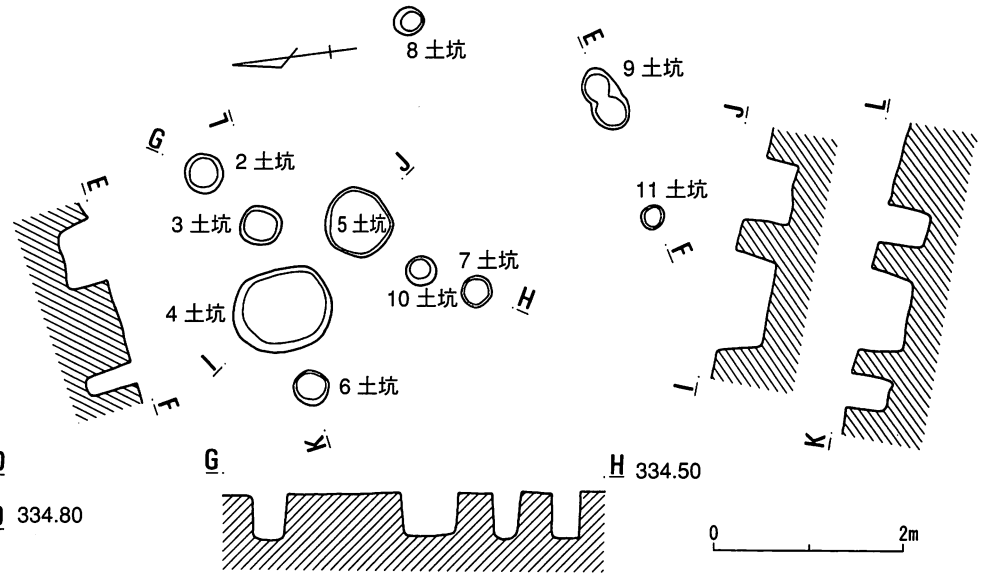
第69図　3号炭焼窯跡(S=1/80)



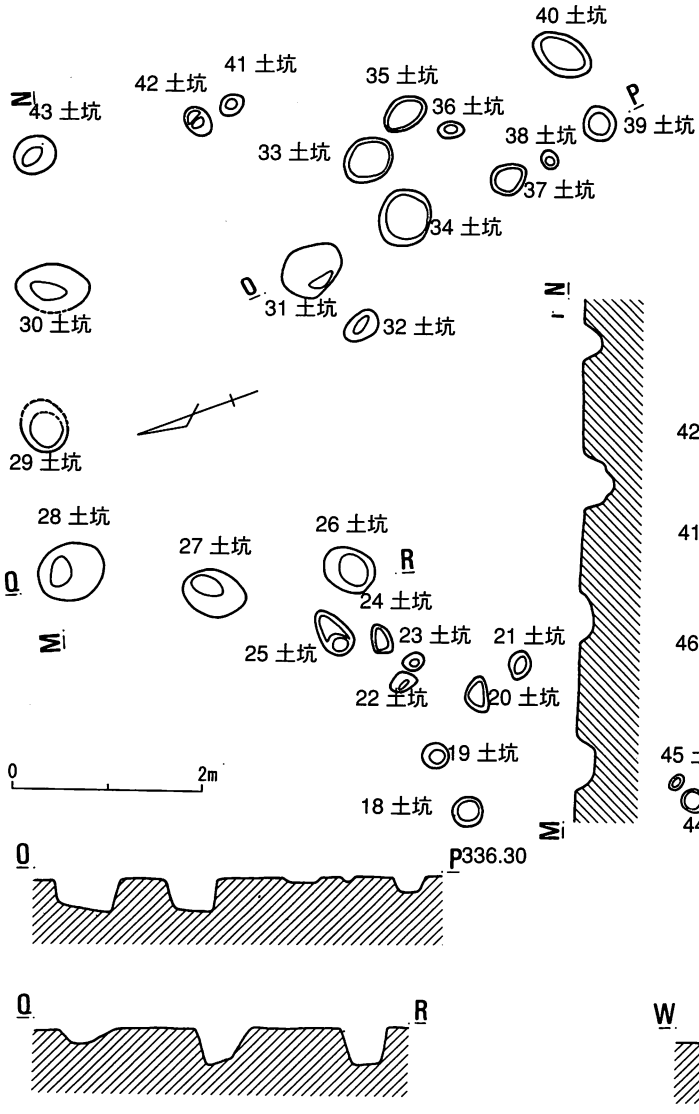
第70図
土坑平面図(1)(S=1/80)



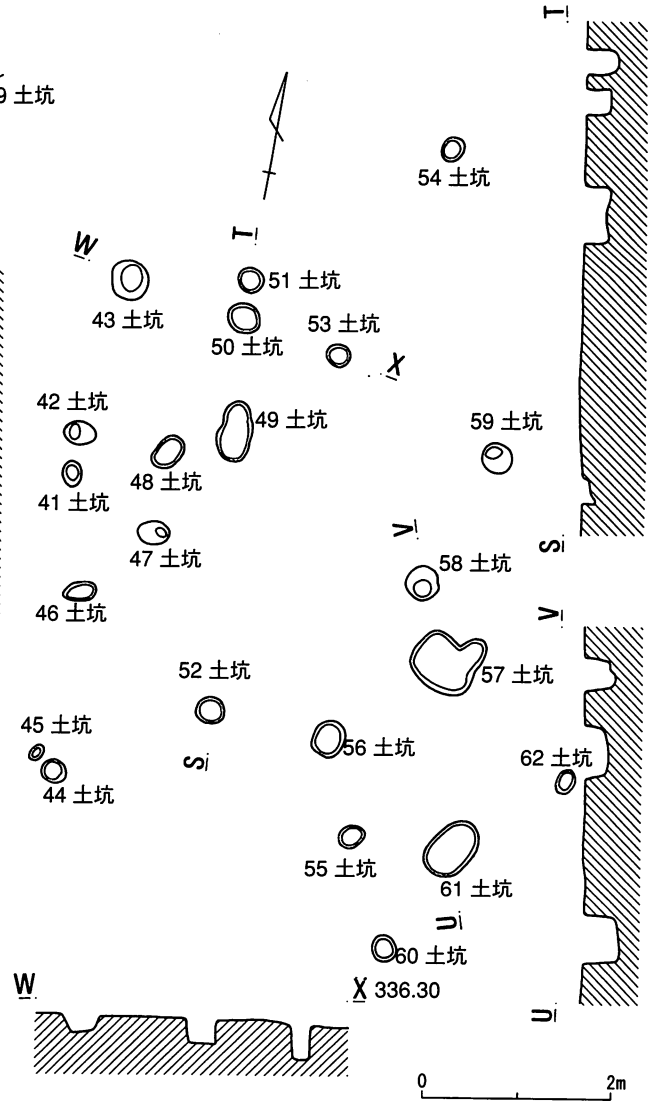
第71図　土坑平面図(2)(S=1/80)



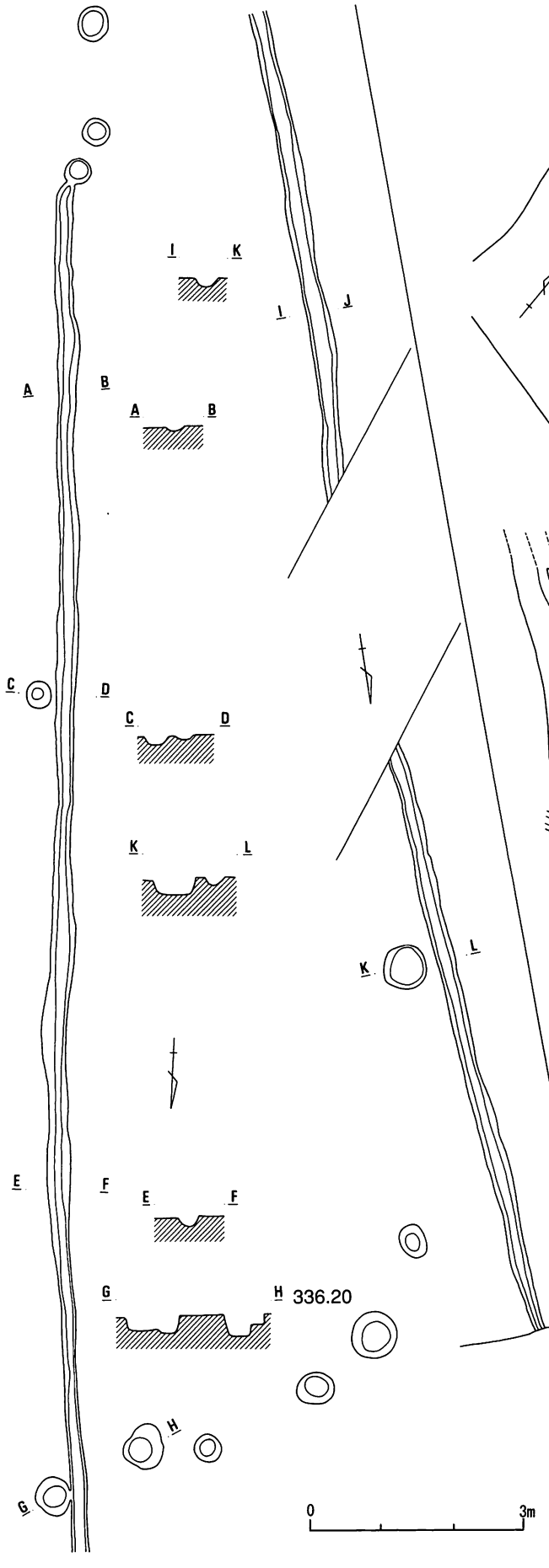
第72図　土坑平面図(3)(S=1/80)



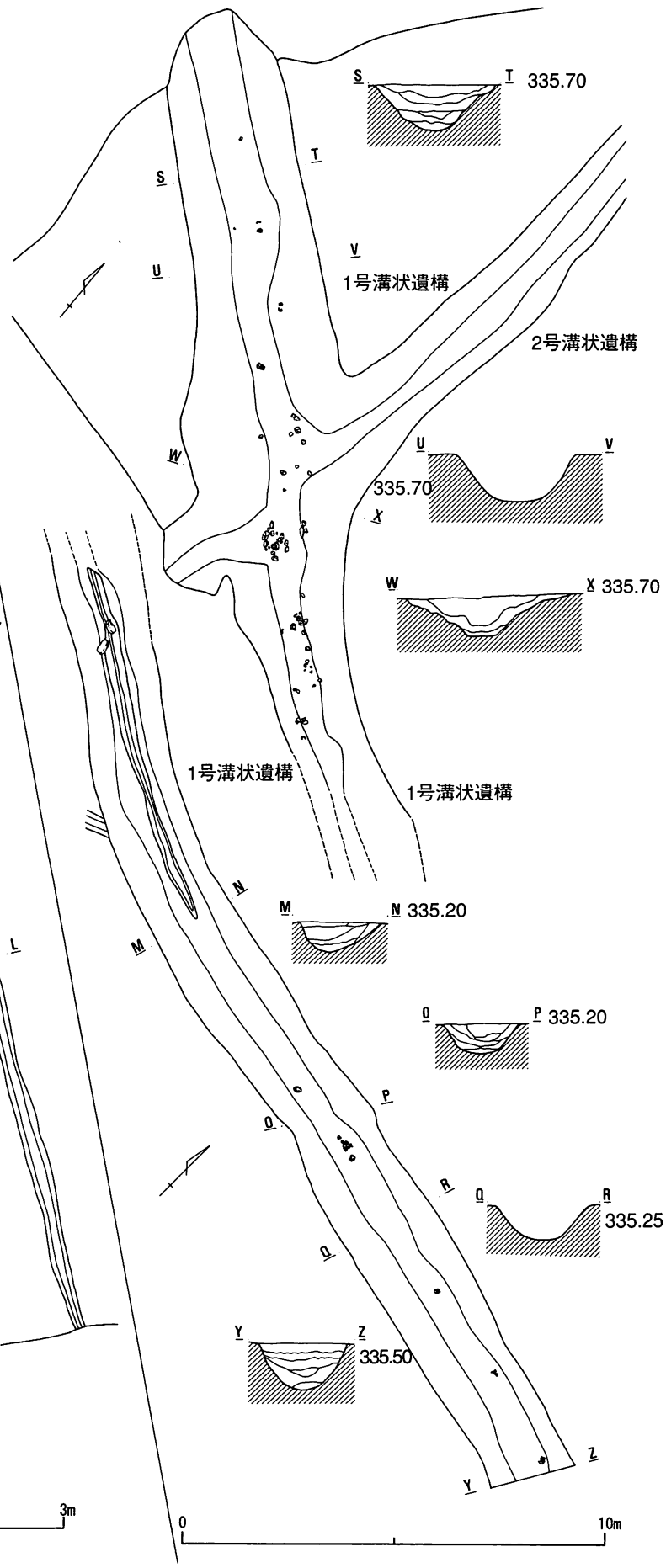
第73図　土坑平面図(4)(S=1/80)



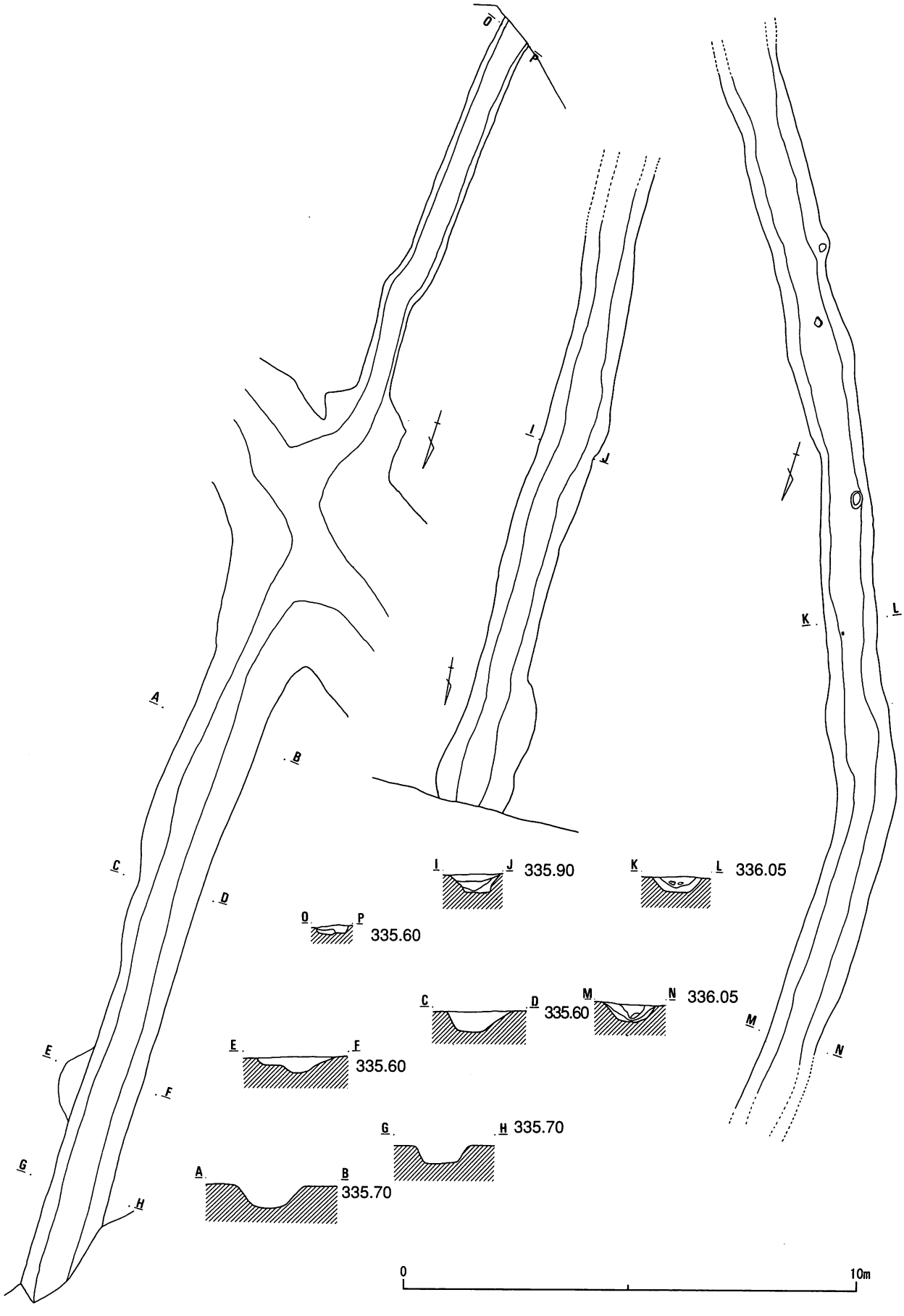
第74図　土坑平面図(5)(S=1/80)



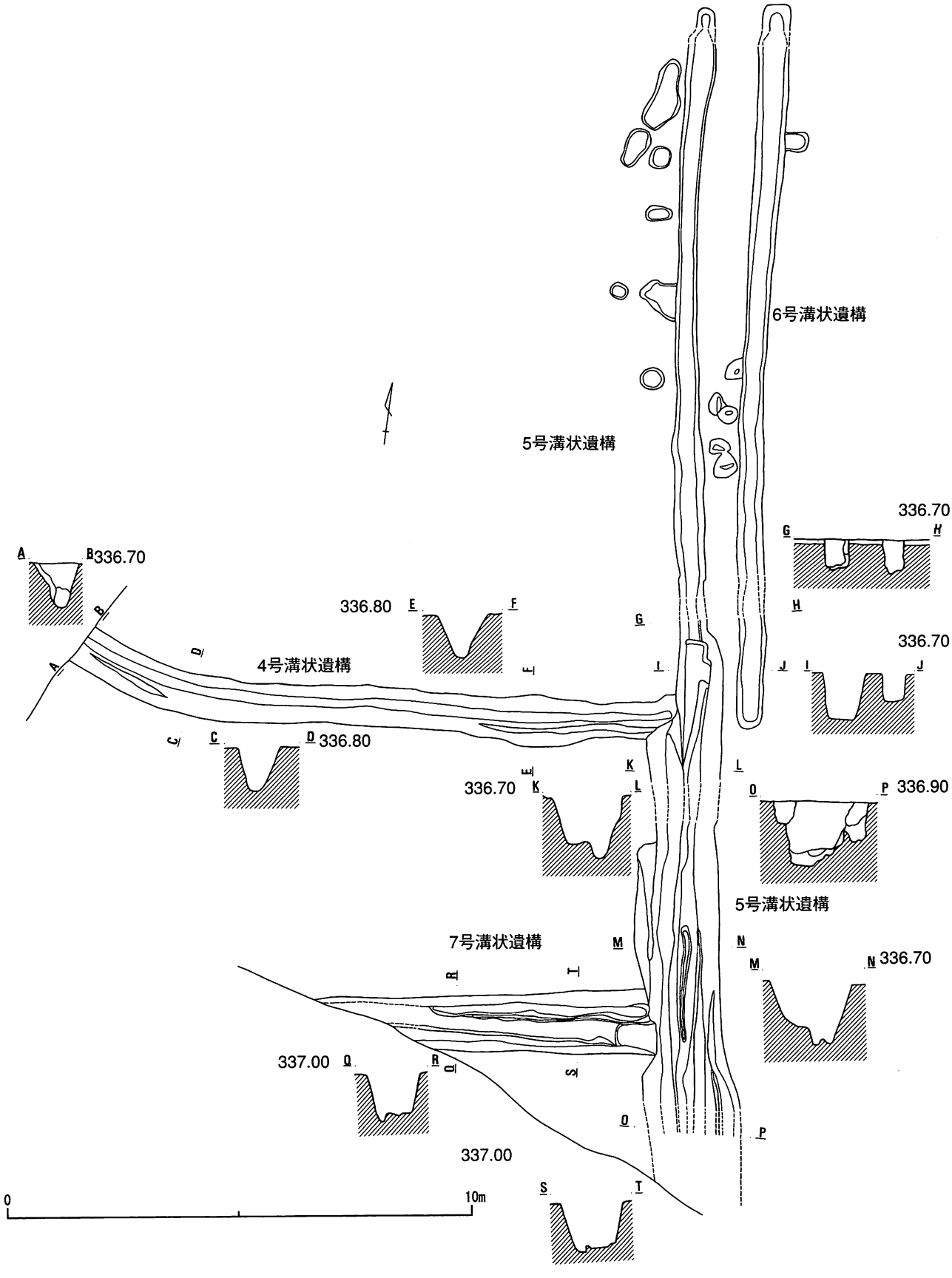
第75図　3号溝状遺構(S=1/60)



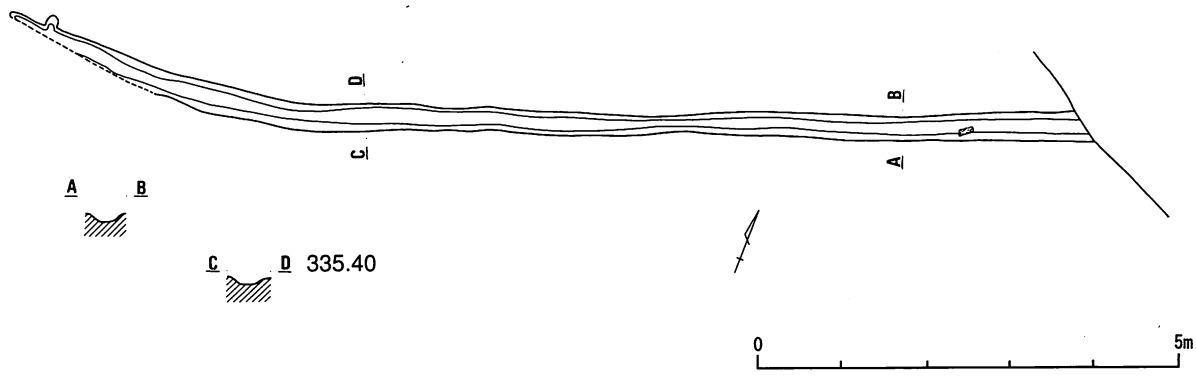
第76図　1号溝状遺構(S=1/120)



第77図　2号溝状遺構(S=1/120)



第78図　4・5・6・7号溝状遺構(S=1/120)



第79図　8号溝状遺構(S=1/90)

なっているが、長さ50mの間での高低差が約70cmであるから、これも1号と同様にほぼ水平に近い底部と言える。遺物は全く出土しなかった。1号溝状遺構の上に掘られている1号より後世の遺構である。底部等に砂層の堆積は見ることができなかった。

(3) 3号溝状遺構(第75図)

1号溝状遺構の南側、2号溝状遺構の西側をほぼ南北に走る遺構である。幅、深さ共に50cm以下の細い溝である。北端は調査区域外に延び、南端は徐々に浅くなって消滅する。直線的に掘られた遺構である。出土遺物は無い。2号と同様で南側の方が若干高くなっているが、長さ30mの間で、その高低差は20cmを測るのみである。

(4) 4～7号溝状遺構(第78図)

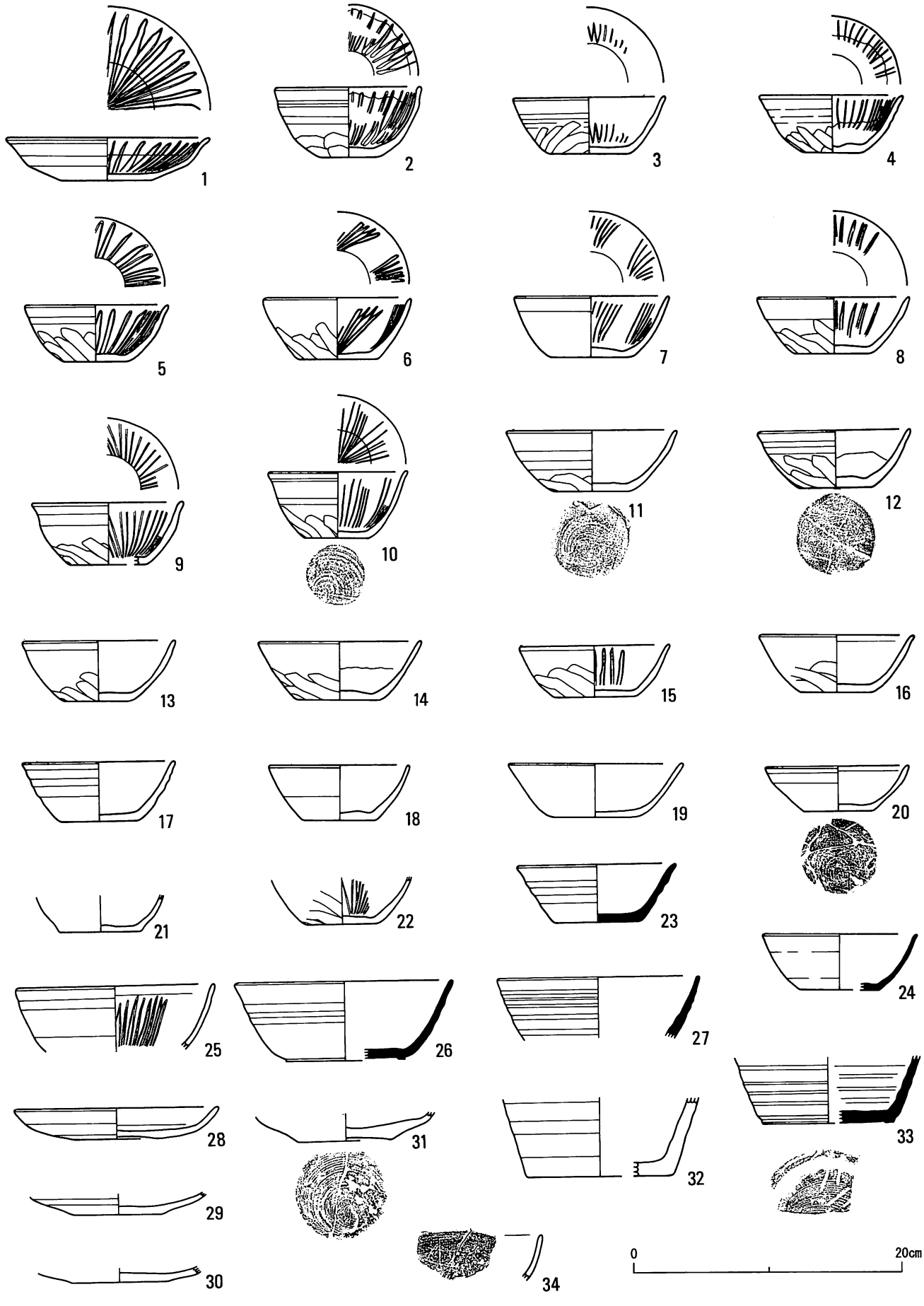
4号から7号までの4条の溝状遺構は、すべて関連性を有して掘られている遺構だと考えられる。5号と6号は途中まで並行して掘られ、4号と7号はその5号に直交して連結しているようである。ただし4号も7号も5号と交わった所で終わっており、5号より東には延びていない。4号・5号・7号は溝の途中にテラス状の段が見られるが、これは2状以上の数の溝が重複して掘られているためである。覆土は小石を多く含んだ黄褐色土層や褐色土層であり、すべての溝状遺構で出土遺物は全く存在しない。過去、この4条の溝状遺構と同様な遺構が、櫛形町長田口遺跡と同町七ッ打C遺跡において確認されている。両遺跡では現状の土地境界と遺構の位置が一致する個所が多く、地境の溝として掘り込まれていた可能性が指摘されており、時代も近世のものと推測されている。本遺跡でも現状の土地区画と一致する個所が多く見られ、この種の溝状遺構は地境の溝である可能性が強いことが本遺跡の実例からも指摘できた。

(5) 8号溝状遺構（第79図）

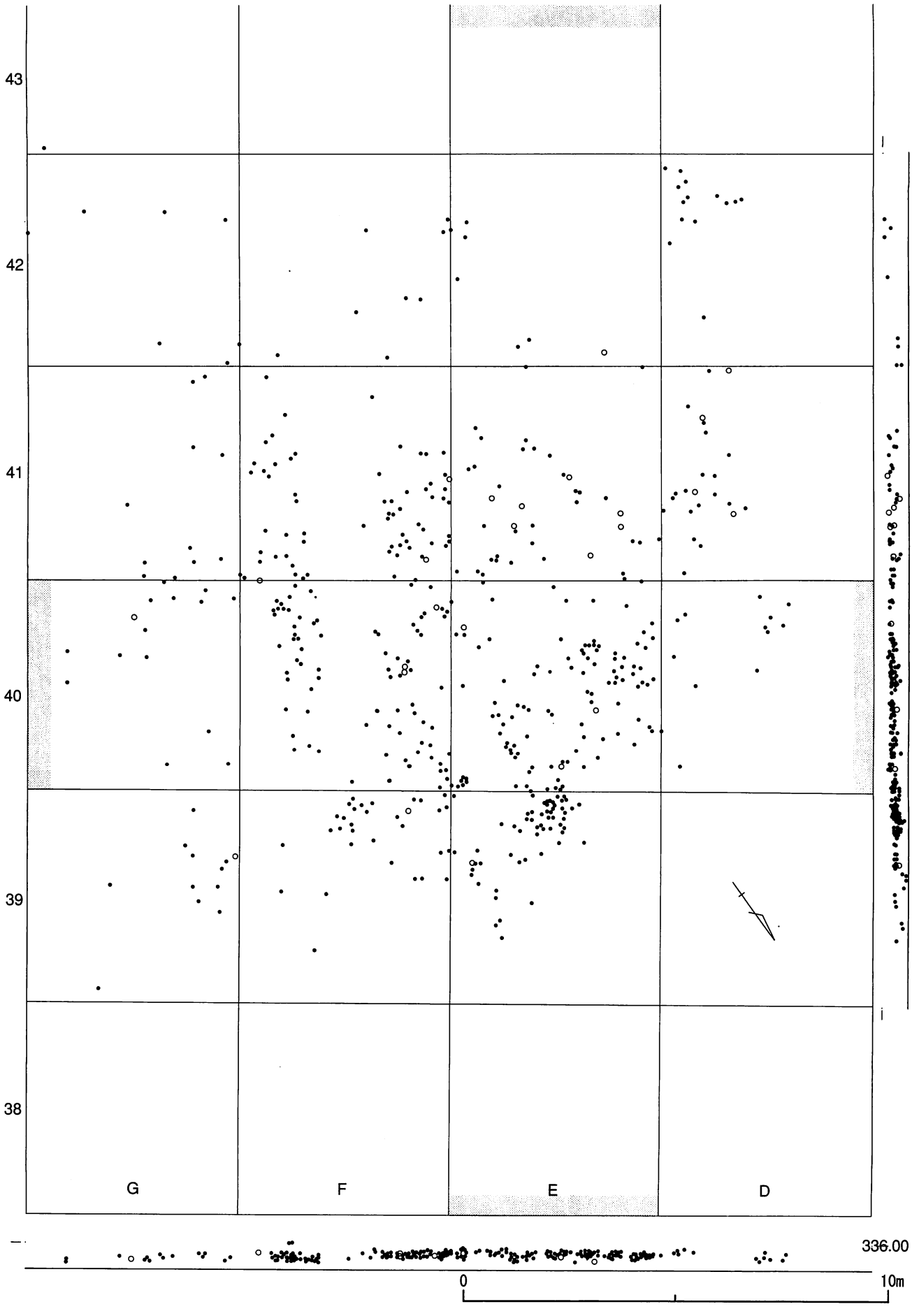
東で1号溝状遺構と重複し、西で徐々に深さを浅くして消滅する幅40cm以下で長さ12mの範囲で確認された遺構である。発掘現場の所見では1号溝状遺構より新しかった。出土遺物は無い。

第6節　その他の遺構と出土遺物(第81・82・84・85図)

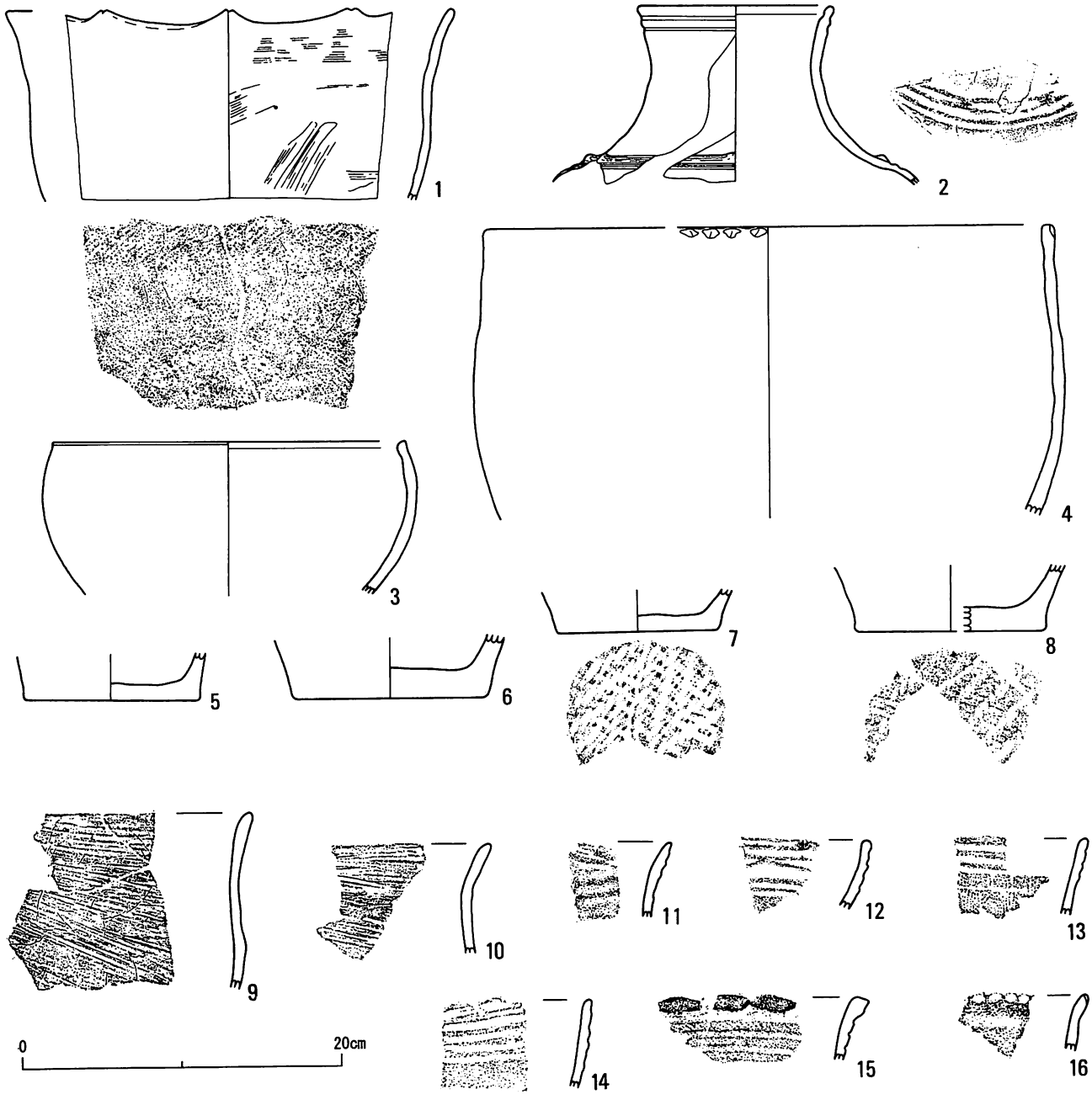
2区の中、グリッド番号で31～42の範囲で、平安時代の集落確認面より約30cmほど下層で縄文時代終末～弥生時代初頭の遺物包含層が確認された。これを立石下遺跡第2面と名付け遺構等の検出に努力したが、遺構の痕跡さえも確認することは出来なかった。付編で詳しく論じられているが、自然科学分析の結果では、積極的に水田等の遺構の存在を証明するようなデータも確認されなかった。遺物はとくにD～F－39～42の範囲で最も多く出土してい。また、出土した土器片や石器類は合計数百点にものぼるが、土器片などはかなりのローリングを受けて表面が損傷しているものが多く、また同じ包含層の中から時代のやや新しい磨製石鏃も出土しており、若干の天然や人工の攪乱が存在した可能性も否定できない。



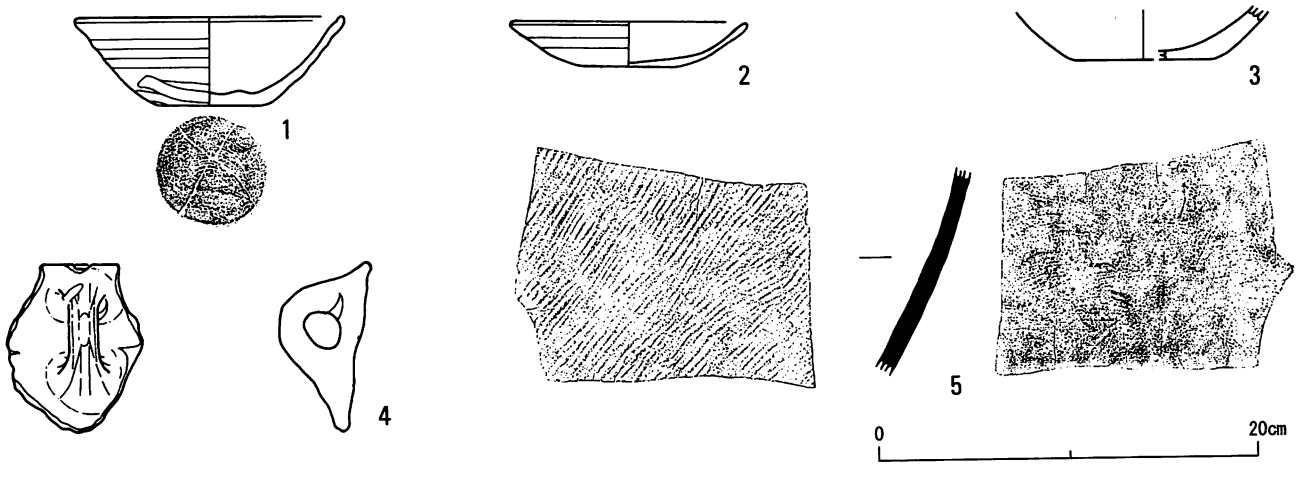
第80図　溝状遺構出土土器(S＝1/4)



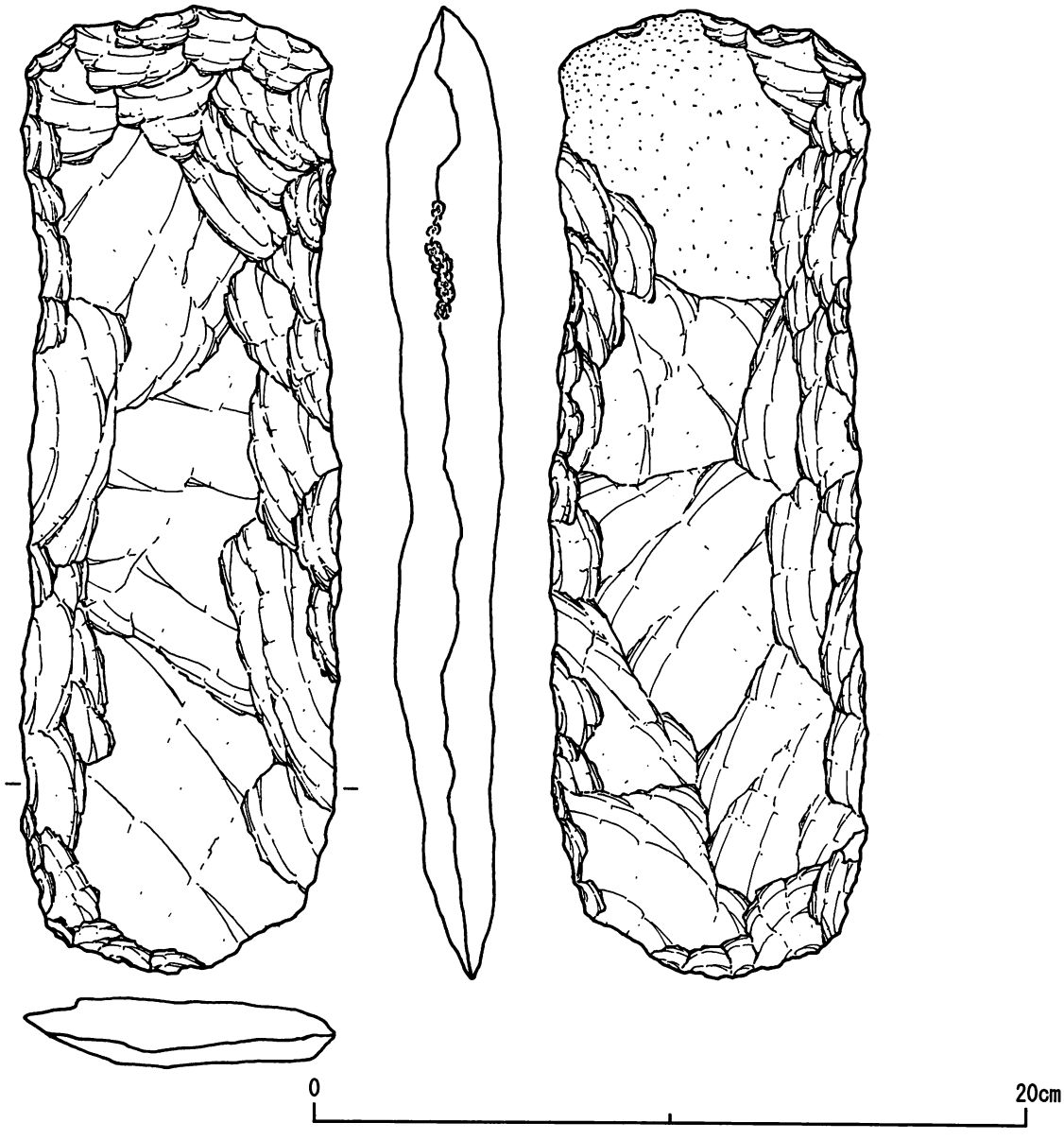
第81図　2面遺物出土状況(S=1/125)　　黒丸：土器　白丸：石器



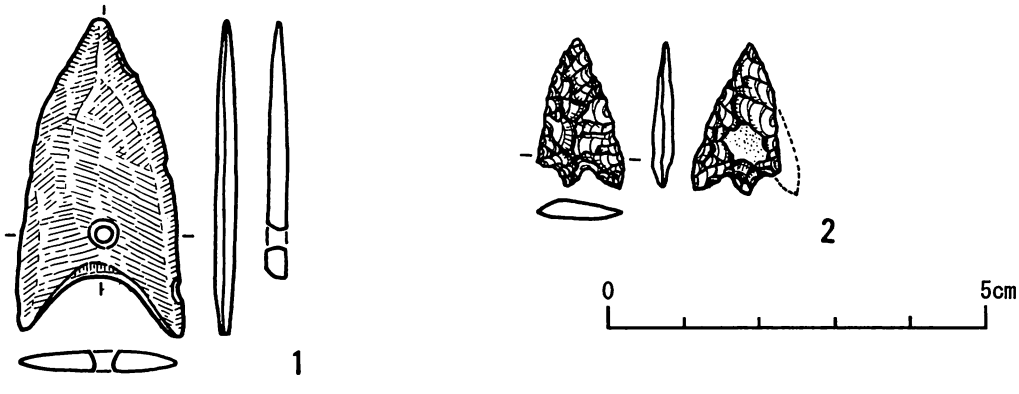
第82図　2面出土土器(S=1/4)



第83図　グリッド出土土器(S=1/4)



第84図　2面出土石器(1)(S=1/2)



第85図　2面出土石器(2)(原寸)

甲西バイパス・中部横断自動車道関連の発掘調査では、平安時代等の比較的新しい時代の確認面の下層から、縄文時代終末～弥生時代初頭の遺物が確認される例が極めて多く、本遺跡もその前例を踏襲するような状況で遺物が出土した。具体的な遺跡名として、櫛形町十五所遺跡、若草町新居道下遺跡、甲西町油田遺跡等などのバイパス関連遺跡が有名であるが、櫛形町教育委員会などの発掘調査した遺跡でも同様な例が多いと聞いている。しかし、いずれの遺跡でも明確な遺構は発見されておらず、唯一、十五所遺跡において石器製作址と思われるような痕跡が確認されている。県内の他の地域では、大月市南大浜遺跡、中道町菖蒲池遺跡、明野村下大内遺跡などで埋葬に関連すると思われる遺構は発見されているが、やはり居住空間としての遺構は発見されていない。当該期における本県の遺跡の在り方を示す特徴なのかもしれない。

第５章　まとめ

第１節　立石下遺跡１区について

本遺跡は、御勅使川扇状地の扇央部、現御勅使川と旧御勅使川に挟まれた標高約335ｍに位置する。調査区は東から西に緩やかに傾斜している。１区は幅約45ｍ長さ約140ｍの調査範囲の中に水路、農道等が走り３区画に分かれる。

調査で発見された遺構は竪穴住居跡３軒と掘立柱建物跡１棟、土坑(炭焼き窯跡)２基、溝14条、柱列１基、ピット15基である。

１～３号住居跡は甲斐編年(注１)のⅧ期(９世紀前半)に属する。しかし、３号住居跡の第16図２・３はⅧ期でもやや古めと思われる。１号住居跡と３号住居跡は約５ｍの距離に、主軸をほぼ同じくしてあり、同時期に存在したと考えられるが、遺物の接合関係をみると、１号住居跡の覆土上層と３号住居跡の床上で出土したものとが同一個体であることから、廃棄されたのは３号住居跡よりも１号住居跡のほうがやや早い時期であったと言える。２号住居跡は調査区の北端にあり、１・３号住居跡から約30ｍ離れた場所に位置する。主軸の方向も１・３号住居跡と異なり、約４ｍ北側に１号掘立柱建物跡がほぼ同方位を向いて建てられている。この柱穴内からは羽口片が１点出土しているが、それ以外の遺物がないため時期は不明であるが、２号住居跡と同時期の可能性が考えられる。

２・３号土坑は炭焼き窯跡である。炭焼き窯跡については、県内の出土例を野代(1994)が集成しており(注２)、４遺跡５遺構が報告されているが、地域は北巨摩郡に限られている。今回の炭焼き釜跡の発見は、盆地部でも炭焼きが行われていたことの証明といえよう。また、鍛冶を行うための、炭は欠かせない物であるが、本区においては羽口片の出土があり、本遺跡の北東約150ｍに位置する石橋北屋敷遺跡(奈良～中世初頭)では、９世紀初頭の３区５号住居跡から精錬滓と製錬過程で完全溶解・凝集する以前の鉄滓が詰まった鉄塊が出土している。報告者はこの住居跡を「鍛冶関連遺構か」と報告している(注３)。また、本遺跡の北へ約150ｍに位置する大塚遺跡(古墳～平安時代)でも、Ａ区１号住居跡より精錬滓が出土している(注４)。このように本遺跡の近くで鍛冶が行われていたことを併せ考えると、炭の需要地と供給地は、比較的近距離であったと言えるであろう。

２号土坑からは出土遺物がなく、３号土坑からは平安時代の土器片が若干出土した。これらの遺物からの時期決定は困難であり、流れ込みの可能性を否定できない。ただ、形態から見て土坑の底に溝が切られるため平安時代に属する可能性がある(注５)。

溝は全部で14条を数える。２・３・５・６号溝は覆土の状態等から水流があったものと思われる。２・３・５号溝は全て６号溝に合流し、流れの方向は北または西から南に向かっている。このことは、旧御勅使川が本遺跡の南側に位置していることによるものと考えられる。

(注１)山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ　1992 『「甲斐型土器 ―その編年と年代―』
(注２)野代幸和　1994 『丘の公園第７遺跡』 山梨県教育委員会ほか
(注３)小林健二　2000 『石橋北屋敷遺跡』 山梨県教育委員会ほか
(注４)新津　健　1997 『大塚遺跡』 山梨県教育委員会ほか
(注５)野代幸和氏より

第２節　立石下遺跡２区第２面出土の弥生時代石器について

(1)石器の記載

立石下遺跡から磨製石鏃１点、打製有茎石鏃１点、打製石斧１点、が出土している。

磨製石鏃は緑色粘版岩製で凹基、有孔である。最大長4.1㎝、最大幅2.2㎝、最大厚0.25㎝、重さ2.6ｇである。先端部の両縁部がやや内湾して肩がやや張り、基部に最大幅がある形態で、両縁部にそって鎬(しのぎ)状の稜

線が、両面に不鮮明ながらみられる。

有茎石鏃は黒曜石で、正面左側のかえり部と茎部が短く左右非対称の形態であるが、おそらくかえり部と茎部の端部を欠損したため再調整されて短くなった者と推定される。裏面中央部に自然面が残存する。最大長1.8㎝、最大幅1.2㎝、最大厚0.3㎝、重さ0.4ｇである。有茎石鏃は山梨県の場合、縄文時代後期や晩期初頭の清水天王山段階まではほとんどみられず、晩期中葉から弥生時代にかけて増加するものと思われる。今回出土のものは出土層位から弥生時代のものであろう。

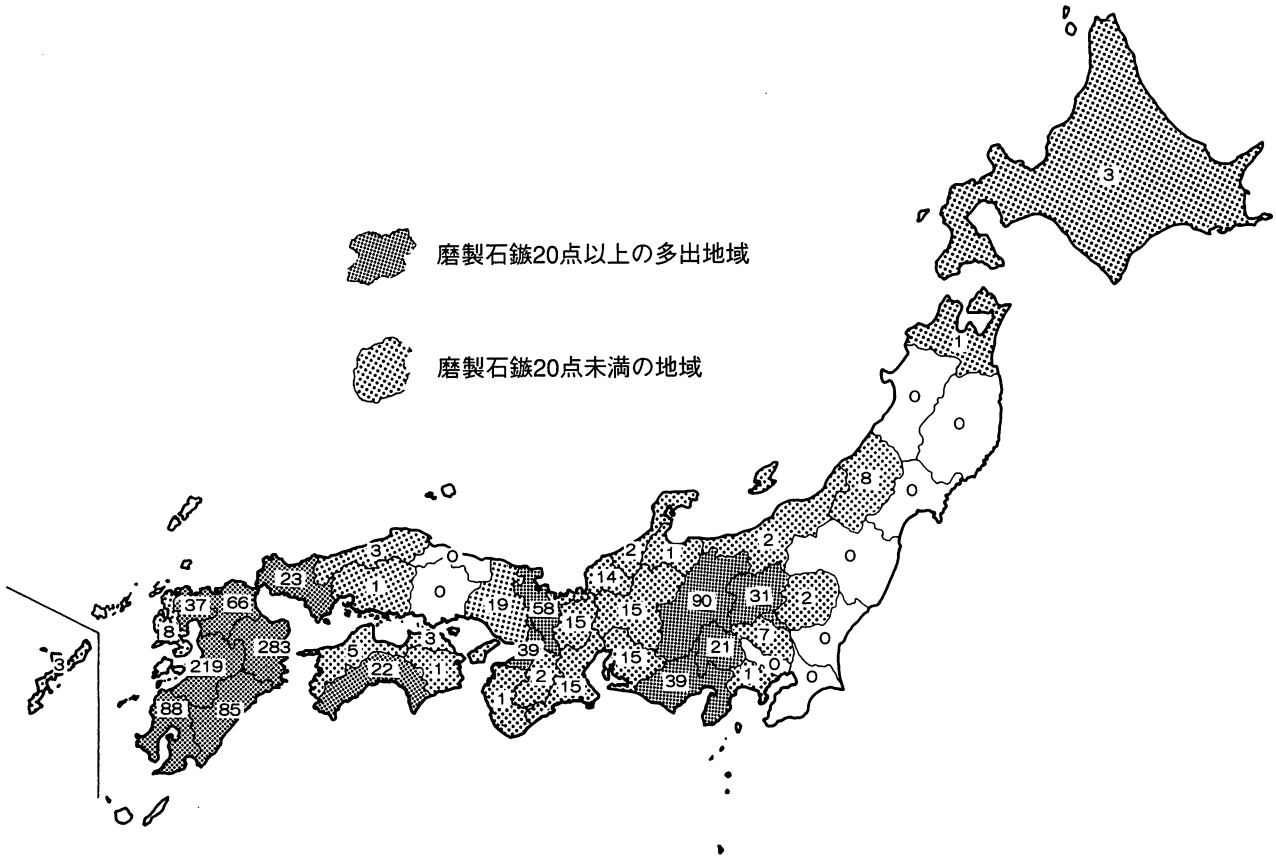
打製石斧は、最大長26.8㎝、最大幅8.7㎝、最大厚3.2㎝、重さ875ｇと大型品である。短冊形であるが、基部側両縁部が若干内湾し敲打痕が見られ、着柄部の可能性がある。基部と左右両縁部は調整が明瞭であるが、刃部の調整は弱い。側面観も基部側が厚く刃部側が薄く、先細り状であり、大きさも含め縄文時代に一般的な打製石斧の形態との違いがみられ、弥生時代のものとしてよいだろう。裏面基部に円礫面が残存する。灰色で黒灰色の縞の入るホルンフェルス製である。

(2)磨製石鏃について

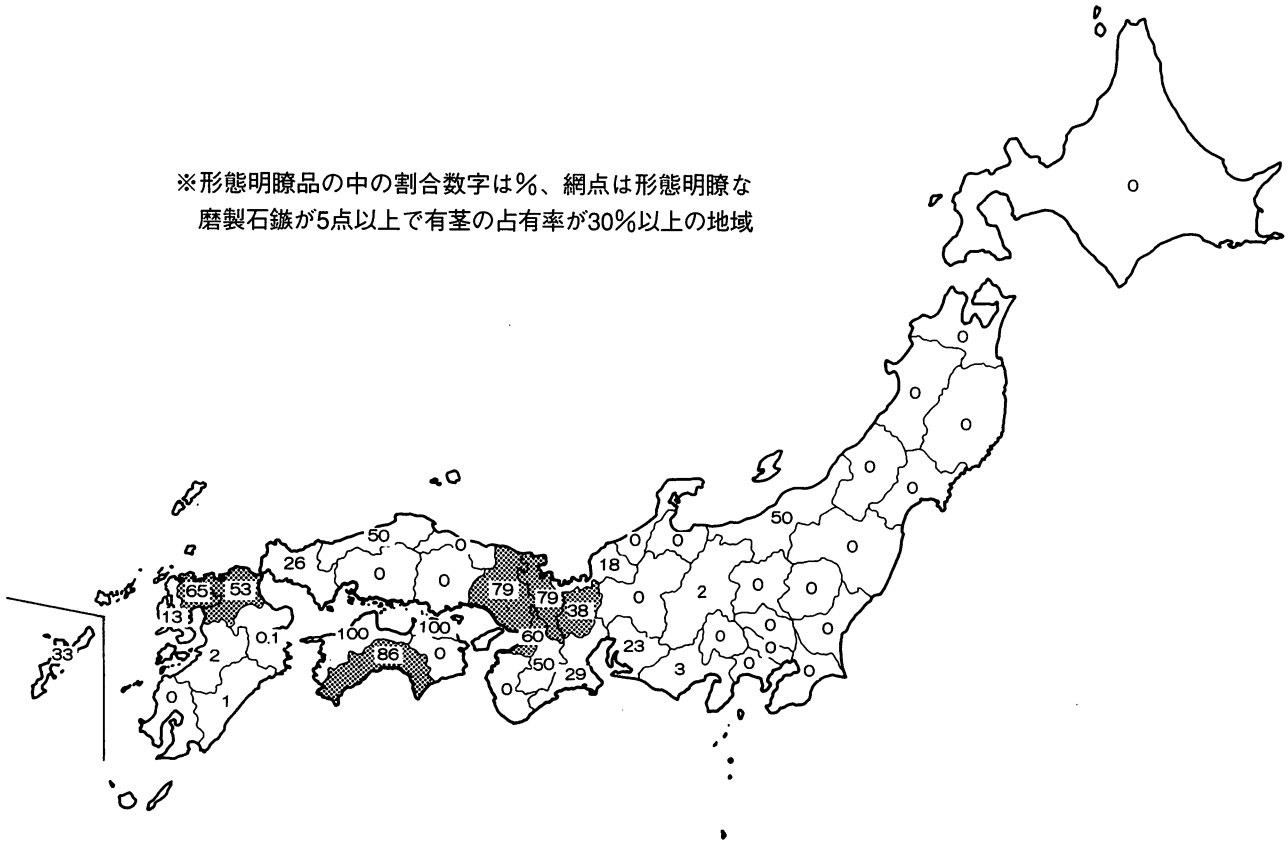
本遺跡から無茎有孔の磨製石鏃が１点出土している。県内では金の尾遺跡で18点が報告されているが、ほかは金生遺跡などで１点程度の時期不明状態での出土品が何例かみられる。その所属時期と出土意義について見通しを得るため、国立歴史民俗博物館編集の『農耕開始期の石器組成』１～４(国立歴史民俗博物館資料調査報告７；1996・1997)を資料として列島全体の状況を検討した。

磨製石鏃の列島内での分布は均一ではなく、粗密の差が見られる。各時期合わせても５点未満の地域を過少地域とし、20点以上の地域を多出地域とすると、長崎県以外の九州地域、高知県の四国南部地域、大阪府、京都府の近畿地域、長野県、群馬県、静岡県、山梨県の中部・東海・関東地域の４地域に多出地域が見られる(第86図)。九州地域と近畿地域の間には鳥取県、岡山県のように出土が報告されていない地域や、島根県、広島県、愛媛県、香川県、徳島県のように５点未満の過少地域が存在しており、両地域の分布はそれぞれ独立したものと考えられる。一方近畿地域と、中部・東海・関東地域の間には十数点の出土が報告されている地域が存在し、後述するように出現時期に違いが見られるので、全く独立したものであるとは言い切れない。北の地域に何点か報告されているが、山形県では縄文時代晩期後～末葉のものとして８点の形態不明な磨製石鏃が報告されている遺跡が１カ所、青森県で弥生１期の形態不明１点、北海道で続縄文初頭で弥生１期前半併行段階で形態不明が１遺跡で３点が報告されている。これらは弥生初期段階で各地に到来したものである可能性があるが地域に根付かなかったものと思われる。したがって、中部・東海・関東地域の北限は神奈川県、栃木県、新潟県のラインと考えられる。磨製石鏃は沖縄県にも見られ、九州地域に特に多いなど南の要素の強い石器であり、南の環境と関連した石器との見方が可能である。

所属時期については資料報告の区分に従い弥生早期から６期の７段階区分であるが、集計は弥生早期～１期、弥生２～３期、弥生４～６期の３段階で行った。なお、３段階のそれぞれの段階内に所属する資料を限定時期資料と呼称する。初出時期や隆盛期について見てみると、九州地域では縄文晩期で佐賀県で１遺跡１点の限定時期資料があり、近隣の長崎県で１遺跡４点の限定時期資料が報告されているが、量的に出そろうのは弥生早期～１期である。福岡県ではこの時期に64点、限定時期資料も55点が報告されている。佐賀県ではこの時期に31点、限定時期資料は６点である。福岡県は弥生２～３期には８点、限定時期資料０点と極端な減少傾向を示すが、佐賀県では弥生２～３期は27点、限定時期資料６点と前時期とあまり変化がない。佐賀県では４～６期が１点しかなく、この時期での極端な減少傾向が見られる。一方、熊本県では弥生早期～１期に報告がなく、弥生２～３期に163点、限定時期資料160点と急激に出現し、弥生４～６期では58点、限定時期資料56点と減少する。大分県では弥生早期～１期に７点、限定時期資料０点、弥生２～３期に24点、限定時期資料16点とゆるやかに出現し、弥生４～６期に262点、限定時期資料185点と急激に増加する。宮崎県も同様で弥生早期～１期に４点、限定時期資料０点、弥生２～３期に11点、限定時期資料５点とゆるよかに出現し、弥生４～６期に76点、限定時期資料64点と急激に増加する。鹿児島県では縄文晩期に５点、限定時期資料１点があり、弥生早期にも３点、限定時期資料１点があるが、弥生２～３期に38点、限定時期資料13点と増加し、弥生４～６期に68点、限定時期資料47点と極大期となる。



第86図　磨製石鏃の出土数（形態不明品も含み各時期の合計数）



第87図　有茎の磨製石鏃の割合

このように、九州地域では福岡・佐賀県地域で弥生早期～１期に安定的に出現し、熊本県で弥生２～３期に極大化し、大分・宮崎・鹿児島県で弥生４～６期に極大化し、時期を追うごとに極大化地域が南下している。ただし、形態別に見ると(第２図)、福岡・佐賀県地域では有茎が多いのに対し、熊本・大分以南では有茎がほとんどなく、無茎が主体である点で異なっている。南下する過程で有茎が脱落しているのであろうか。

四国南部地域の高知県では弥生早期～１期段階が２１点と最も多いが、弥生２～３期９点、弥生４～６期11点と各時期とも比較的多く、極端な減少傾向ではない。四国の他地域では徳島県が弥生４～５期、香川県弥生１期、愛媛県弥生１～２期と４～５期と古いものと新しいものとに分離する可能性がある。九州北部と同様に弥生の古い段階から磨製石鏃の見られる高知県では、有茎が卓越する(第87図)。

一方、近畿地域では大阪府では弥生早期～１期で19点とかなり多いが限定時期資料がまったくない。弥生２～３期31点、弥生４～６期38点と時期を経るごとに増加傾向を示す。兵庫県でも同様で、縄文晩期に４点、弥生早期～１期７点、弥生２～３期17点、弥生４～６期19点と増加傾向であるが、限定時期資料が皆無である。同様な傾向は、滋賀県、三重県、愛知県でみられる。京都府では弥生２～３期が54点で弥生４～６期の48点に比べて若干多い。岐阜・静岡では２～３期に出現し４～６期に極大化する。長野・群馬では４～６期に集中するが、この４県では特に４～５期が中心で６期は若干見られる程度である。

有茎と無茎の形態別では(第87図)、大阪・兵庫・京都・滋賀では有茎が卓越し、三重・福井・愛知では無茎が多いものの有茎も一定量あるが、岐阜・静岡・長野・山梨・群馬ではほとんど無茎のみである。古い時期に磨製石鏃が出現する近畿地域で有茎が卓越し、磨製石鏃の北上過程で有茎が脱落し無茎が卓越する状況であり、九州地域と同様な現象を示している。

山梨では４～５期が周辺の状況からして中心と考えられる。４期は栗林段階、５期は箱清水段階であり、中期後半から後期前半に集中的に見られるものと思われる。

なお、磨製石鏃の各遺跡の出土数を見ると、１・２点の場合が大半である。10点以上の出土数の遺跡を多出遺跡とすると、九州地域では福岡県に１カ所、熊本県に３カ所、大分県に７カ所、宮崎県に３カ所、鹿児島県に２カ所、合計16カ所と多いが、近畿地域では京都府に１カ所のみで、中部・東海・関東地域では長野県４カ所、山梨県１カ所、静岡県１カ所である。山梨県の多出遺跡は金の尾遺跡の18点であり、中部・東海・関東地域で最も多い出土数である。また、資料報告には掲載されていないが、甲府市の音羽遺跡では６点が出土しており、敷島町から甲府市北部に多くの磨製石鏃を出土する遺跡が目立つと同時に、両遺跡とも未製品を含んでいる特徴を持ち、この地域で磨製石鏃が製作されている可能性がある。

第３節　立石下遺跡における平安期の概観

(1)出土土器の編年的位置

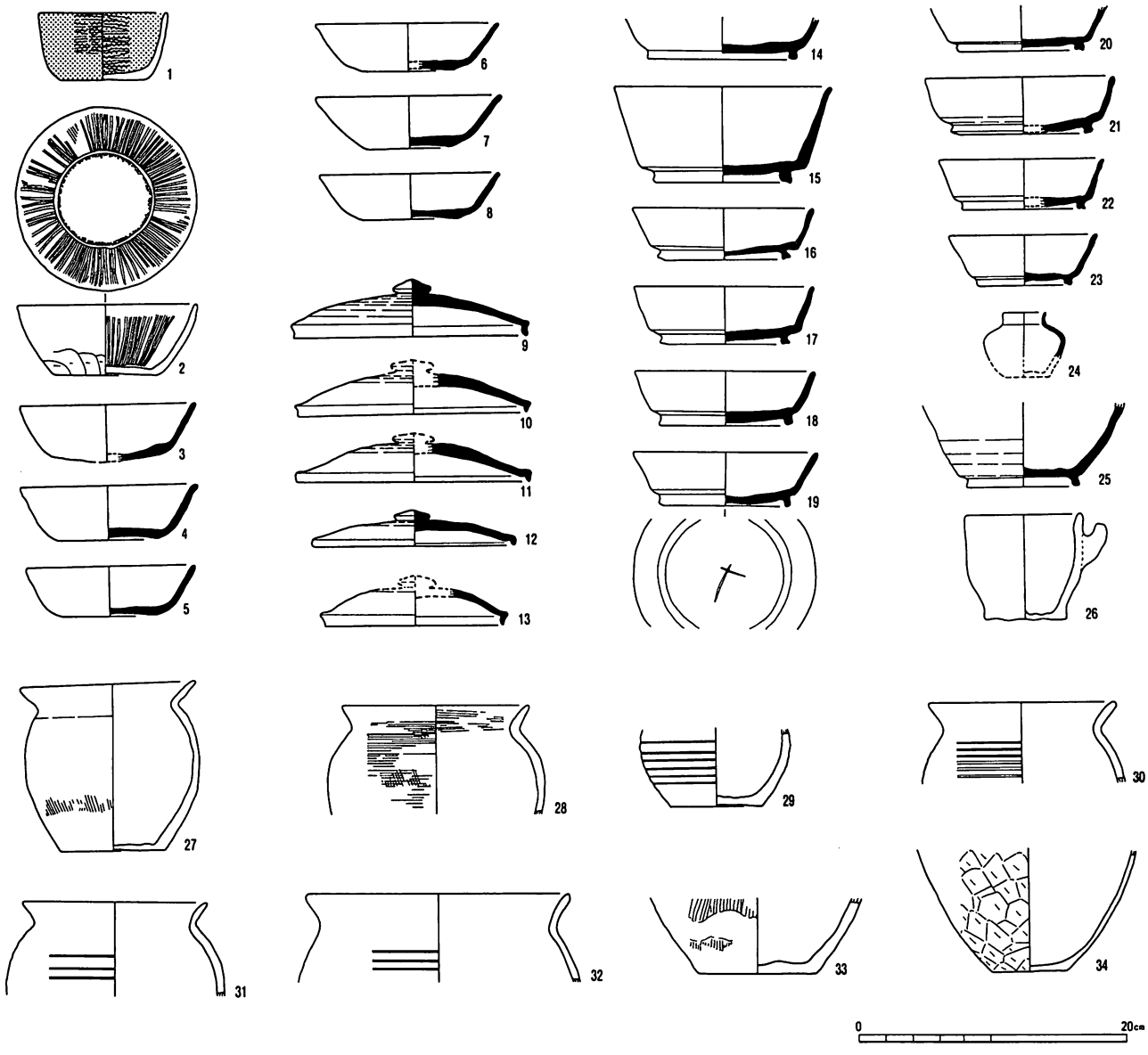
立石下遺跡では１区・２区で合計13基の住居跡が発掘されている。すべて平安時代に属するものであり、その他住居跡以外の遺構については具体的な時期決定が可能なものは２区の１号溝状遺構のみである。

県内における平安時代の土師器編年は大きく三つの編年観が提示されている(坂本美夫ほか、1983；瀬田正明、1992；櫛原・平野、1992)。立石下遺跡の出土土器の年代観については、

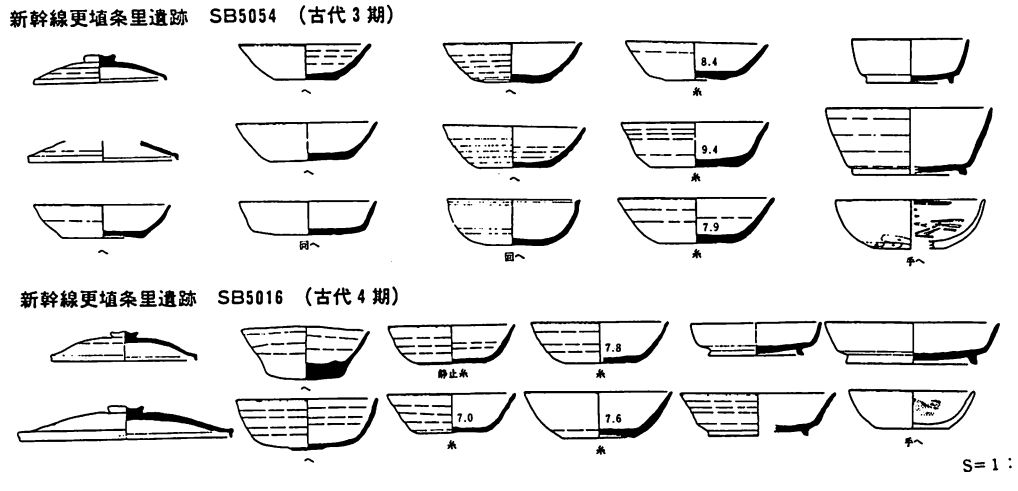
① ２区７号住居跡出土の須恵器が長野方面のものと強い類似性を示している(鳥羽、1999)。またそれらの須恵器については相応の根拠を持って８世紀末～９世紀初頭の実年代が与えられており、別の遺跡で同期須恵器と甲斐型坏Ⅶ期の土器が伴出している点(市村勝巳ほか、1990)。(第88・89図)

② ２区７号住居跡出土の奈良三彩の製作年代を検討した結果８世紀中葉～後半と考えられる点。

以上の２点から、立石下遺跡中で最も古い段階の遺物と考えられる２区７号住居跡出土土器をおよそ８世紀終末から９世紀初頭のものとした。それに基づき考えると、立石下遺跡は甲斐型坏Ⅶ～Ⅷ期という限られた時期に営まれた集落遺跡であり、当遺跡の土器編年については、その範囲の実年代で整合性・妥当性を有する瀬田案および櫛原案の編年に準拠した。つまり遺跡は８世紀終末から９世紀前半という約半世紀の間営まれたものと考えられる。



第88図　南栗遺跡　SB175出土土器



第89図　新幹線更埴条里遺跡出土土器

(2)集落の概要

遺跡内には近接して存在するために同時存在は考えられない住居跡が存在するものの、重複する住居は全く存在しないこともその居住期間の短さの結果と考えられるだろう。発掘調査範囲が建設される道路幅分というために集落の全体像を知ることは不可能である。ただ本遺跡に隣接する他の遺跡群の調査結果等を考慮すると、遺跡のすぐ南側を流れていた前御勅使川(現在の県道竜王・芦安線)より北側の地域では平安時代に時代を絞ると、9世紀前半以前の遺構しか認められていないものの、川より南側の地域では白根町百々遺跡に代表される9世紀後半以降の遺構が圧倒的に多いことが明らかになっており、時期の違いによる集落立地の偏在性が認められそうである。ただ前御勅使川以北の平安集落は住居跡の分布密度も薄くその数も少ないが、以南の集落ではその数が爆発的に増加して当該地すなわち御勅使川扇状地における社会的中心地とも理解できる発展を示している。

遺跡内の掘立柱建物跡は合計5基発見されている。出土遺物は存在しないものの、主軸や配置された位置等からみて住居群と同時期のものと考えて差し支えないであろう。

立石下遺跡で発見されている5基の炭焼窯跡は正確な時期決定が不可能であるが、2区の2号・3号は平安時代の住居跡を切っており、総じて炭焼窯跡は住居群が放棄された以降、すなわち9世紀後半以降のものではないかと思われる。9世紀後半以降に属する数百基の住居跡を検出している百々遺跡では炭焼窯跡と考えられる遺構は全く発見されておらず、この立石下遺跡の地は、9世紀後半以降は前御勅使川以南の百々遺跡方面への炭の供給地として機能していた可能性も指摘できるのではないだろうか。

立石下遺跡は上記のように当該地における平安集落が爆発的発展を見る直前の時期に営まれ放棄された集落遺跡であったわけだが、その中の1基の住居跡から出土した奈良三彩は当時の集落の中で如何なる意味を有していたのであろう。

第4節　多彩釉陶器の意義

(1)はじめに

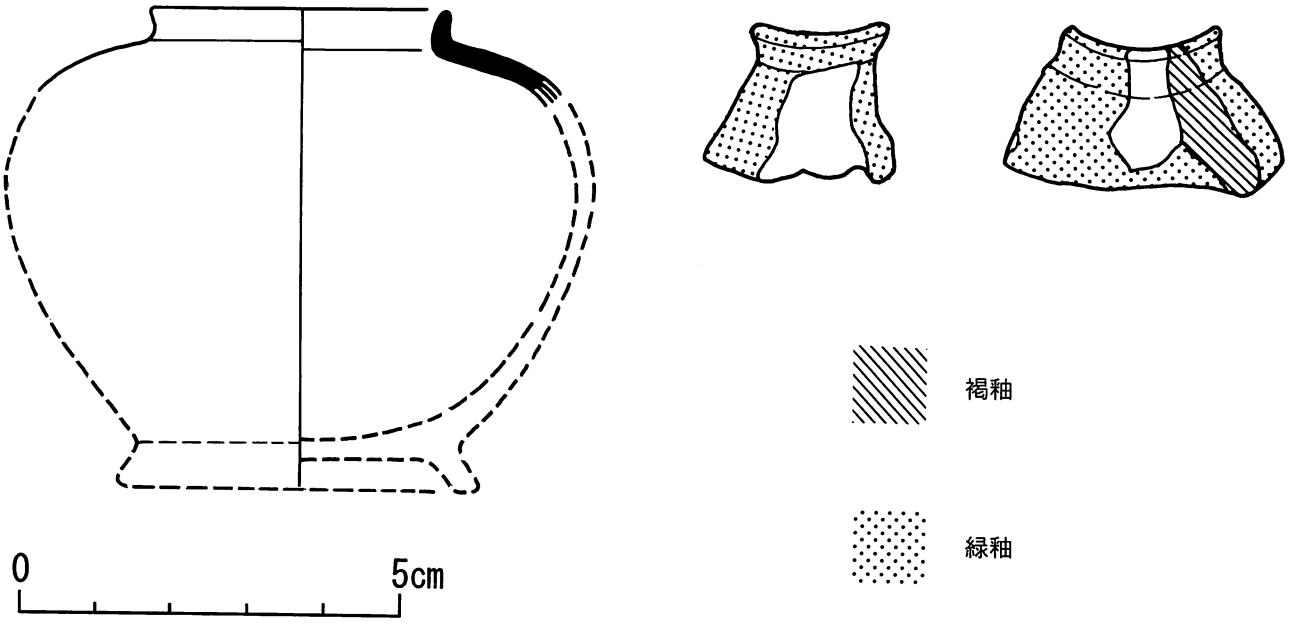
奈良三彩という名称は世間一般で用いられる呼称であり、正確には三彩・二彩釉陶器あるいは多彩釉陶器と表現すべきものである(楢崎ほか、1998)。この多彩釉陶器は日本では、8世紀前半から8世紀末・9世紀初頭という限られた時間の中で限られた数だけ製作された特殊な、そして祭祀的・宗教的性格を有する陶器である。本来同様な性格を有していたと考えられている緑釉陶器が全国3000個所以上の多くの遺跡で発掘されているのに比べ、多彩釉陶器は現在までに国内では僅か347個所の遺跡で出土が確認されているにすぎない(2000年11月現在。井上喜久夫氏の御教示による。)。国内では未だに未発見の地域も少なからず存在している。

本県でも多彩釉陶器の発見例は、韮崎市宮ノ前遺跡(平野ほか、1992)で10世紀前半代の住居跡覆土中より発見された小壷蓋と今回の立石下遺跡での発見例の二例のみである。その他に多彩とは言えないものの、1973年に東八代郡御坂町において白釉陶器が発見された例(山本ほか、1973)が挙げられるが、現在ではその詳細の検証は困難となっている。いずれにしても多彩釉陶器というものは、極めて類例の少ない遺物であることは間違いない。

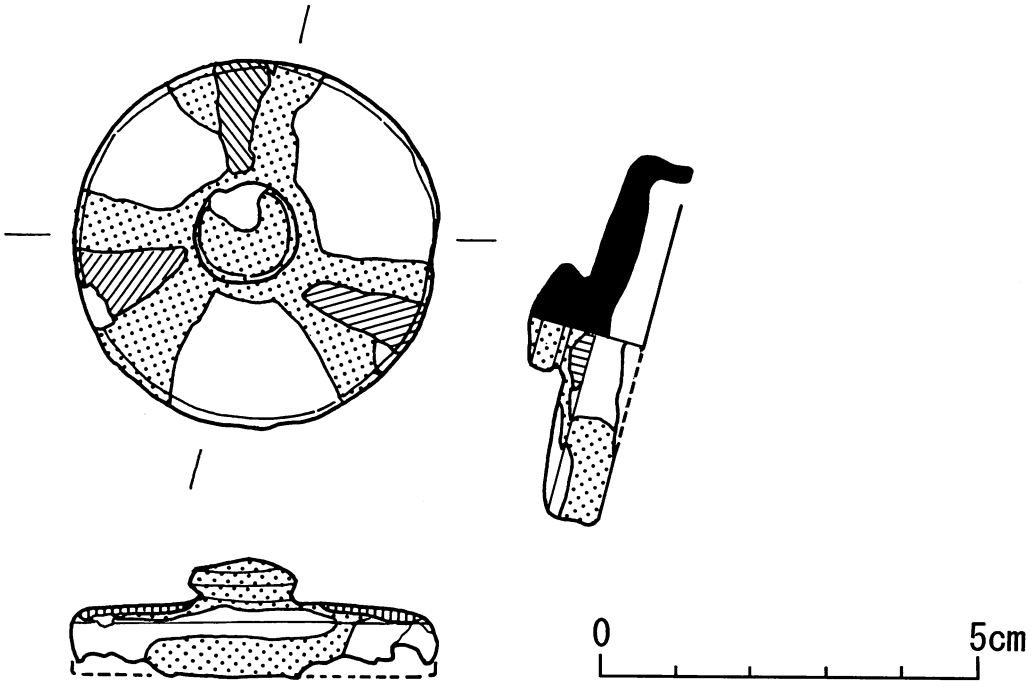
「奈良時代における彩釉陶器の使用例を見ると、そのほとんどが寺院関係や祭祀遺跡での出土が多く、その性格が宗教的なものであったことが考えられるのである。」(楢崎ほか、1998)しかし一般の集落遺跡の住居跡からの出土例も極めて多く、それも県内出土の二例に見られるとおり器種としては小壷の数が一番多い。このような一般の集落遺跡での多彩釉陶器出土の意味について少し考えてみたい。

(2)多彩釉陶器等出土住居跡について

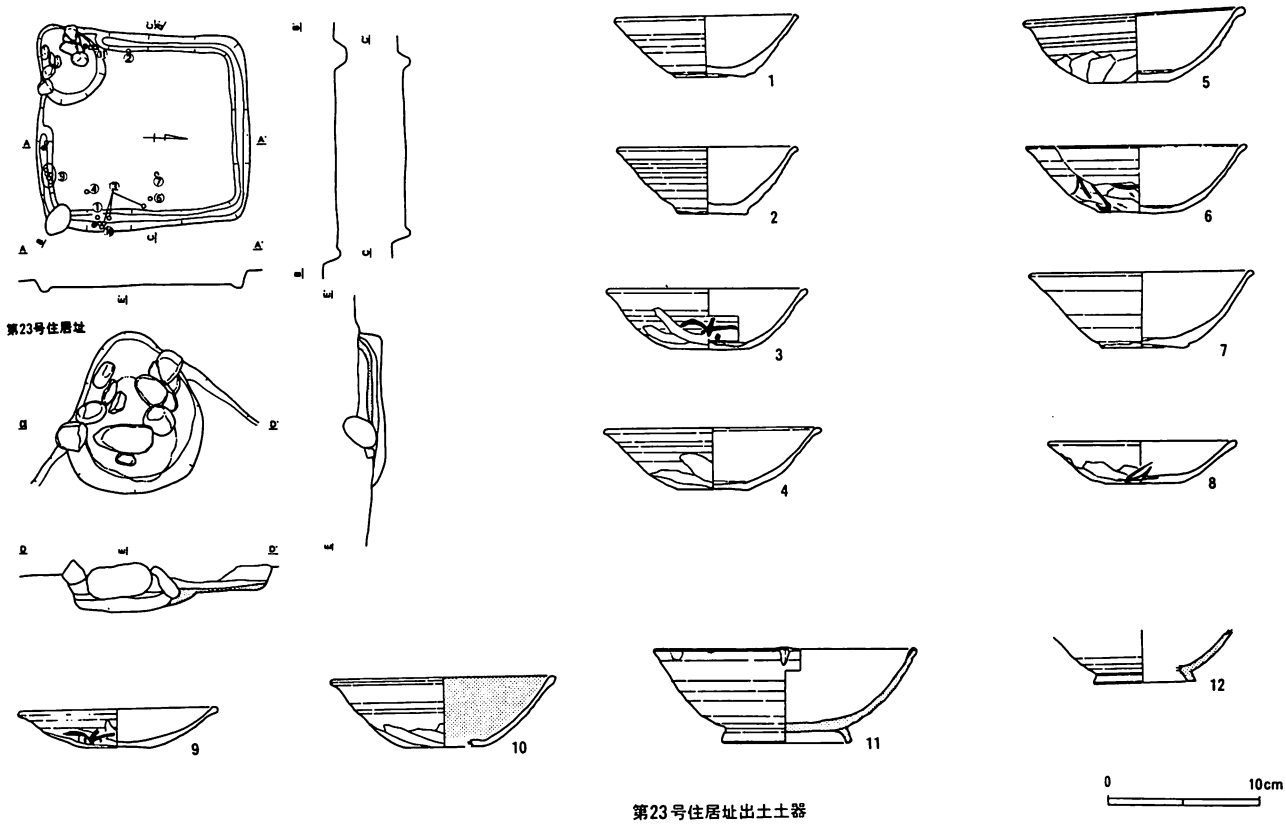
多彩釉陶器として本県で初めての出土例となった韮崎市宮ノ前遺跡第69号住居跡では、住居跡としての実年代が10世紀中葉とされている。この住居跡の中央部分の覆土中、床面から10cmほど上で三彩陶器小壷蓋がほぼ完全な形で出土した(第91図)。三彩自体は明確に三色の釉が施され、図面に見られるとおり施釉方法や施釉個所も三彩陶器における一般的なルールが踏襲されている。この三彩陶器の製作実年代は8世紀中葉と推定される上、その出土状態から見ても住居跡との関連性は薄いものと考えられる。何らかの理由で役割を終えた三彩



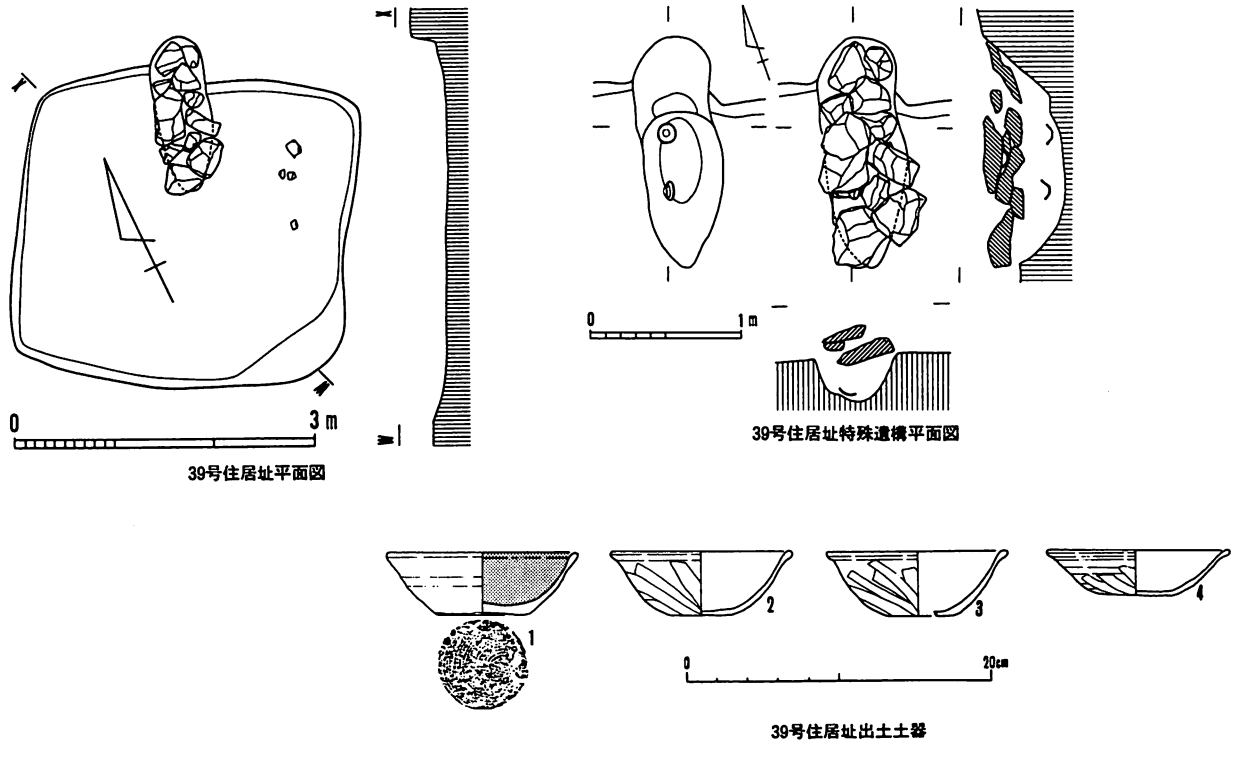
第90図　立石下２区７号住居跡出土三彩陶器



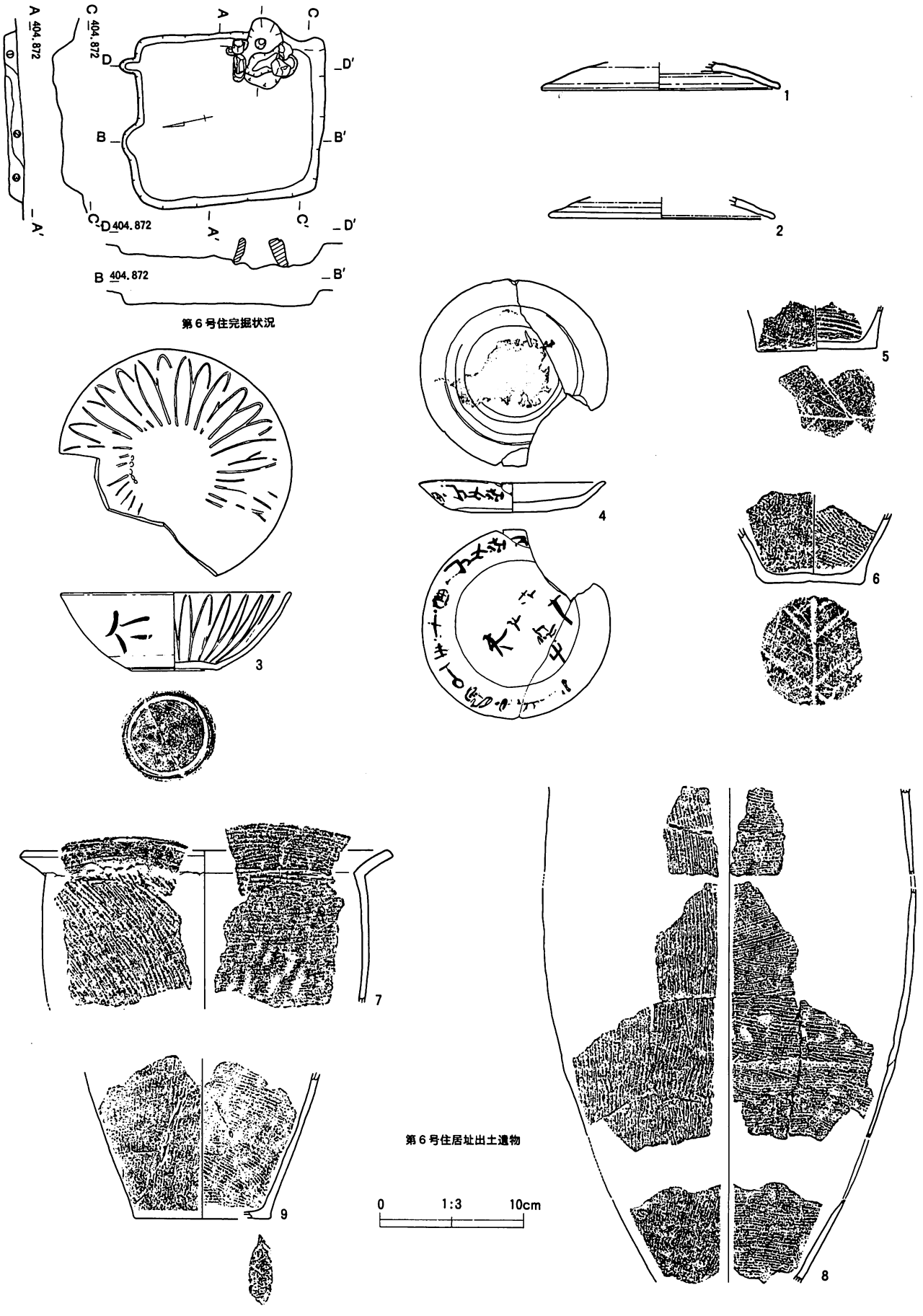
第91図　宮ノ前遺跡第69号住居跡出土三彩陶器



第92図　宮ノ前遺跡第23号住居跡



第93図　柳坪遺跡第39号住居跡



第94図　新田遺跡第6号住居跡

陶器が廃棄されたか流れ込んだか、いずれかの原因が推測され、多彩釉陶器の意義を考える上では情報が少ない。ただし、この第69号住居跡は4～5基の住居跡と複雑に重複している中での最下層の住居跡であり、遺物の回収に関しても現場での作業は困難を極めたと聞いている。今後、詳細に検討を加えれば別な解釈が可能になることも考えられるかもしれない。なお、この蓋の重量は計測の結果23.22gであった。

本県二例目となる立石下遺跡2区7号住居跡の例については本文中で既に説明してあるが、8世紀末から9世紀初頭と考えられる供伴土器と住居跡床面から出土している(第90図)。もともと同一個体と考えられる三彩小壷の口縁から肩の部分の破片2片である。やはり三色の釉が明確に使用され、透明釉の上に緑釉、緑釉の上に褐釉という基本的な施釉方法がとられている。製作実年代も宮ノ前遺跡と同様で8世紀中葉～後半と推測される。立石下遺跡では発掘された住居跡はほとんど東側にカマドを設置されているが、本住居跡だけは正反対の西側にカマドが設けられている。そのカマド自身も単純な作りで焼土の形成も薄く、日常生活で常に使用されていた状況とは考えられないものであった。また住居跡の規模も一辺が3m未満であり、本遺跡中でもっとも小さな住居跡であった。出土したのは破片であるものの、その出土状況から考えると住居跡との有機的な関連性を考えて差し支えないものであろう。

多彩釉陶器に限定すれば、本県では以上の二例しか事例が存在しないわけであるが、緑釉陶器の出土例として韮崎市宮ノ前遺跡で興味深い例が一つ存在する。

宮ノ前遺跡第23号住居跡(第92図)は実年代が10世紀後半ととらえられる遺構で、輪花状口縁を有する緑釉陶器(11)がカマド脇から出土している。その他に別個体の緑釉陶器も出土しているが、注目すべきは住居跡の構築位置とその規模・構造についてである。宮ノ前遺跡で最も住居跡が密集している部分の最も北端に構築されており、規模も一辺が3m未満の極めて小さな住居跡である。そして奈良・平安時代に営まれた宮ノ前遺跡の300基を越える住居跡の中で、当該期には一般的ではない西側にカマドを設けられた3基の住居跡の中の1基である。立石下遺跡2区7号住居跡とは年代にして1世紀以上の開きがあるが、共通点が多いことに興味が惹かれる。

(3)非日常的住居跡と施釉陶器

山下孝司氏は、集落遺跡の中において、その構築位置・規模・構造・出土遺物に関して、他の住居跡とは異なる性格が指摘できる住居跡が数は極めて少ないものの存在し、それらについては祭祀的・宗教的な意味合いを有するものではないかと推測している(山下、2000b)。山下氏がとくに取り上げているのは、韮崎市新田遺跡第6号住居跡とその出土遺物である(第94図)。9世紀前半と考えられるこの住居跡は、①規模が極めて小さい点、②床面が軟弱な点、③カマドの状態が通常と異なる点、④多文字の墨書土器1点と他に墨書土器1点が出土している点などから、祭祀行為に利用された住居跡である可能性を指摘している。この住居跡からは施釉陶器は出土していないが、先に記した立石下遺跡や宮ノ前遺跡の施釉陶器を出土した非日常的住居跡と、この呪術的な文字を伴う墨書土器を出土する非日常的住居跡とは、集落内において類似した機能を有していた可能性が指摘できるのではないであろうか。また以上のような施釉陶器や墨書土器は出土していないまでも、集落内で異質な性格の住居跡も存在する。長坂町柳坪遺跡39号住居跡(第93図)は10世紀中葉の遺構と考えられる。明確なカマドが存在しないために、本来「住居跡」と解釈して良いかどうかの議論もあるが、集落の外れに立地している点や規模が小さい点、そして土師器を埋納して平石で覆ったと思われる竪穴が北壁に設置されている点などから祭祀的な色合いが感じられる遺構である。竪穴はカマドの未完成品と考えることもできるが、柳坪遺跡の他の平安住居はすべて東カマドである点を考えるとやはり異常である。平安時代の集落遺跡では、単純に施釉陶器や墨書土器のみを祭祀の代表的遺物であると言い切れぬ複雑さがあると思われる。

多彩釉陶器に限って言えば、奈良時代から畿内において国家的な祭祀・宗教儀礼の道具として製作され始めたそれらが、日本各地の集落遺跡に散らばった後も、集落内において少なからず祭祀・宗教的な機能を果たしていたと考えられる。ただしそのような多彩釉陶器を出土する集落遺跡も「その性格がはっきりしている場合が少なく、隣接する官衙遺跡に伴う関連の集落であったり、遺跡の規模や遺構の内容から郡衙等の性格が推定され得るものであったりする所が多い。それらの遺跡はその地域の中心的な役割を保ち得る性格のものや、交通の要所に当たる場所であることが多い。」(井上、1998)と指摘されている。400基以上の住居跡等が確認された宮ノ前遺跡などは地域の中心たる集落遺跡であった可能性が強いが、立石下遺跡およびそれに隣接する周囲

の遺跡群の状況からは、現時点ではそれらの遺跡群が「地域の中心」とまで言い切れる根拠は存在しない。しかし特異な住居跡から三彩陶器が出土している事実も確固として存在している。各地域における祭祀の特殊性・地域性も考慮しながら多彩釉陶器を出土する集落が当時の社会で持っていた別の新たな意味を考える必要もあるだろう。

立石下遺跡が立地する富士川右岸、御勅使川扇状地の地域は古代における余戸郷や牧の存在が想定される地域である。前にも触れらたように、前御勅使川(現在の県道竜王・芦安線)を挟んで北に位置する平安時代の遺跡群は8世紀後半～9世紀前半のものに限られているようであるが、南側では白根町百々遺跡に代表されるように9世紀後半～１１世紀のものが多く、現時点の発掘調査の成果では9世紀の半ばを境に集落立地に大きな変化が見受けられる。当該地域でその大きく分かれる遺跡立地が当時の社会においてどのような意味を持っていたのかは、300基近い住居群が確認され、多くの緑釉陶器や古代の分銅も出土し現在も調査続行中である百々遺跡などの調査成果の集成を待たなければならないであろう。

【引用参考文献】

山本寿々雄ほか　1973　「甲斐国埋没条理遺構等の調査」山梨県教育委員会
坂本美夫ほか　1983　「奈良・平安時代土器の諸問題」神奈川考古第14号
市村勝巳ほか　1990　「南栗遺跡」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7
山下孝司　1991　「宮ノ前第2遺跡・北堂地遺跡」韮崎市教育委員会
瀬田正明　1992　「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器ーその編年と年代ー』山梨県考古学会
平野修・櫛原功一1992　「宮ノ前遺跡」韮崎市教育委員会ほか
山下孝司　1992　「山梨県における平安時代土器研究の現状」山梨県考古学会誌第5号
巽淳一郎ほか　1994　「古代の土器研究ー律令的土器様式の西・東3　施釉陶器」古代の土器研究会
山本茂樹・野代幸和　1994　「丘の公園第7遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第92集
森原明廣　1996　「菖蒲池遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第119集
山下孝司　1996　「新田遺跡」韮崎市教育委員会ほか
佐野隆　1997　「下大内遺跡・屋敷添第2遺跡・中原遺跡」明野村教育委員会
新津健　1997　「大塚遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第137集
楢崎彰一・巽淳一郎・井上喜久夫　1998　「日本の三彩と緑釉」五島美術館
米田明訓　1998　「新居道下遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第147集
鳥羽英継ほか　1999　「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42
保坂康夫　1999　「御勅使川扇状地の古地形と遺跡立地」山梨県埋蔵文化財センター研究紀要15
米田明訓ほか　1999　「十五所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第158集
笠原みゆきほか　2000　「南大浜遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第166集
小林健二　2000　「石橋北屋敷遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第178集
斎藤秀樹　2000　「村内遺跡詳細分布調査報告書」八田村教育委員会
山下孝司　2000a　「墨書土器・刻書土器にみる魔除け符号」山梨県考古学会誌第11号
山下孝司　2000b　「古代社会の墨書土器」『山梨県史研究第8号』山梨県

2区1号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 4.2 5.9	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	粗い(小石・砂を多量に含む) 良好 灰黄褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 5.1 5.3	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子を含む) 良好 暗褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 暗褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明赤褐色	
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.7 4.2 5.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・砂粒子多く含む) 良好 褐色	
6	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 暗褐色	
7	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13 5 6.5	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明黄褐色	
8	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	5.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・砂粒子多く含む) 良好 淡黄褐色	
9	土師・坏	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明暗褐色	
10	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	14.8 6 7.7	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り 削り出し高台	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗い(砂粒子多く含む) 良好 黄褐色	
11	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
12	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	7	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 赤褐色	
13	土師・蓋	(口径) (器高) (底径)	19	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子少量含む) 良好 淡黄褐色	
14	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	19	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(金雲母・砂粒子多く含む) 良好 暗褐色	
15	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	24	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗い(砂粒子・金雲母多く含む) 良好 褐色	
16	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	9	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子・金雲母多く含む) 良好 暗褐色	
17	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	23	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗い(小石・白色粒子多く含む) 良好 暗褐色	
18	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	21	(表面) 刷毛 (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・白色粒子多く含む) 良好 褐色	
19	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	24.6	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・白色粒子多く含む) 良好 暗褐色	
20	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	26.6	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(多量の小石・赤色粒子含む) 良好 褐色	
21	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	14.8	(表面) 刷毛 (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗い(小石・白色粒子多く含む)	
22	須恵・壺	(口径) (器高) (底径)	10.4	(表面) ナデ (内面) ナデ	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	緻密 良好 灰褐色	表面自然釉

2区2号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12 4.3 5.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.4 5.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子を含む) 良好 明赤褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	5.3	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り・線刻	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子を含む) 良好 明赤褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13.8	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
6	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・白色粒子含む) 良好 灰褐色	
7	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	5.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子を含む) 良好 褐色	
8	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	9	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・金雲母含む) 良好 褐色	
9	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	8.2	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・金雲母含む) 良好 褐色	
10	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	25 41 9	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・金雲母含む) 良好 褐色	
11	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	25	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・金雲母含む) 良好 褐色	
12	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	26.4	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・金雲母含む) 良好 褐色	
13	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)	19.8	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・白色粒子含む) 良好 灰褐色	

2区3号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 3.8 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 淡黄褐色	
2	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	14	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	

3	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	6.2	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 赤褐色	
4	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 黄褐色	
5	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	9	(表面) ナデ・指頭圧痕 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多い・金雲母?赤色粒子含む) 良好 暗赤褐色	
6	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	25	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・金雲母含む) 良好 褐色	
7	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	17	(表面) 刷毛 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・金雲母含む) 良好 暗褐色	
8	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	8	(表面) ナデ・指頭圧痕 (内面) 刷毛・指頭圧痕	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多い・金雲母含む) 良好 赤褐色	
9	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	24.8	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・金雲母含む) 良好 赤褐色	
10	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) タタキ目 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 灰褐色	
11	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)	22.2	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 灰黄褐色	

2区4号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	15.2 2.4 6.4	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 淡橙色	
2	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	15 2.7 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色・赤色粒子含む) 良好 明褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.2 4.2 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 黄褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	6.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色・赤色粒子含む) 良好 淡褐色	
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	5.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色・赤色粒子含む) 良好 淡黄褐色	
6	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	7.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多く含む) 良好 黄褐色	
7	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り・高台	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰黄褐色	
8	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) タタキ目 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂多い) 良好 灰褐色	
9	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) タタキ目 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰褐色	

2区5号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.2 4.4 4.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂多い) 良好 褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.5 5.5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 黄赤褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.5 5.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 4.4 6.5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 4.7 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂粒子多く含む) 良好 黄赤褐色	
6	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4 5.5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	
7	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 黄赤褐色	
8	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	8	(表面) ナデ (内面) 暗文	削り出し高台	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
9	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.2 4.5 4.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	墨書有り 文字不明
10	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4 6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂粒子含む) 良好 褐色・内面黒色	
11	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) 暗文		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 黄褐色	
12	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り・線刻	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明黄赤褐色	
13	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.3 4.5 5.3	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 明黄赤褐色	
14	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤黄褐色	
15	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 暗褐色	
16	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	7.1	(表面) ナデ (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明赤褐色	
17	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	16	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 黄赤褐色	
18	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	16.2 2.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
19	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	15.8 6.3 9	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り 削りだし高台	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂・赤色粒子含む) 良好 黄褐色	
20	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	7.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	粗(小石・白色粒子含む) 良好 明褐色	

21	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) タタキ目 (内面)		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 灰色	
22	須恵・壺	(口径) (器高) (底径)	8	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 黄灰色	
23	土師・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	

2区6号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13.3 4.3 8.1	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子含む) 良好 褐色	
2	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	8.2	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) やや甘い 褐色	
3	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	10	(表面) 刷毛 (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 褐色	
4	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	17	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 褐色	
5	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	15.3	(表面) ナデ (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 褐色	
6	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	22.8	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子・金雲母含む) 良好 褐色	
7	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	7.2	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	糸切り・線刻	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子・金雲母含む) 良好 褐色	
8	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	9	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗い 良好 黄灰褐色	
9	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	28	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 褐色	

2区7号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.4 4.4 7.5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗 良好 黄赤褐色	
2	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	11	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	粗 良好 乳灰色	
3	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	12.6 4.4 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 黄灰色	火襷有り
4	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	12.3 4 5.5	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・白色粒子含む) 良好 青灰色	火襷有り
5	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	23.2	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子・金雲母含む) 良好 褐色	
6	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	24	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多く金雲母含む) 良好 暗褐色	
7	三彩・壺	(口径) (器高) (底径)	4	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	緻密 良好 素地は白色(上に透明釉・緑釉・褐釉)	

2区8号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子含む) 良好 明黄褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	4.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 暗褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13.8	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子含む) 良好 褐色	
4	土師・壺	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(小石・砂含む) 良好 暗褐色	
5	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	9.6	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂含む) 良好 褐色	

2区9号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	28	(表面) 刷毛・指頭圧痕 (内面) 刷毛・指頭圧痕		(胎土) (焼成) (色調)	密(金雲母・砂多量に含む) 良好 暗褐色	
2	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	22.4	(表面) 刷毛・指頭圧痕 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(金雲母・白色粒子・黒色粒子含む) 良好 暗褐色	
3	土師・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	粗(小石多量に含む) 良好 淡褐色	

2区10号住居跡出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.4 4.4 5.1	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・白色粒子含む) 良好 赤褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子を含む) 良好 褐色	
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	7.4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り 削り出し高台	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 赤褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.6 4.5 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.8 4.4 4.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・砂粒子多く含む) 良好 褐色	

6	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4.3 5.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明赤褐色	
7	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10 3.9 5.4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
8	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.4 4.7 5.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り・線刻	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子・砂粒子含む) 良好 褐色	
9	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	 5.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・砂粒子含む) 良好 明赤褐色	
10	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12.5 5 6.4	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 褐色	
11	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	 6.5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
12	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	16 2.3 9.2	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
13	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	15.2 3.1 6.9	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子少量含む) 良好 明赤褐色	
14	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	16	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・白色粒子・砂含む) 良好 暗褐色	
15	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	 8.6	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛	木葉痕	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色、白色粒子・砂・金雲母含む) 良好 褐色	
16	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子・砂含む) 良好 灰褐色	
17	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	27	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(白色粒子・金雲母含む) 良好 褐色	
18	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	25.2	(表面) 刷毛 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子・金雲母含む) 良好 褐色	

2区1号溝状遺構出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整		胎土・焼成・色調		備考
				器体部	底部			
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	15.2 3.2 6.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・黒色粒子含む) 良好 赤褐色	
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.8 5.2 4.4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂含む) 良好 褐色	内面スス付着
3	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 4.2 6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 黄褐色	
4	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.8 4.2 4.4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子・黒色粒子含む) 良好 黄褐色	内面スス付着
5	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.8 4 4.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(小石含む) 良好 黄褐色	
6	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4.5 6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
7	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.5 6	(表面) ナデ (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子多量含む) 良好 赤褐色	
8	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.4 4.2 5.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子・赤色粒子含む) 良好 褐色	
9	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.4 4.6 5.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 赤褐色	墨書有り 文字不明
10	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11 4.8 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子含む) 良好 赤褐色	
11	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12.8 4.5 5.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子含む) 良好 黄褐色	
12	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.5 4.3 5.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り・線刻	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	内面スス付着
13	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.5 5	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子・赤色粒子含む) 良好 褐色	
14	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12.2 4.4 6.2	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 淡赤褐色	内面スス付着
15	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.2 3.8 6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明褐色	
16	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.3 5.6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	
17	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	11.4 4.5 5.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 淡黄褐色	
18	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.6 4.1 5.6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	
19	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	13 4 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(白色粒子・赤色粒子含む) 良好 黄灰褐色	
20	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	10.8 3.4 5.4	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	
21	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 赤褐色	
22	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	 5.4	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) 暗文	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 褐色	
23	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	11.8 4.3 6.4	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂含む) 良好 灰黄褐色	
24	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	11.6 4.1 6	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰褐色	
25	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) 暗文		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 赤褐色	
26	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	16.2 5.9 8.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	削りだし高台	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰褐色	

27	須恵・坏	(口径) (器高) (底径)	15	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰褐色	内面スス付着
28	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	15.4 2.3 6	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 明褐色	
29	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	6.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明黄褐色	
30	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	7	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子・赤色粒子多量含む) 良好 黄褐色	
31	土師・皿	(口径) (器高) (底径)	7	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子・赤色粒子含む) 良好 黄褐色	
32	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	10.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・白色粒子・赤色粒子含む) 良好 明黄褐色	
33	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)	9.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	糸切り 削りだし高台	(胎土) (焼成) (色調)	密(白色粒子含む) 良好 灰褐色	
34	土師・杯	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ・線刻(中) (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明黄褐色	

2区第2面出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	28.2	(表面) 縄文 (内面) 刷毛		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(小石・砂含む) 良好 褐色	F−41グリッド
2	弥生・壺	(口径) (器高) (底径)	12	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 褐色	口縁に沈線 肩に工字文 E・F−42
3	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	22	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(小石・砂含む) 良好 黒褐色	D−41
4	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	35.8	(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・黒色粒子含む) 良好 淡黄褐色	E−40
5	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	11	(表面) ナデ (内面) ナデ	ナデ	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多量に含む) 良好 黄褐色	F−42
6	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	12	(表面) ナデ (内面) ナデ	ナデ	(胎土) (焼成) (色調)	密(黒色粒子含む) 良好 褐色	E・F−41
7	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	10	(表面) ナデ (内面) ナデ	網代	(胎土) (焼成) (色調)	粗(砂多量に含む) 良好 黄褐色	E−40
8	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)	12	(表面) ナデ (内面) ナデ	網代	(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂多量に含む) 良好 褐色	F−40
9	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) 条痕文 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂含む) 良好 褐色	E・F−40
10	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) 条痕文 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂含む) 良好 褐色	F−40
11	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂含む) 良好 灰黄褐色	口縁に工字文 E−40
12	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂含む) 良好 赤褐色	口縁に工字文 E−40
13	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 赤褐色	E−40
14	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子・金雲母含む) 良好 暗褐色	F−39
15	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) 縄文 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(小石と砂多量・金雲母含む) 良好 暗褐色	E−41
16	弥生・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	やや粗(砂含む) 良好 褐色	口唇に刻み E−41

2区グリッド出土土器

番号	器種	法量(cm)		調整 器体部	調整 底部	胎土・焼成・色調		備考
1	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	14.2 4.6 5.8	(表面) ナデ・ヘラ削り (内面) ナデ	糸切り ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 赤褐色	D-41グリッド
2	土師・坏	(口径) (器高) (底径)	12.6 2.4 4.6	(表面) ナデ (内面) ナデ	ヘラ削り	(胎土) (焼成) (色調)	密(赤色粒子含む) 良好 明赤褐色	D-41
3	土師・甕	(口径) (器高) (底径)	7.8	(表面) ナデ (内面) ナデ	ナデ	(胎土) (焼成) (色調)	粗(砂多量・赤色粒子含む) 良好 赤褐色	表面採集
4	内耳	(口径) (器高) (底径)		(表面) ナデ (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密(砂・赤色粒子含む) 良好 褐色	E-44
5	須恵・甕	(口径) (器高) (底径)		(表面) タタキ目 (内面) ナデ		(胎土) (焼成) (色調)	密 良好 灰褐色	J-22

立石下遺跡2区土坑一覧表

No	形　状	位　置	長径×短径×深さ(cm)
1	長方形	I-23	76×58×41
2	円形	G-23	42×40×46
3	円形	G-23	42×40×47
4	楕円形	G-23	107×86×45
5	円形	G-23	70×68×47
6	円形	G-23	37×35×44
7	円形	G・H-24	34×31×47
8	円形	H-23	32×27×50
9	不整円形	H-24	67×34×40
10	円形	G・H-24	31×29×48
11	円形	H-24	25×23×50
12	不整円形	E-28	81×75×28
13	楕円形	E-27	108×85×40
14	不整円形	G-28	46×41×27
15	円形	G-28	26×23×19
16	円形	G-28	24×24×21
17	不整円形	E-27	56×54×26
18	円形	H-44	33×30×10
19	円形	H-44	29×27×14
20	三角形	H-44	37×23×11
21	不整円形	I-44	29×23×8
22	不整方形	H-44	29×18×7
23	不整円形	H・I-44	23×18×8
24	不整方形	I-44	30×21×4
25	楕円形	H・I-44	50×30×8
26	楕円形	I-44	57×45×40
27	楕円形	H・I-44	67×49×39
28	楕円形	H-43	70×58×27
29	——	I-43	−×−×27
30	楕円形	I-43	80×−×33
31	楕円形	I-44	66×54×36
32	楕円形	I-44	40×26×14
33	楕円形	I-44	55×44×29
34	不整円形	I-44	59×52×33
35	楕円形	J-44	48×33×31
36	楕円形	J-44	28×17×8
37	不整円形	J-44	35×32×5
38	円形	J-44	20×17×8
39	円形	J-44	38×34×17
40	楕円形	J-44	65×40×10
41	円形	I・J-43	26×20×16
42	楕円形	I-43	44×25×31
43	円形	I-43	40×39×17
44	円形	J-44	27×24×23
45	楕円形	J-44	17×12×16
46	楕円形	J-43・44	34×20×15
47	楕円形	J-43	31×22×10
48	楕円形	J-43	37×25×13
49	不整楕円形	J-43	61×35×28
50	円形	I・J-43	33×29×28
51	円形	I-43	27×26×35
52	円形	J-43	31×28×18
53	円形	J-43	24×22×37
54	円形	J-42	26×22×22
55	楕円形	J-43	30×23×7
56	不整円形	J-43	35×32×29
57	不整方形	J-43	68×55×25
58	円形	J-43	35×35×30
59	円形	J-43	32×31×44
60	円形	K-44	28×25×15
61	楕円形	K-43	66×42×39
62	楕円形	K-43	26×18×25

付 編　自然科学分析

立石下遺跡の古環境復元

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

甲府盆地には釜無川・御勅使川・笛吹川など大小の河川が流れ込み、その谷口部には扇状地地形が発達している。今回の立石下遺跡(山梨県中巨摩郡八田村所在)は御勅使川扇状地(経済企画庁総合開発局,1973)の扇端部に位置する。本地点は、釜無川扇状地との接点付近に位置することから、その氾濫の影響も受けていることが考えられる。

今回の発掘調査では、弥生時代の遺物や平安時代の住居跡・溝跡などが検出されており、平安時代頃の扇状地扇端部には集落が形成さていたことが推定されている。ただし、弥生時代については、明瞭な遺構が少なく、土地利用状況に関する情報は少なく、当時の低地の古環境に関する情報を得ることを目的とした自然科学分析の応用調査が検討された。そこで、今回は調査区内の堆積環境の変遷と当時の植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、土壌理化学分析(pH・窒素・リン酸・炭素)、軟X線写真撮影による堆積物微細形態の観察を実施する。

1.層序と試料

調査区内の堆積物の層序を図1に示す。各地点の最下部には粗粒砂～大礫からなる砂礫層が認められる。この砂礫層中にも切り合い関係が認められることから、数回の堆積によるものと判断される。また堆積構造はトラフ型斜交層理を示すことから流水域で堆積した堆積物とみられ、本地点に河川が流下していた頃に堆積した堆積物と判断される。この砂礫層直上にも砂礫層が堆積するが、層相が側方にかけて級化することで下位の砂礫層と区分される。この砂礫層はC地点付近で最も粒径が大きく砂礫が卓越するが、東側のD地点側にかけて細粒化し、淘汰の悪いマトリクスサポートの砂礫へと変化する。このような層相から本層は氾濫堆積物であり、その氾濫の主体は西側で起こっていることが推定される。本層準からは弥生時代の遺物片が出土しており、東側の1地点付近では畑などの耕作が行われていたのではないかと考えられている。

この砂礫層の上位には細礫混じり砂質シルト層が厚く堆積する。本層も後述する軟X線写真撮影観察から河川の氾濫堆積物と判断されるが、その氾濫の規模は小さかったか、もしくは氾濫を引き起こした河川は調査地点より遠方に移動している可能性がある。

本層の上位には腐植の集積するシルト層など細粒砕屑物が堆積し、西側の砂礫層と指交関係にある。腐植質シルト層ないし砂礫層上面において、平安時代の溝跡などの遺構が検出されている。最上部は礫を含むシルトからなる層準で、旧水田の床土・耕作土ないしは盛土である。

試料は、第1地点～第3地点を設定して採取した。第1地点では平安時代の遺構確認面下位の堆積物から最下部の砂礫層までを連続する柱状試料として7点(試料番号1～7)採取した。また、第2地点・第3地点では平安時代の遺構確認面より下位堆積物から層位試料として、各々試料番号1～17の17点、試料番号1～6の6点を採取した。これら採取試料のうち、上記の目的を考慮しながら、軟X線写真撮影用試料および微化石分析用試料の抽出を行い分析に供した。また、第1地点最下部礫層中には炭化材状物質が認められたので、放射性炭素年代測定と炭化材同定試料として採取した。

2.分析方法

(1)放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼した。

(2)珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。

(3)花粉分析

試料を湿重で約10g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離(臭化亜鉛,比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸＝9：1)の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類に

ついて同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

(4)植物珪酸体分析

試料を湿重約5g秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W,250KHz,1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集の層位的分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(5)土壌理化学分析

pH(H2O)はガラス電極法、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、全炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解-水蒸気蒸留法でそれぞれ行う(土壌環境分析法編集委員会,1997)。以下に各項目の操作工程を示す。

＜分析試料の調製＞

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

＜pH(H2O)＞

風乾細土試料10.0gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で撹拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H2O)を測定する。

＜全リン酸＞

風乾細土試料1.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸20mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液(バナドモリブデン酸・硝酸液)を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)を求める。

＜全炭素＞

粉砕土試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全炭素量(T-C乾土%)を求める。

＜全窒素＞

風乾細土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約3.0gと硫酸10mlを加え加熱分解する。分解後、蒸留水約30mlを加え放冷した後、分解液全量を供試して水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素含量(T-N乾土%)を求める。また、全炭素含量を全窒素含量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

(6)炭化材同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(7)軟X線写真撮影

第1地点の土層断面より採取したブロック状の試料を、幅7cm、長さ20cm、厚さ1cmの板状の試料を分離、成形して軟X線写真の撮影を行った。撮影は、ニッテツ・ファインプロダクツ釜石文化財保存処理センターの協力を得た。

3.結果

(1)放射性炭素年代測定

測定を行ったが回収される炭素量が少なく、年代値の計算が不可能である。

(2)珪藻分析

4試料とも珪藻化石は全く検出されない。

(3)花粉分析

結果を表1に示す。第1地点試料番号2～5の4試料は、花粉・胞子化石がほとんど検出されない。検出される種類は、木本花粉のマツ属、シダ類胞子の計2種類である。

(4)植物珪酸体分析

結果を表2、図2・3に示す。各地点からは保存状態の良好な植物珪酸体が検出されるが、概して検出個数が少ない。以下に、各地点での産状を述べる。

＜第１地点＞
４試料ともほぼ同様な産状が見られ、タケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族(ススキ属を含む)やイチゴツナギ亜科などがわずかあるいは稀に認められる。
＜第２地点＞
２試料ともタケ亜科の産出が目立ち、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科などがわずかあるいは稀に認められる。
＜第３地点＞
本地点でもタケ亜科の産出が目立つ産状は同様であるが、試料番号３で栽培植物のイネ属がわずかに認められる。
(５)土壌理化学分析
結果を表３に示す。以下、項目ごとに結果を示す。
＜pH(H２O)＞
土壌が酸性化すると、弱酸性下ではあまり影響はないが、強酸性化では植物の根の働きを直接阻害し、間接的にも有害イオンの溶出を促すことが知られている。また、窒素、リン酸、カリウム、カルシウム、マグネシウム、ホウ素、モリブデンなどの欠乏症やマンガン、鉄、銅、亜鉛などの過剰症を引き起こす。逆にアルカリ化ではマンガン、鉄、銅、亜鉛などの欠乏症が引き起こされる。分析結果では各試料ともに6.5～6.9の弱酸性～中性のpHにあり、特に問題となるものは認められないものの、やや反応性が低いことが予想される。
＜全リン酸＞
リン酸は植物体内の細胞膜成分のリン脂質や核酸の構成成分であり、呼吸やエネルギー代謝に関与する重要な要素である。土壌中に含まれるリン酸は土壌に強く固定されるために植物が利用可能な量は少ない。特に活性アルミニウムを多く含む火山灰土壌においてこの傾向が著しいものとなる。リン酸が不足すると発育不良となり、開花や結実も悪いものとなる。分析結果では全リン酸はいずれの試料も0.85～1.00mg/gと低い値であった。全リン酸量の1/5～1/20が有効態リン酸量の目安であることを考えれば、植物生育の培地土壌としてはやや難があると推察される。
＜全炭素・全窒素＞
全炭素、全窒素は主として土壌腐植を構成する要素である。これまでの研究から腐植の構成要素中、炭素の割合が約58％であることが知られていることから、炭素量に1.724を乗じて腐植量と見ることができる。腐植は水分保持や団粒形成などの作物の生育に良好な土壌を作り、窒素などの養分を供給する物質であることから、土壌の肥沃度を論じる上で重要な項目とされる。一方、窒素については腐植などの「有機態窒素」のほかに、土壌粘土に吸着された植物に容易に利用されうる形態のアンモニア態、硝酸態の「無機態窒素」がある。窒素は植物体内のタンパク質や葉緑素や体内代謝を促進する酵素の重要な構成成分であり、欠乏すると養分吸収や同化作用、茎葉・根の身長阻害を引き起こし、過剰にあっては品質の低下がおそれられる。分析結果では全炭素量はいずれも0.57％以下の低い値であり、腐植量に換算しても1.0％未満であり、肥沃度の面から見ると極めて低い傾向にある。全窒素量についてもまた0.08％以下の低い値となっており、植物生育の培地土壌としては適正な土壌であったとは考えにくい。ただし、無機態窒素について今回の結果で明らかとされていないことから、明確な結論は差し控えたい。
(６)炭化材同定
観察の結果、試料は有機質状のものであると考えられるが、種類を特定できる組織構造が認められない。
(７)軟X線写真撮影観察
第１地点の堆積物の軟X線写真を図版２～６に示す。以下に各試料の観察結果を述べる。
・試料番号６(写真図版21)
本試料には２層準に不明瞭な層界が認められる。各層の粒径はシルト・微粒砂混じり細礫～細粒砂の砂礫からなり、マトリクスサポートである。縦・横方向の太い植物根と細い植物根が認められるが、中・上部でその密度が高くなる。また、各層上部は生物擾乱の影響により堆積構造が乱れている。これらの層準については当時地表面となっていた可能性がある。また、これらの堆積物は河川の氾濫等の影響下で堆積したことが推定される。また、堆積後には一時的にせよ植生に覆われることがあったと推定される。
・試料番号５(写真図版20)
本試料には３層準に不明瞭な層界が認められる。砕屑物の粒径は下部から上部にかけて細粒化し、各層単位でも粒径が上部で細粒となる。また、各層上部は生物擾乱作用により構造が乱れる。全体に縦方向の植物根の痕跡が見られ、その形状は太いものが多い。これらのことから、本試料も下位層と同様な成因、すなわち河川の氾濫等の影響下で堆積したことが推定される。
・試料番号４(写真図版19)
本試料には２層準に不明瞭な層界が認められる。上部の層はシルト・粘土混じり細粒砂、中部の層は下部が細粒砂・上部が砂粒砂～シルト、下部層は細礫・シルト混じり細粒砂からなる。全層準において縦方向の細かな植物根が卓越し、太い植物根も一部認められる。下部層は堆積後の擾乱作用に乱れている。これらのことから、本試料層準も河川の氾濫等の影響下で堆積したことが推定される。ただし、中・上部では粒径を減じることから、河川の氾濫等の影響は弱まわったか、あるいは氾濫を引き起こしていた河川が移動したなどの可能性が考えられる。

表1　花粉分析結果

種　類	第1地点			
試料番号	2	3	4	5
木本花粉				
マツ属	-	1	-	-
シダ類胞子				
シダ類胞子	2	2	5	2
合　計				
木本花粉	0	1	0	0
シダ類胞子	2	2	5	2
総計	2	3	5	2

表2　植物珪酸体分析結果

種　類	第1地点				第2地点		第3地点	
試料番号	2	3	4	5	7	15	3	6
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	1	-
タケ亜科	56	71	16	26	101	17	143	160
ヨシ属	-	-	2	-	1	-	-	1
ウシクサ族ススキ属	1	1	4	-	3	-	-	2
イチゴツナギ亜科	1	3	2	2	3	-	1	-
不明キビ型	13	8	5	7	7	2	11	11
不明ヒゲシバ型	2	1	-	1	2	-	5	2
不明ダンチク型	19	24	7	10	26	5	50	38
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	2	-
タケ亜科	79	83	29	6	109	14	129	97
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	1	-
ウシクサ族	14	8	-	3	5	-	4	1
不明	17	11	6	1	15	2	8	9
合　計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	92	108	36	46	143	24	211	214
イネ科葉身機動細胞珪酸体	110	102	35	10	129	16	144	107
総　計	202	210	71	56	272	40	355	321

表3　土壌理化学分析結果

地点	試料番号	土性　土色	pH(H_2O)	P_2O_5(mg/g)	全炭素(%)	全窒素(%)	備考
第1地点	2	重埴土 2.5Y4/3 オリーブ褐	6.5	1.00	0.57	0.08	
	3	重埴土 2.5Y4/4 オリーブ褐	6.6	0.96	0.54	0.07	
	4	重埴土 2.5Y3/3 暗オリーブ褐	6.7	0.90	0.50	0.07	礫富む
	5	重埴土 2.5Y4/3 オリーブ褐	6.5	0.85	0.48	0.06	礫富む
第2地点	7	重埴土 2.5Y4/4 オリーブ褐	6.9	0.87	0.47	0.07	
第3地点	3	重埴土 2.5Y4/3 オリーブ褐	6.5	0.92	0.57	0.08	

注1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
注2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
重埴土（HC：粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）

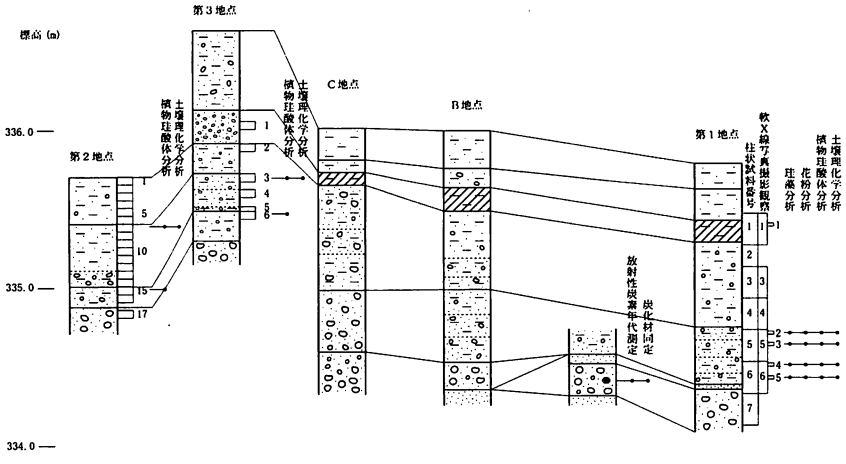


図1　試料採取地点の模式柱状図および分析層位

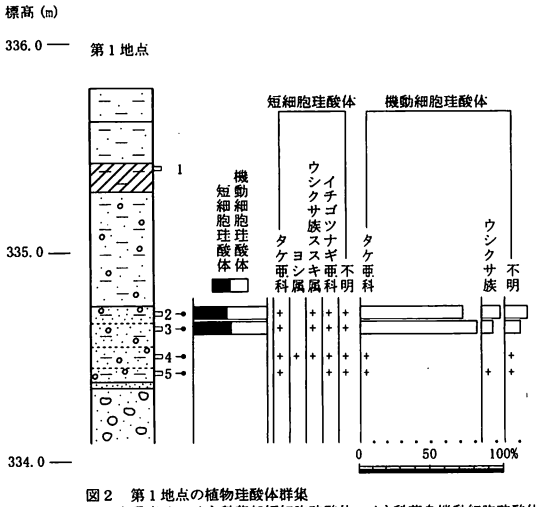


図2　第1地点の植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。

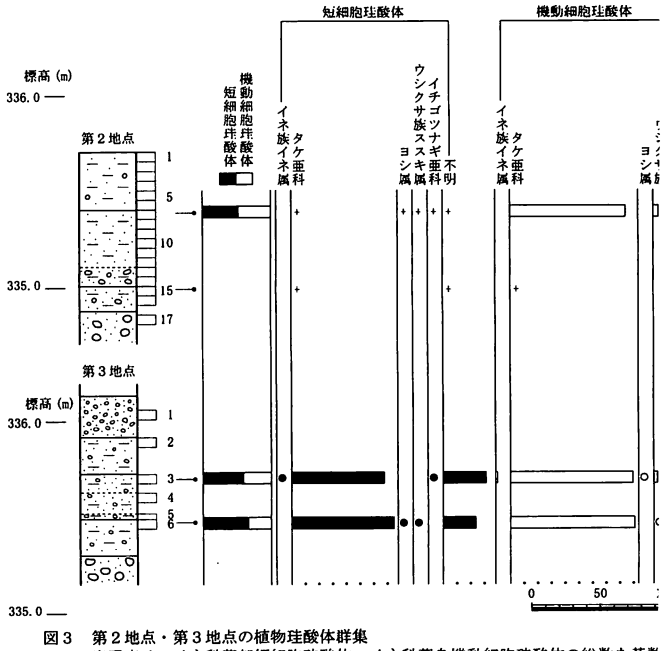


図3　第2地点・第3地点の植物珪酸体群集
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満の種類、＋はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された

・試料番号３(写真図版18)

本試料には３層準に不明瞭な層界が認められる。いずれの層も細粒砂～シルト・粘土からなり、下部で細粒砂が卓越し、上部でシルト・粘土の泥分を多く含む。また、各層上部は下部に比較して、擾乱作用の影響が及んでいる。このような構造から、下位層と同様に氾濫等の影響で堆積した水成堆積物であり、堆積後には植生に覆われることがあったと考えられる。また、本層準より植物根の根形が変化し、細いものの密度が高くなる。このことから、本層準の頃より地表を覆う植物の種類が変化した可能性がある。

・試料番号1(写真図版17)

本試料には２層準に層界が認められる。この層界は現地調査時に確認されている層界に対比するものである。下部の層は細粒砂からなり、上位層から連続する縦方向の植物根が認められる。

中部の層は細粒砂～シルト・粘土からなり、強い擾乱作用が及び、粒団状の構造が発達する。この粒団の径は5mm前後と比較的揃っており、粒団間の孔隙も大きい。このことから、本層準は土壌化の進行が著しく、人為的な擾乱作用(例えば耕作など)の影響を強く受けていることが推定される。上部の層は細粒砂からなり、部分的に擾乱作用の影響がおよぶ。また、上位層から連続する縦方向の植物根が認められる。

４.考察

調査区最下部の第１地点の砂礫層から出土した炭化物は、保存状態が悪く組織構造が観察できなかったため種類を特定することができなかった。また、放射性炭素年代測定を実施したが、炭素量が少なく年代値を得ることができなかった。これは、試料が透水性の良好な礫層に含まれていたことを考慮すると、好気的な条件下で分解が進行して回収される炭素量が少なかったことに起因すると判断される。そのため、本砂礫層の堆積年代については特定することができなかった。

この砂礫層の上位に堆積する堆積物は、結果に述べたように花粉・珪藻化石ともにほとんど検出されず、植物珪酸体も検出個体数が少なかった。これらの微化石は、シルト以下の微細粒子と挙動をともにする(例えば、松下,1982；小杉,1989など)こと、堆積物の粒径が砂を主体とすることを合わせ考えると、堆積時に流失したことが原因の一つとして考えられる。また、堆積構造からは、これらの堆積物は河川の氾濫等の影響下で堆積したことが推定されており、堆積速度が速かったために取り込まれる化石数が少なくなった可能性がある。いずれにしても、これらの堆積物が堆積する頃は、土地的条件は河川の氾濫等の影響を受ける不安定な場所であったことが推定される。

栽培種に関しては、第３地点で栽培種のイネ属が検出された。出現率が低率であることや、堆積物の成因を考慮すると調査区内で稲作が行われていたとは考えにくい。ただし、当時の集水域およびその周辺には栽培種のイネが生育していた、あるいは稲作が行われていた可能性が考えられる。一方、土壌の特性に着目してみると、対象とした土壌は土性区分においていずれの試料も重埴土に区分されることから、保肥力は高いものの、通気性、排水性、保水力が悪く、耕耘にも多大な労力を要する土壌と考えられる。土色もオリーブ色を呈し、還元的であり、排水不良の影響とも見てとれる。化学性を見るとpHについては問題ない値であるため、生育阻害を引き起こすような土壌ではない。しかし、腐植量が少なく、団粒形成が阻害されており、リン酸や窒素量も必要養分量として確保されていないことから、畑地としての用途に用いる土壌としては適切な土壌でないといえる。また、このことは軟X線写真の観察結果でも明瞭な人為的な活動による粒団の形成は確認することができなかったことからも推定される。また、堆積物中に認められた植物の根茎は太く、縦方向・横方向に発達していたことや、同層準でタケ亜科やウシクサ族の植物珪酸体が産出していることから、これら植物が分布する草地のような場所であった可能性がある。

以上、植物微化石の産状および土壌の理化学性を考慮すると、弥生時代の遺物を包含する砂礫層堆積期に本遺跡の周辺が畑地として利用されていた可能性は低いと思われる。堆積状況等も含めて考慮すると、例えば河川の氾濫をしばしば受けるなど、不安定な環境が続いていたために耕作地としては利用しにくい状況にあったのではないかと予想される。これについては、本地域の地形発達史も含めて検討していくようにしたい。

引用文献

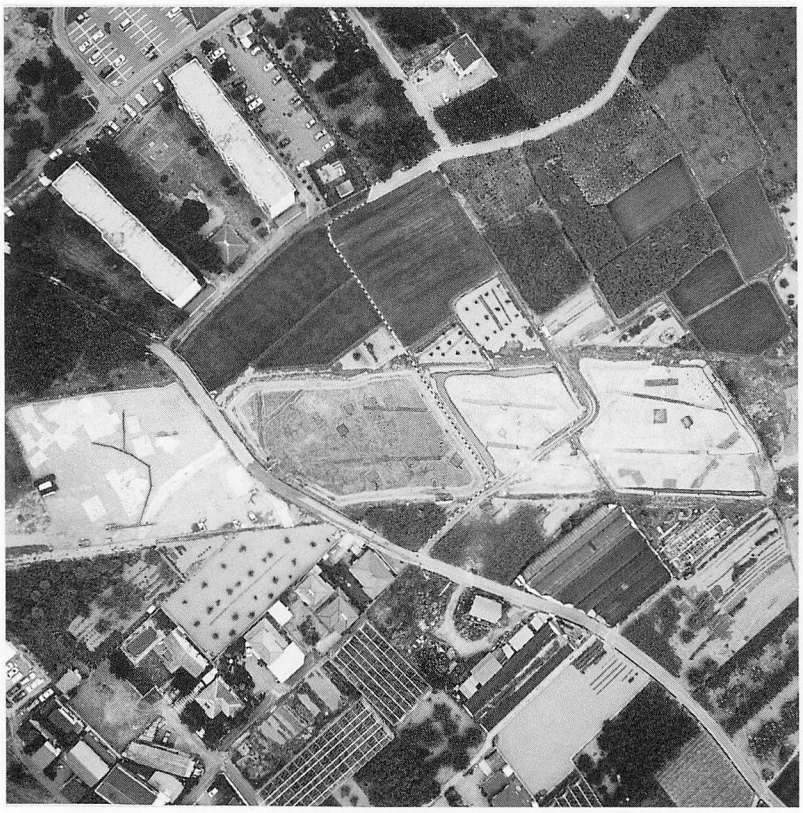
土壌環境分析法編集委員会編(1997)土壌環境分析法.427p.,博友社.
近藤錬三・佐瀬　隆(1986)植物珪酸体分析,その特性と応用.第四紀研究,25,p.31-64.
小杉正人(1989)珪藻化石群集の形成過程と古生態解析.日本ベントス研究会誌,35／36,p.17-28.
松下まり子(1982)播磨灘表層堆積物の花粉分析-内海域における花粉・胞子の動態-.第四紀研究,21,p.15-22.
農林省農林水産技術会議監修(1967)「新版標準土色帖」.
ペドロジスト懇談会編(1984)「土壌調査ハンドブック」.156p.,博友社.

図　　版

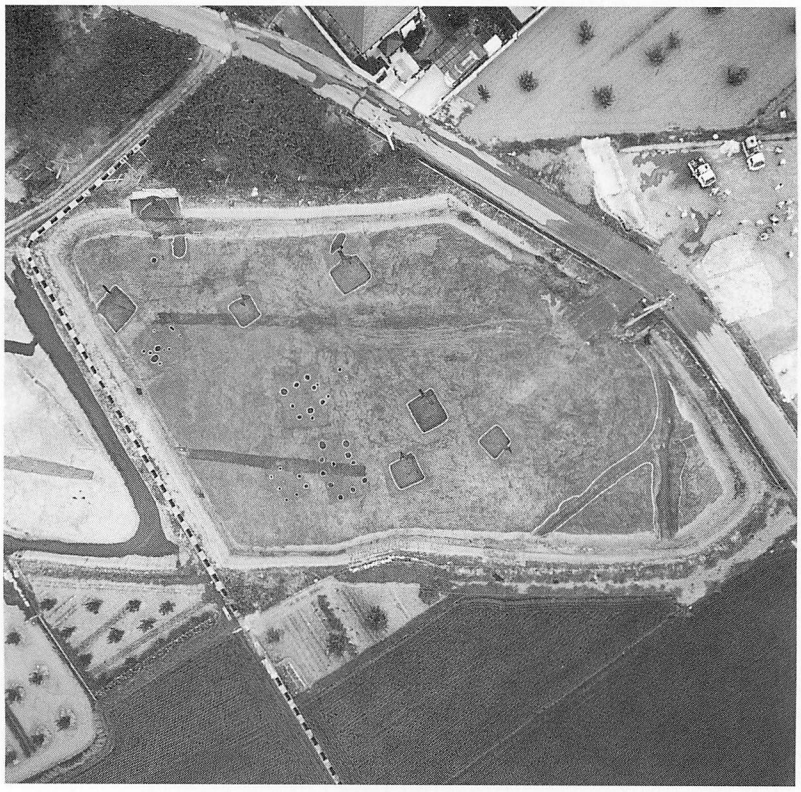
立石下遺跡全景（東から）

立石下遺跡全景（北から）

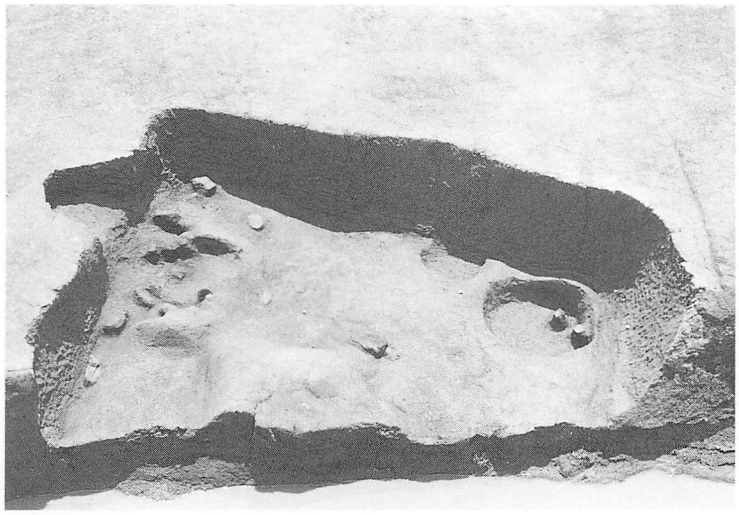
図版 2



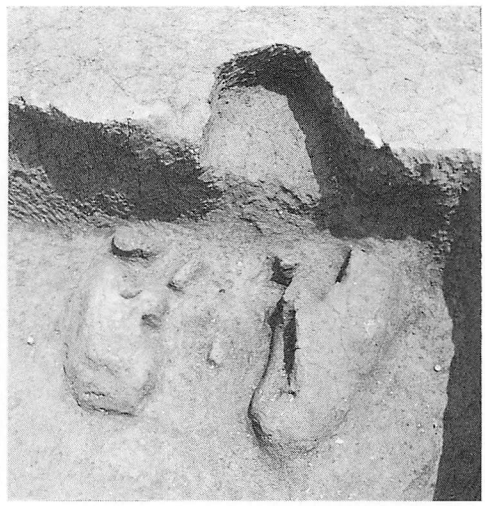
立石下遺跡全景



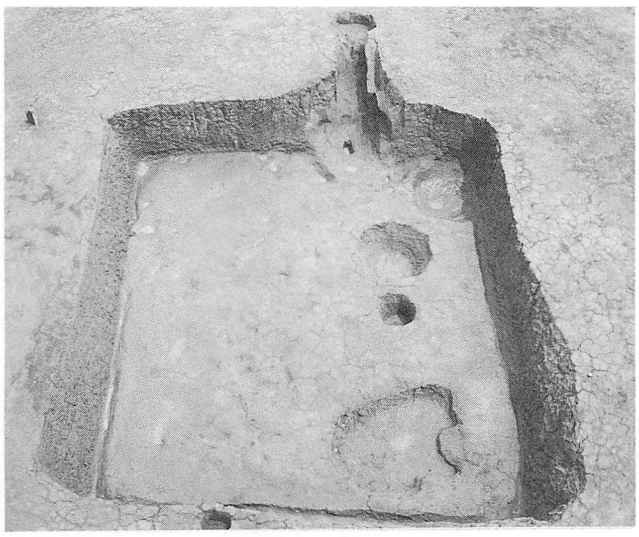
立石下遺跡 2 区



1 区 1 号住居跡



1 区 1 号住居跡カマド



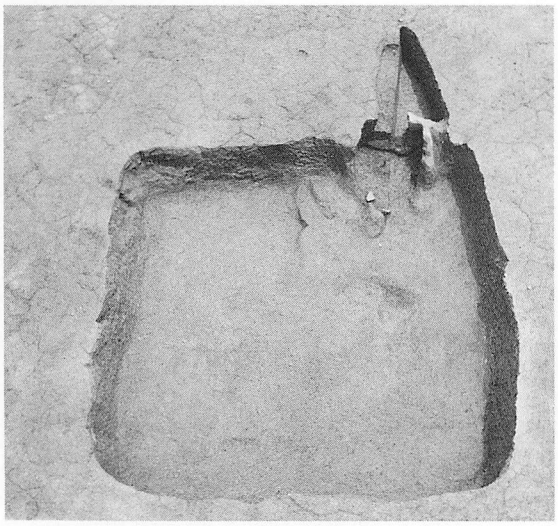
1 区 2 号住居跡

1 区 2 号住居跡カマド

1 区 2 号住居跡　ピット 4

1 区 2 号住居跡　ピット 3

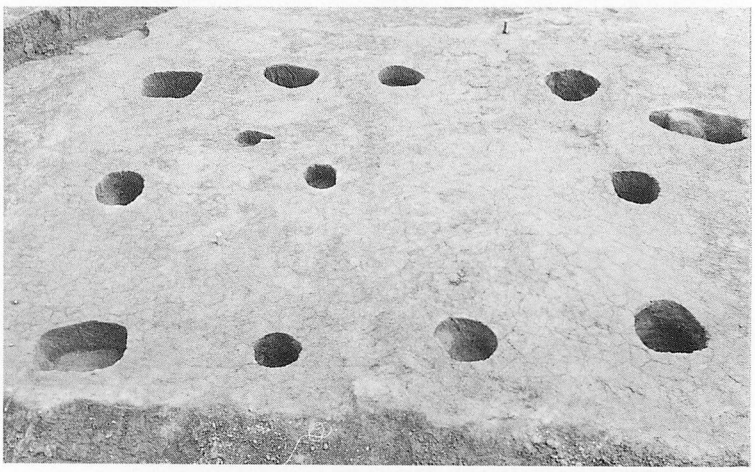
図版 4



1 区 3 号住居跡

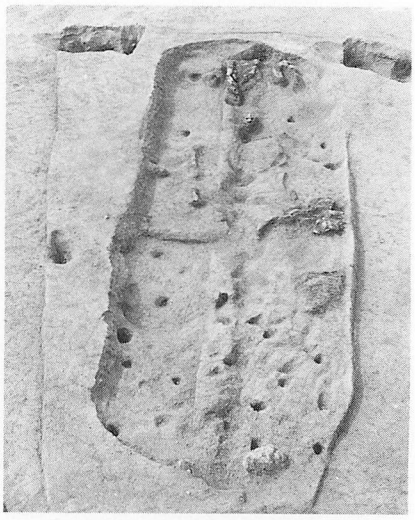
1 区 3 号住居跡カマド

1 区 3 号住居跡　遺物出土状況



1 区 1 号掘立柱建物跡

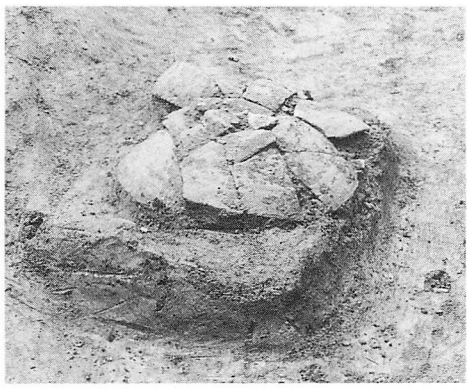
1 区 1 号柱列



1 区 2 号土坑

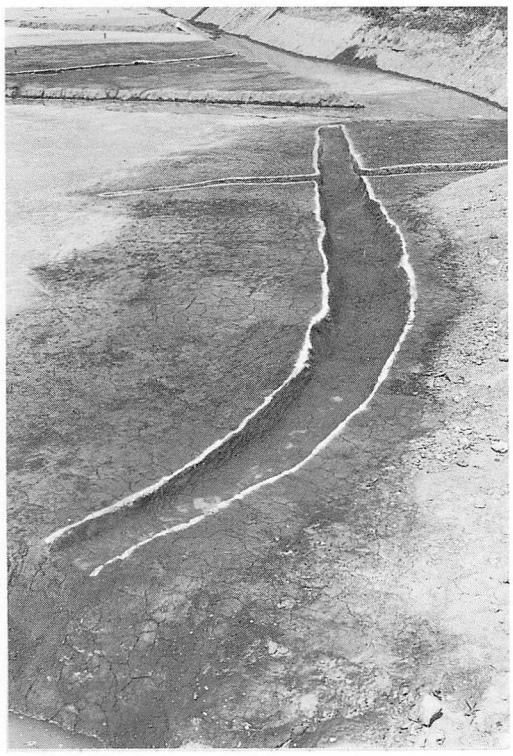
1 区 3 号土坑

1 区 5 ・ 8 号溝



1 区 5 号溝遺物出土状況

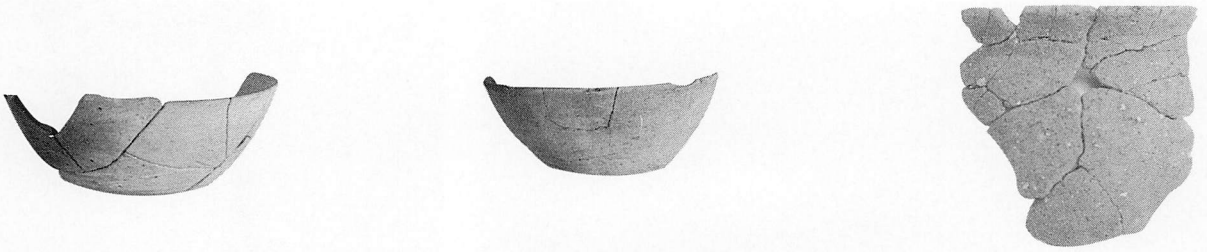
1 区 5 号溝貝集中



1 区10～12号溝

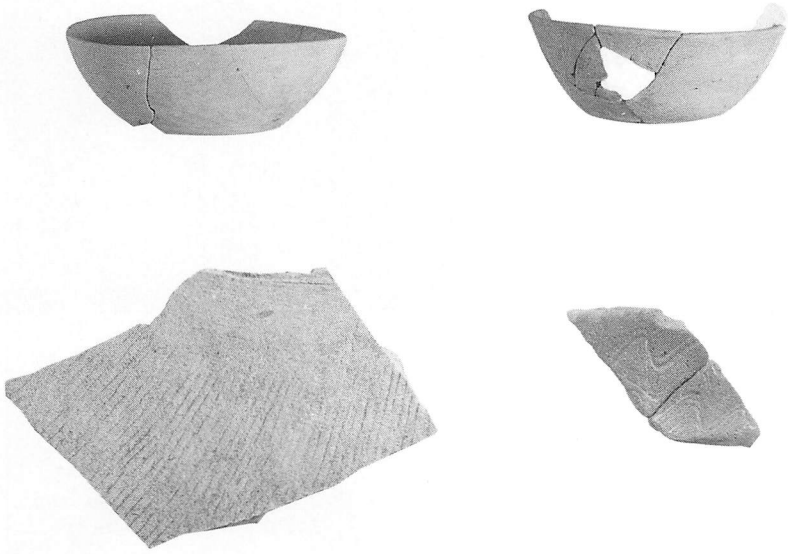
1 区 9 号溝

図版 6



1 区 1 号住居跡出土遺物

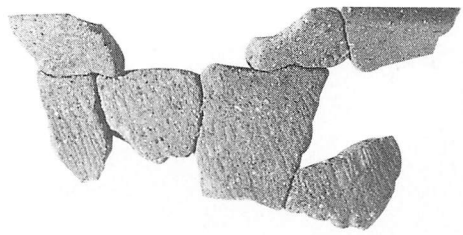
1 区 2 号住居跡出土遺物



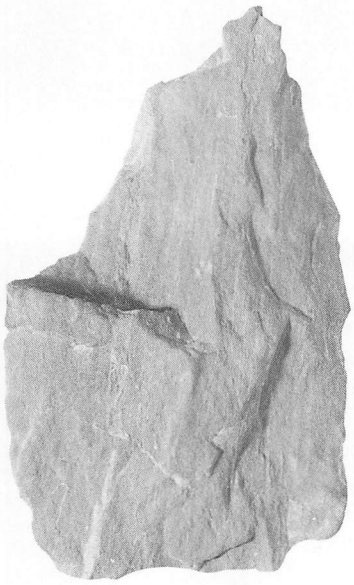
1区3号住居跡出土遺物

1区1号掘立柱建跡⑤出土羽口

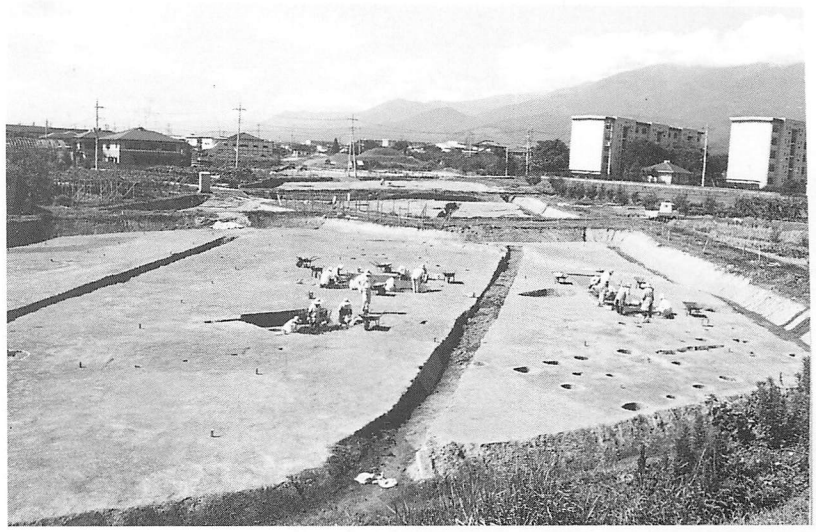
1区5号溝出土遺物



1区6号溝出土遺物



1区　打製石斧



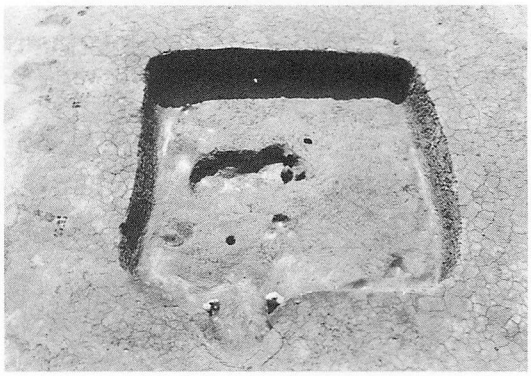
1区　調査風景

図版 8

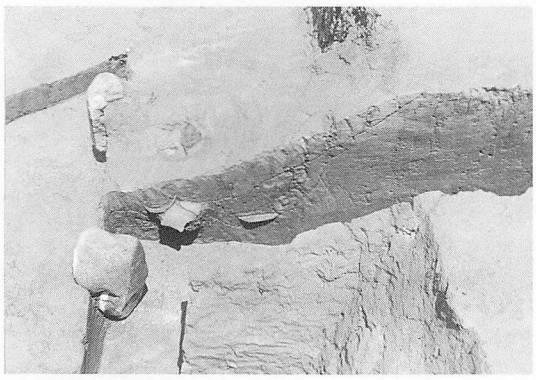
2 区 1 号住居跡

2 区 3 号住居跡

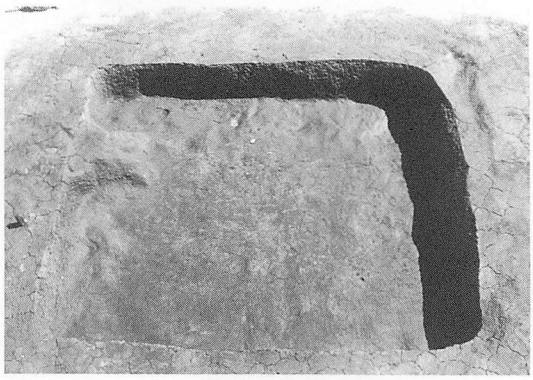
2 区 2 号住居跡



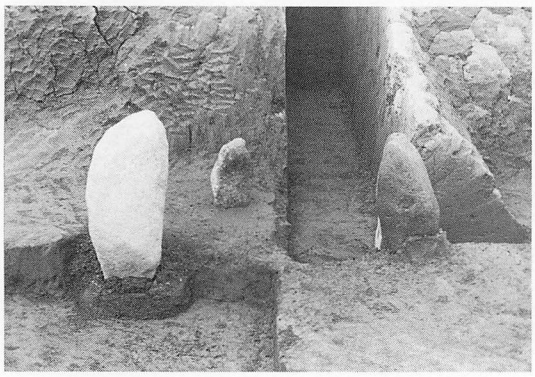
2 区 4 号住居跡



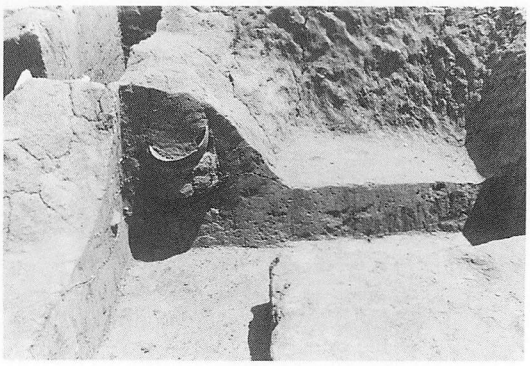
2 区 2 号住居跡・カマドセクション



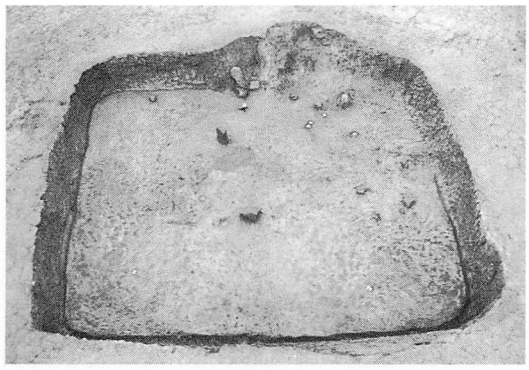
2 区 5 号住居跡



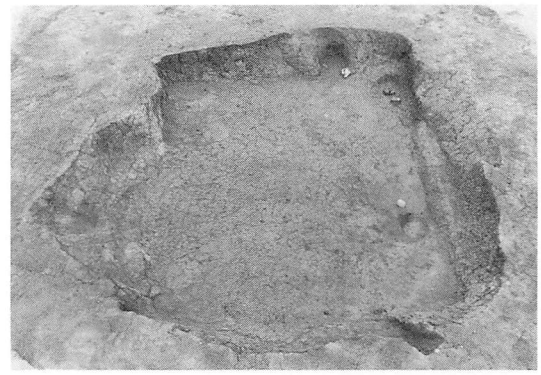
2 区 2 号住居跡・カマド内支柱



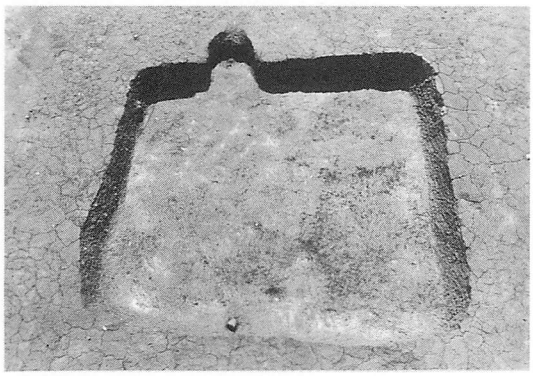
2 区 5 号住居跡・カマド



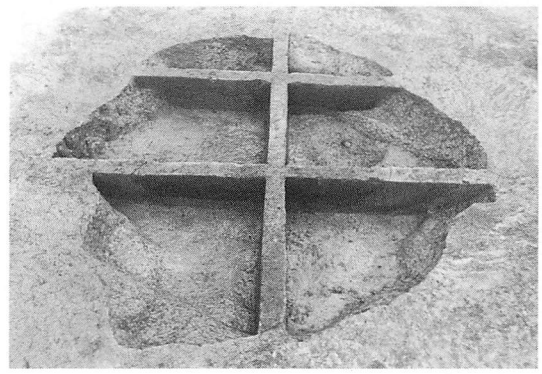
2 区 6 号住居跡



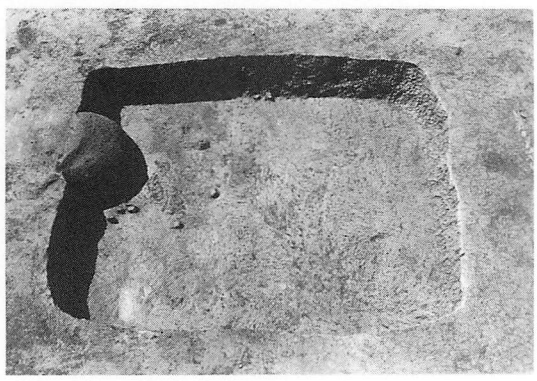
2 区 9 号住居跡



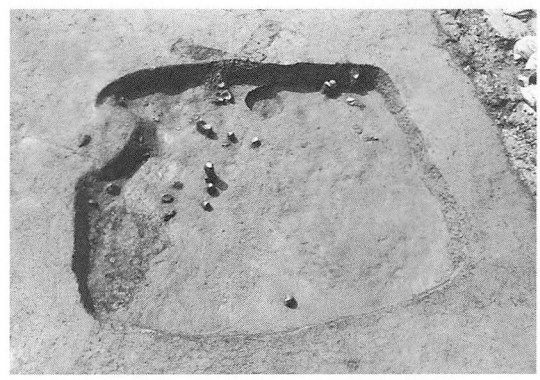
2 区 7 号住居跡



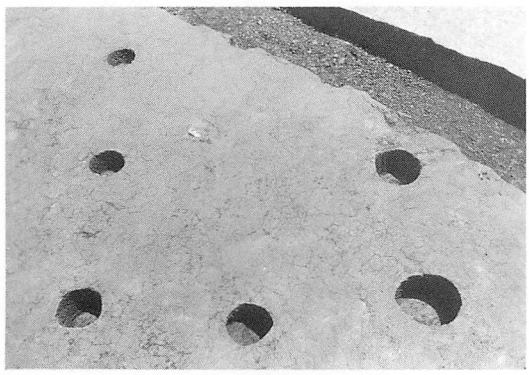
2 区 9 号住居跡・3 号炭焼窯跡
ベルトセクション



2 区 8 号住居跡



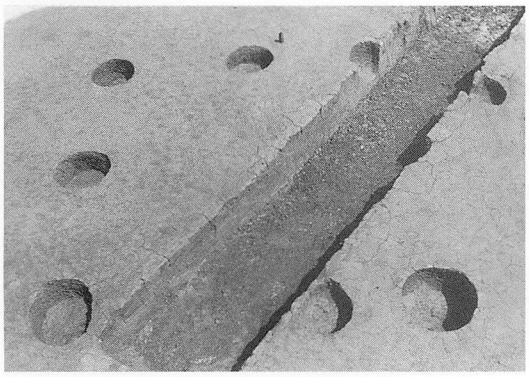
2 区10号住居跡



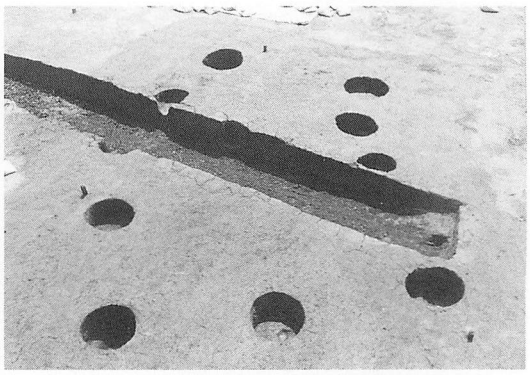
2 区 3 号掘立柱建物跡

2 区 4 号掘立柱建物跡

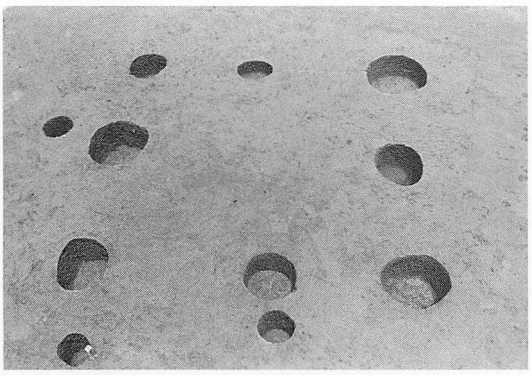
図版10



2区2号掘立柱建物跡

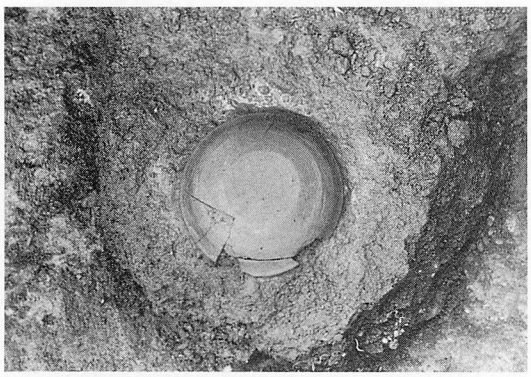


2区2号掘立柱建物跡

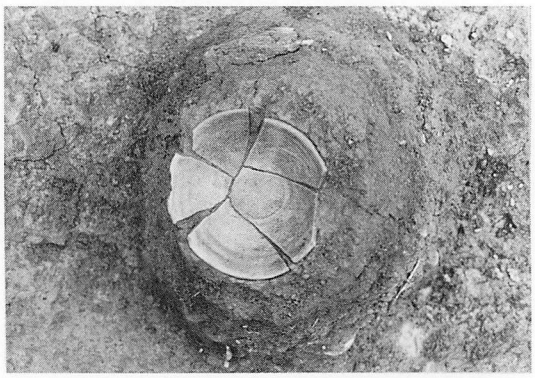


2区1号掘立柱建物跡

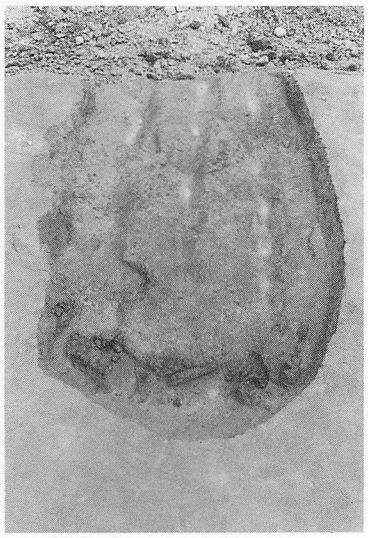
2区1号炭焼窯跡



2区1号溝状遺構出土土器



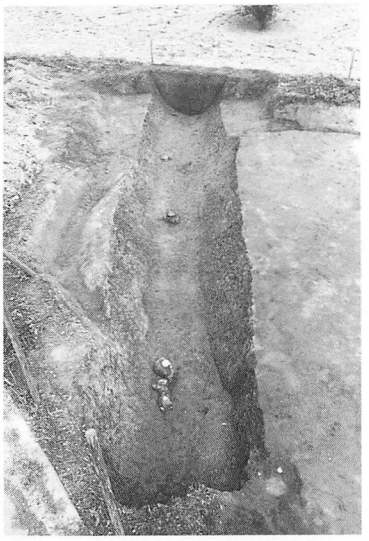
2区1号溝状遺構出土土器



2区1号炭焼窯跡

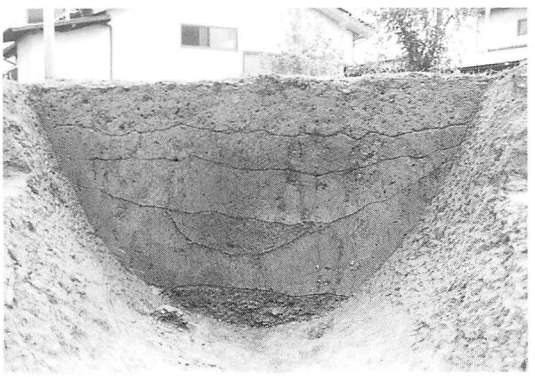
2区2号炭焼窯跡

2区1号溝状遺構(南から)



2区1号溝状遺構(西から)

2区1号溝状遺構出土土器



2区1号溝　東詰セクション

2区5・6号溝　ベルトセクション

2区2号溝状遺構(南から)

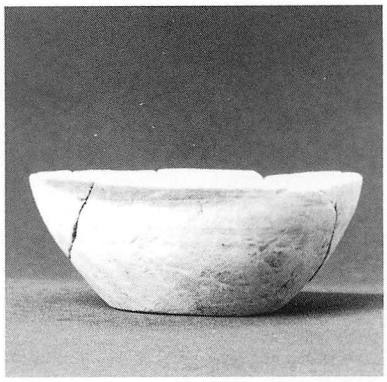
2区2号溝状遺構(西から)

2区3号溝状遺構(南から)

2区1号住居跡出土土器

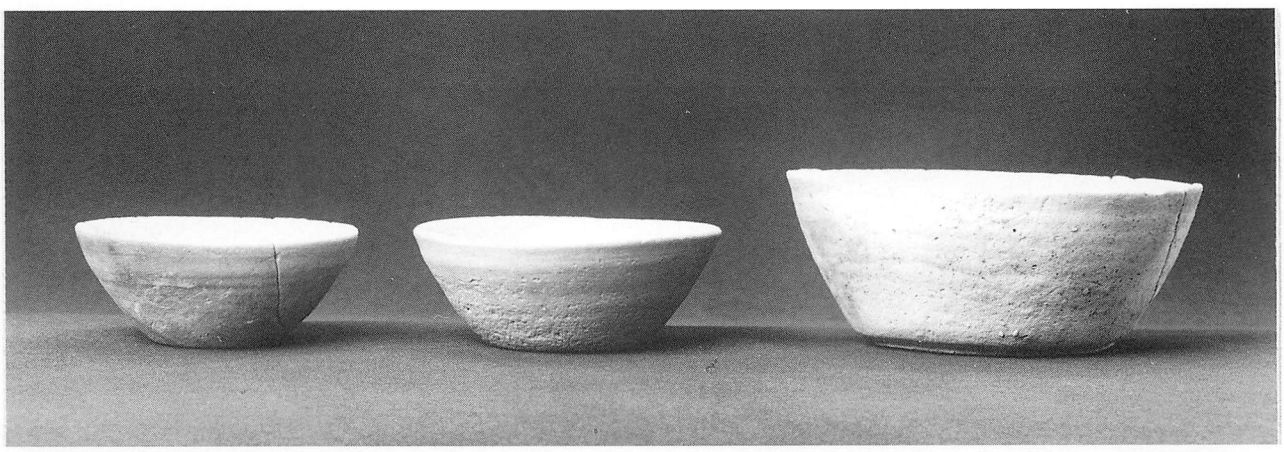
2区2号住居跡出土土器

2区1号住居跡出土土器



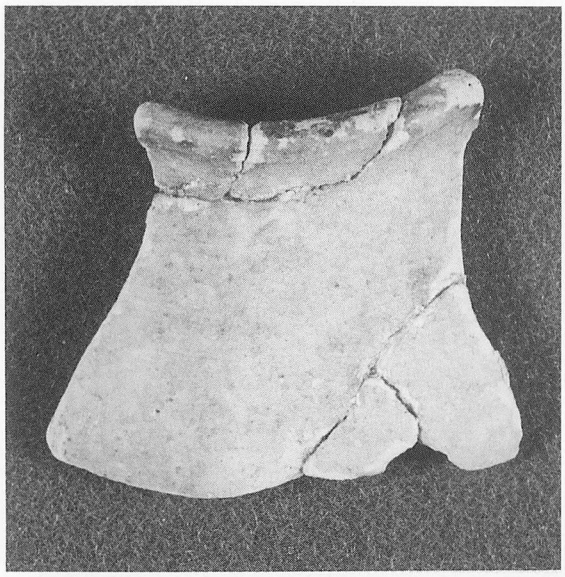
2区4号住居跡出土土器

2区5号住居跡出土土器



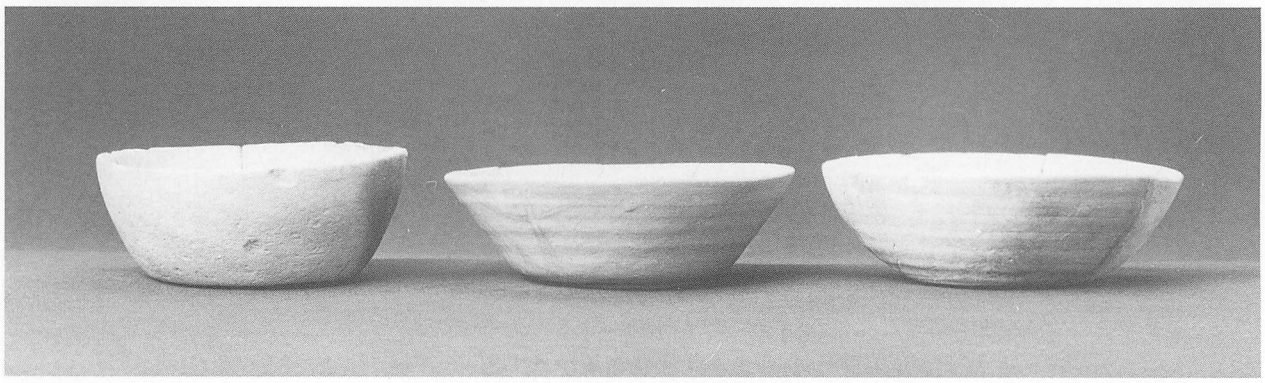
2区5号住居跡出土土器

図版14



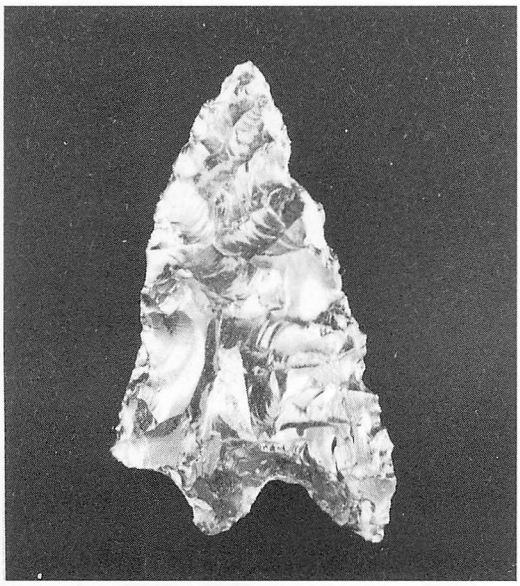
2区7号住居跡出土土器

2区7号住居跡出土土器

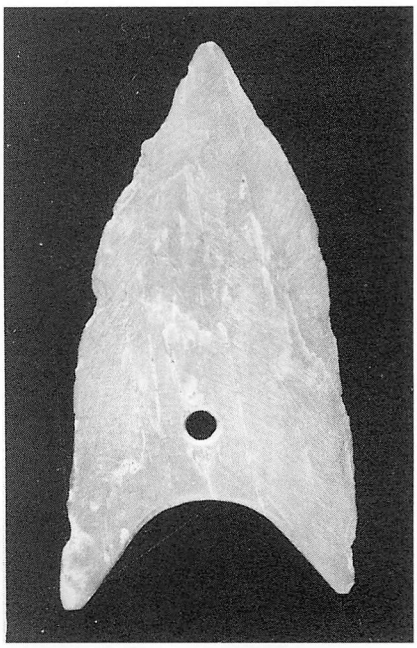


2区7号住居跡出土土器

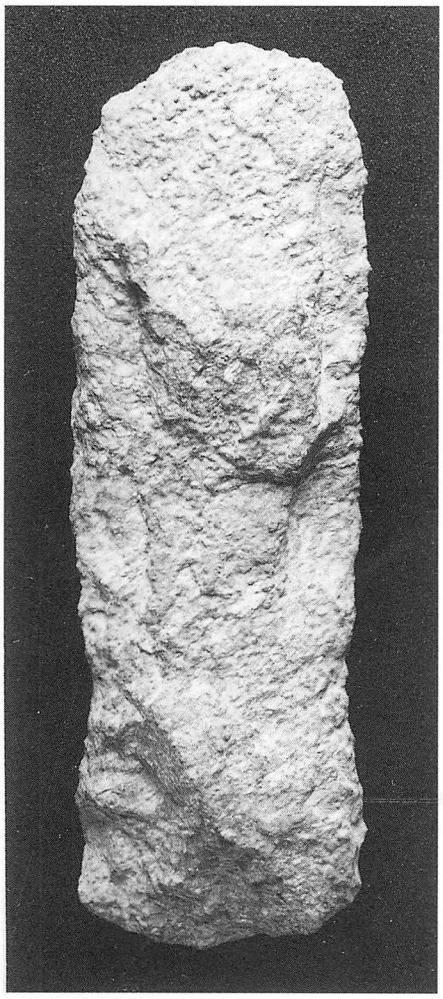
2区1号溝状遺構出土土器

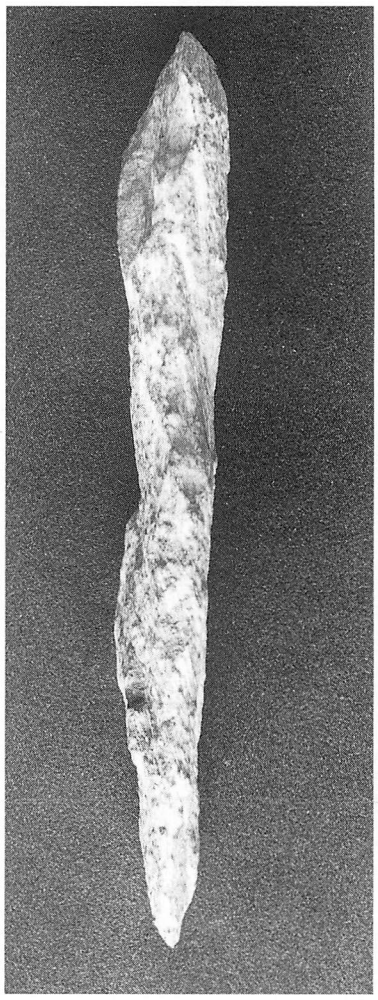


2区2面有茎石鏃



2区2面磨製石鏃

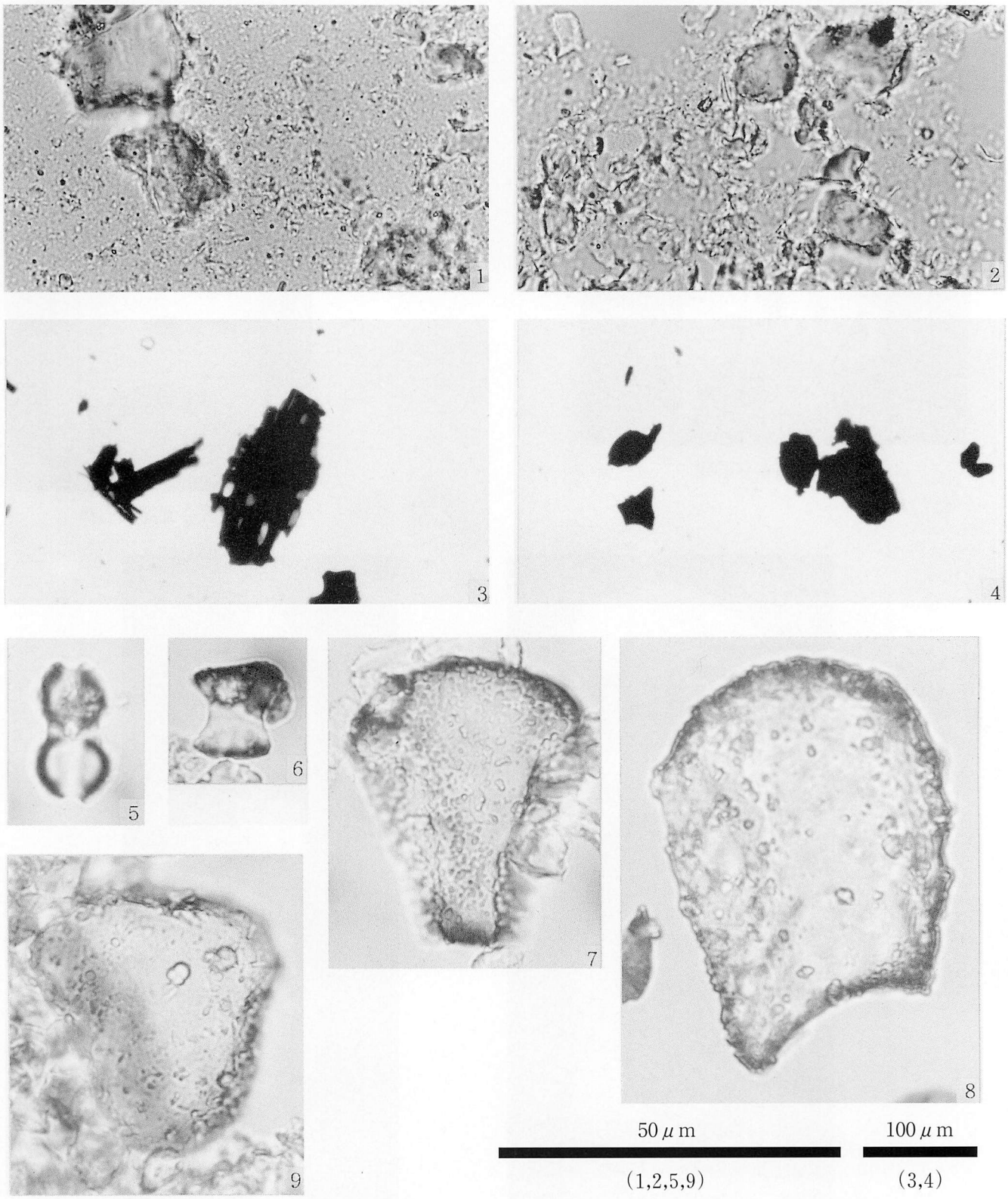




2区2面打製石斧

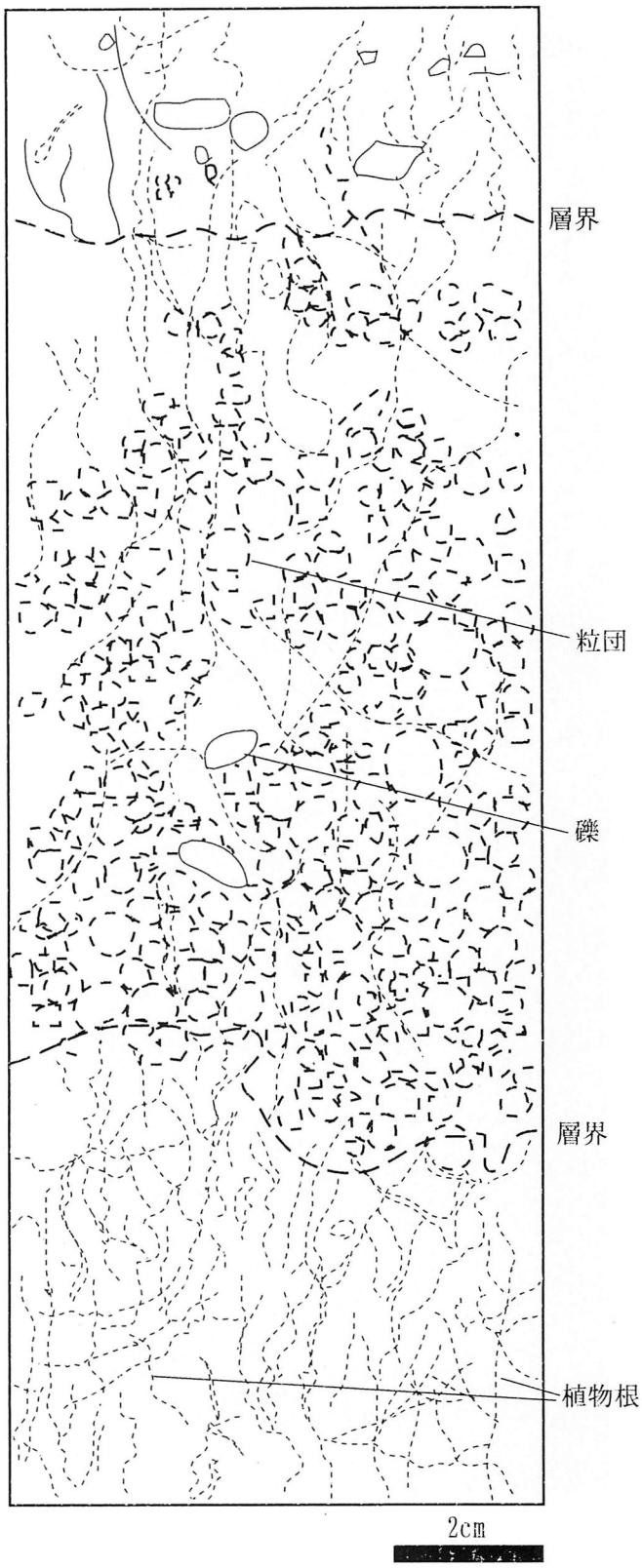
図版16

図版１　珪藻分析・花粉分析プレパラート内の状況写真および植物珪素体



1. 珪藻分析のプレパラート内の状況（１地点；2）
2. 珪藻分析のプレパラート内の状況（１地点；4）
3. 花粉分析のプレパラート内の状況（１地点；2）
4. 花粉分析のプレパラート内の状況（１地点；4）
5. イネ属短細胞珪素体（３地点；3）
6. タケ亜科短細胞珪酸体（３地点；6）
7. タケ亜科機動細胞珪素体（３地点；3）
8. ヨシ属機動細胞珪酸体（３地点；3）
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体（１地点；2）

図版２　軟X線写真（１）

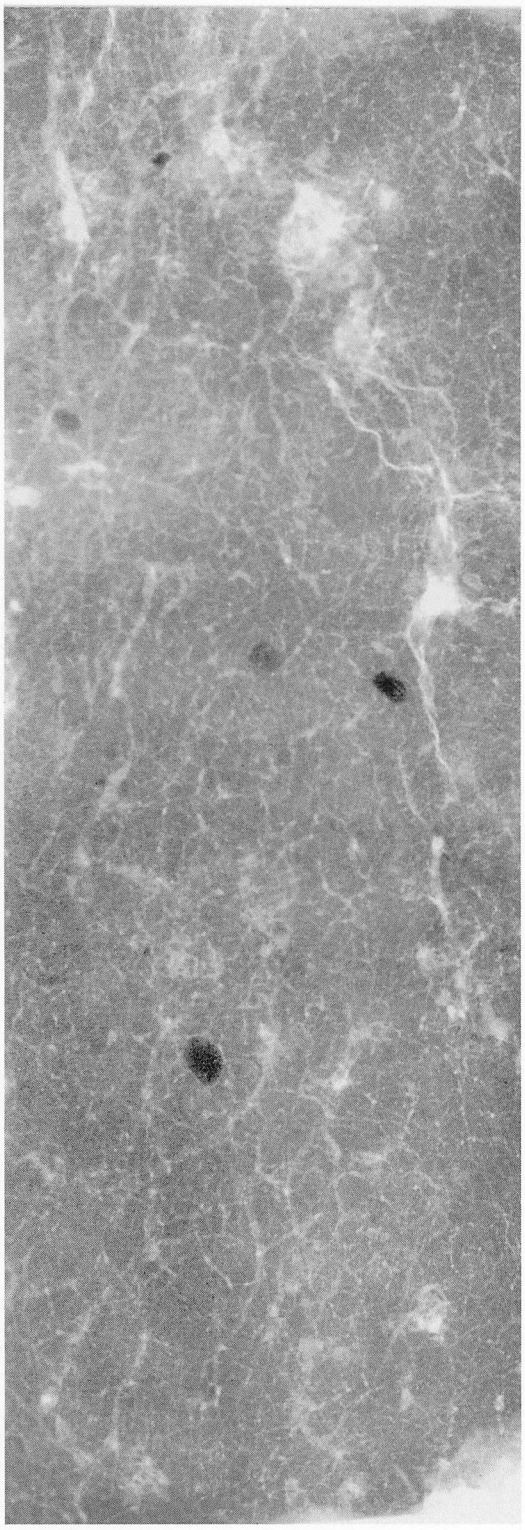


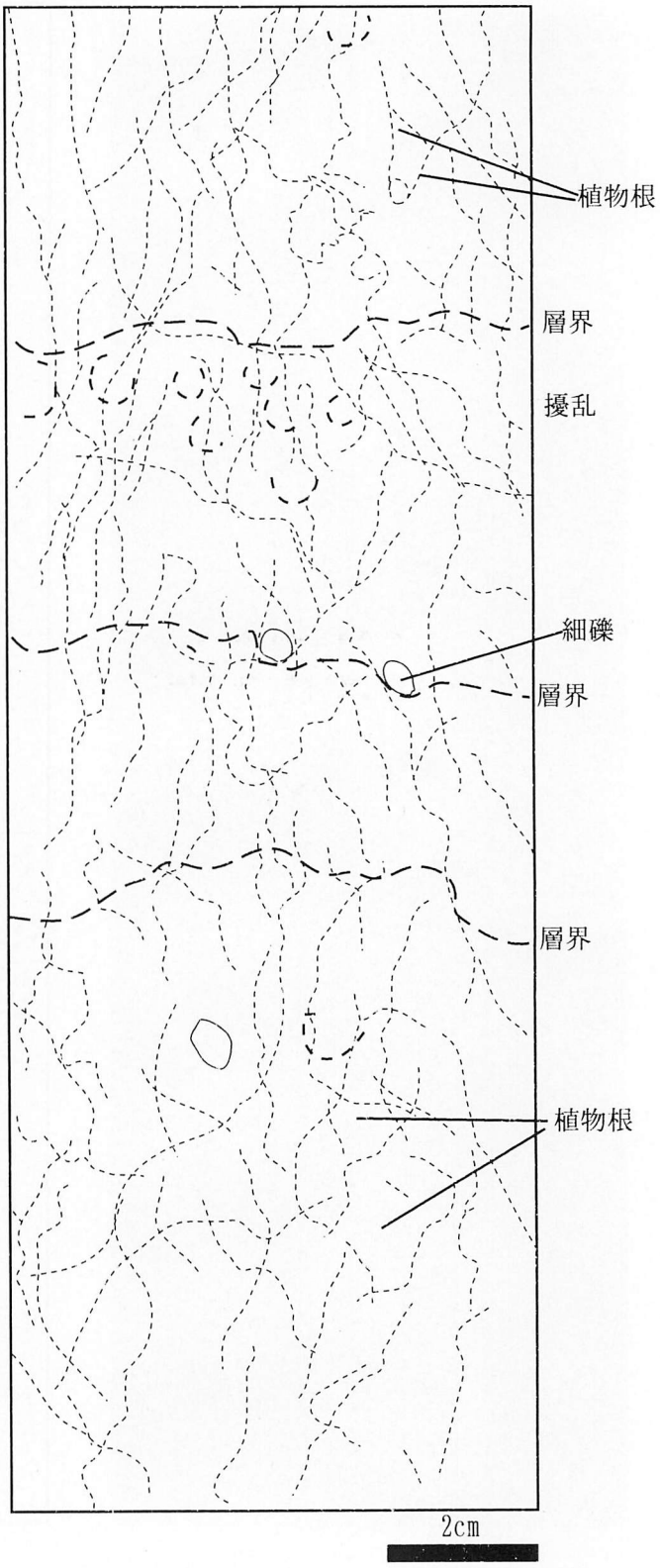
第１地点(試料番号１)

本試料には２層準に層界が認められる。この層界は現地調査時に確認されている層界に対比するものである。上部層は細粒砂からなる。部分的に擾乱作用の影響がおよび、上位層から連続する縦方向の植物根が認められる。中部層は細粒砂～シルト・粘土からなり、強い擾乱作用が及び、粒団状構造が発達する。粒団状構造の径は５mm前後と比較的揃っている。下部層は細粒砂からなり、上位層から連続する縦方向の植物根が認められる。

図版18

図版３　軟X線写真（２）

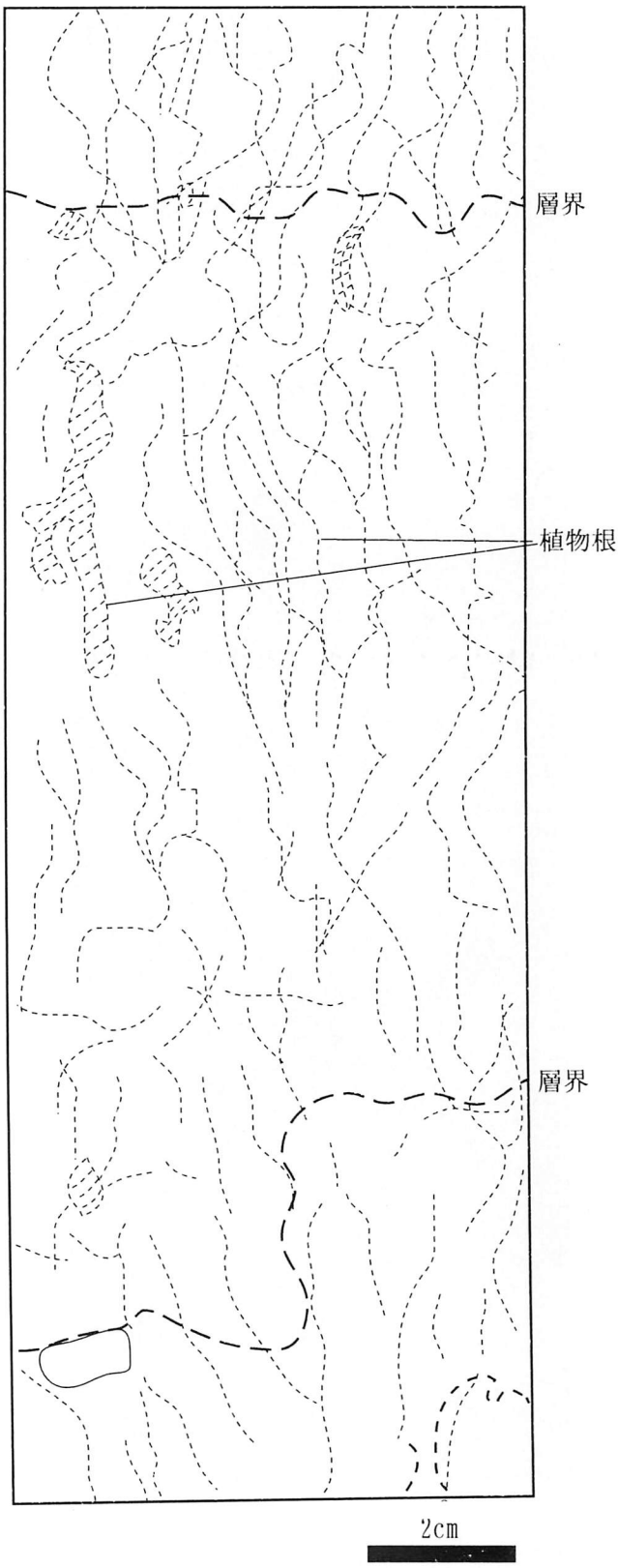




第１地点（試料番号３）

本試料には３層準に不明瞭な層界が認められる。いずれの層も細粒砂～シルト・粘土からなる。各層は下部で細粒砂が卓越し、上部でシルト・粘土の泥分を多く含む。また、上部は下部に比較して、擾乱作用の影響が及んでいる。

図版４　軟X線写真（３）

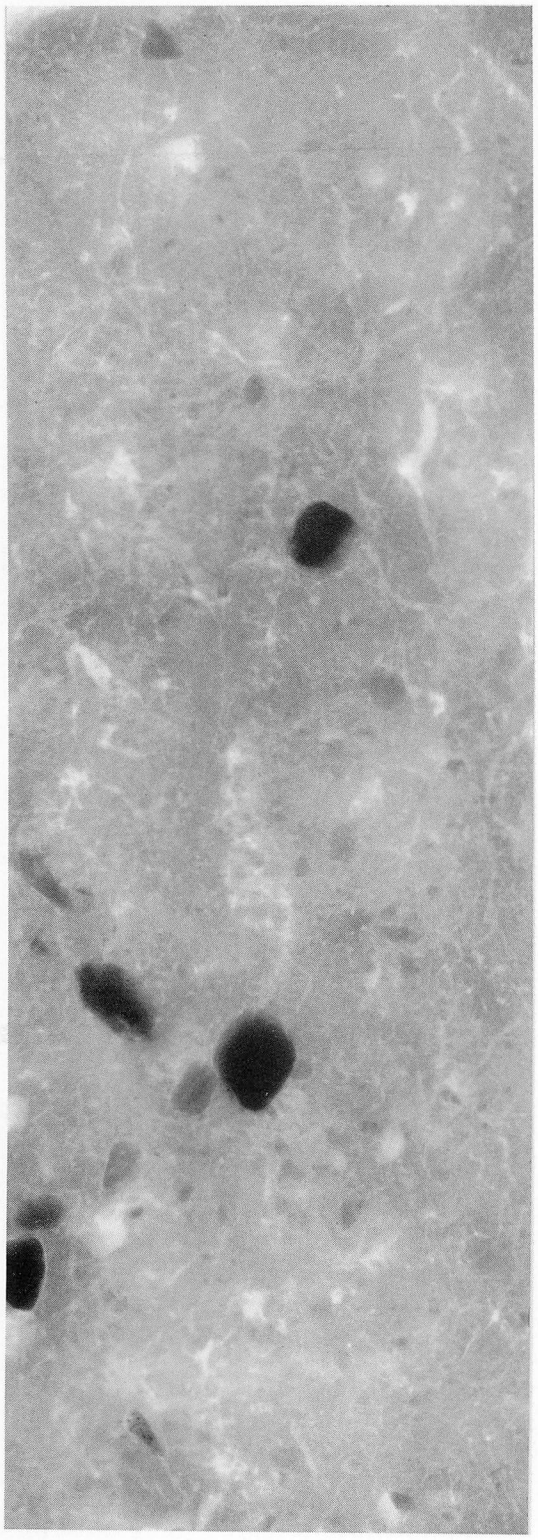


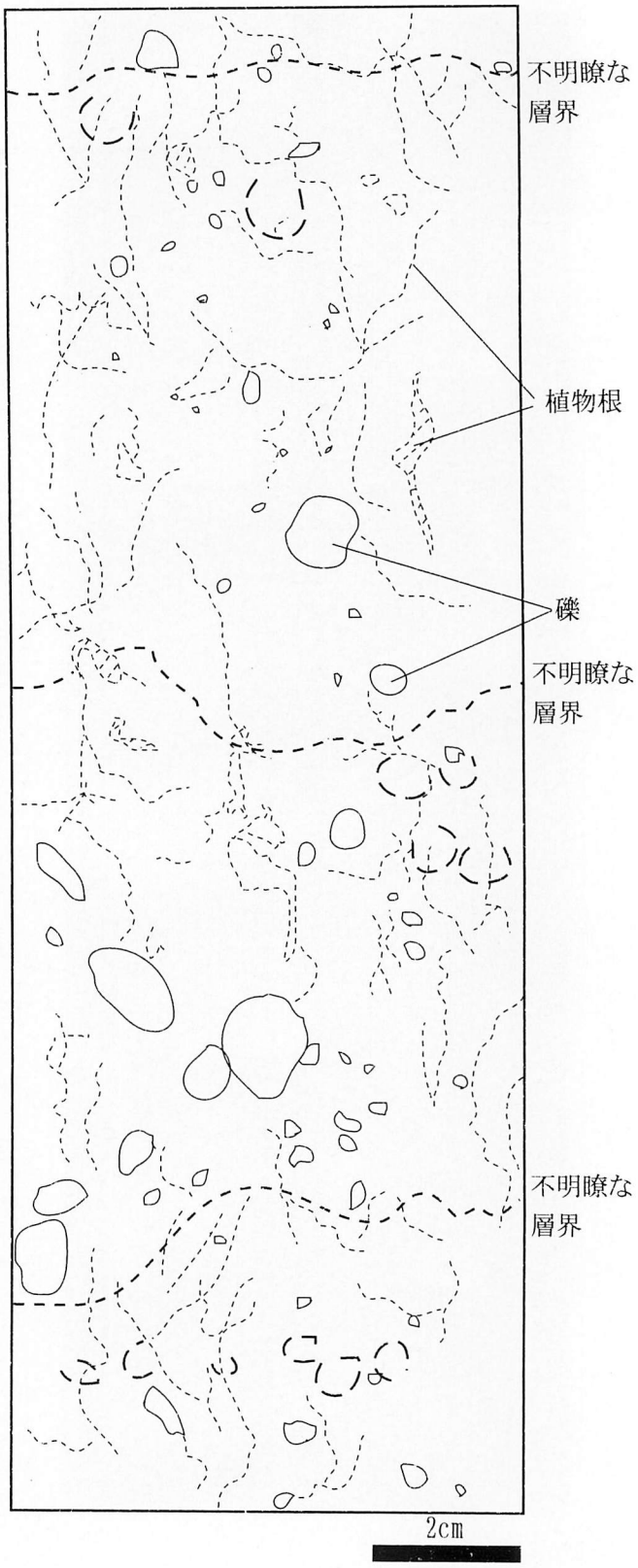
第１地点（試料番号４）

本試料には２層準に不明瞭な層界が認められる。上部の層はシルト・粘土混じり細粒砂、中部の層は下部が細粒砂・上部が砂粒砂～シルト、下部層は細礫・シルト混じり細粒砂からなる。全層準において縦方向の細かな植物根が卓越し、太い植物根も一部認められる。下部層は堆積後の擾乱作用に乱れている。

図版20

図版５　軟X線写真（４）

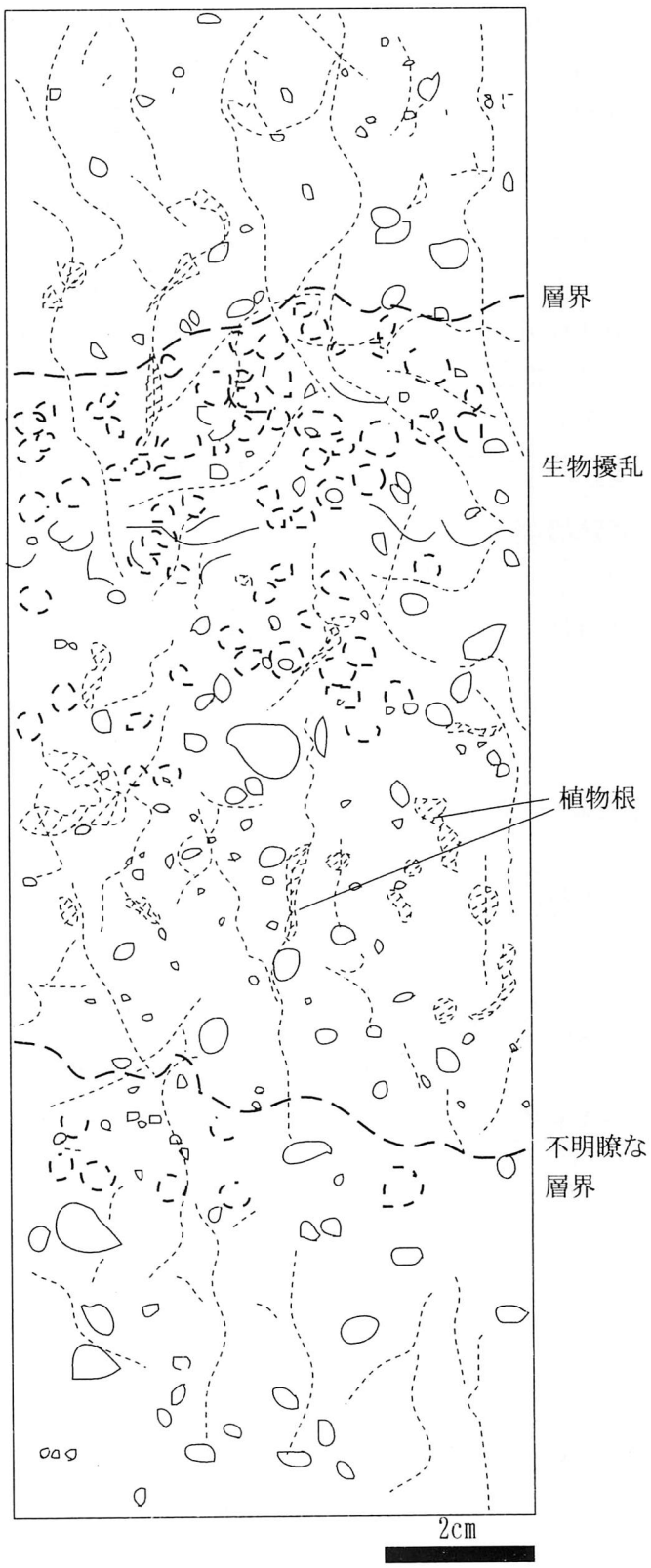




第１地点（試料番号５）

本試料には３層準に不明瞭な層界が認められる。砕屑物の粒径は下部から上部にかけて細粒化し、各層単位でも粒径が上部で細粒となる。また、各層上部層準は生物擾乱作用により構造が乱れる。全体に縦方向の植物根の痕跡が見られる。その形状は太いものが多い。

図版６　軟X線写真（５）



第１地点（試料番号６）

本試料には２層準に不明瞭な層界が認められる。砕屑物の粒径は細礫～細粒砂の砂礫からなり、マトリクスサポートである。縦・横方向の太い植物根が認と細い植物根がめられる。中部と下部層の上部は生物擾乱の影響が認められることから、当時の地表面となっていた可能性がある。

報告書概要

ふりがな	たていししたいせき
書名	立石下遺跡
副題	一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第189集
編著者名	米田明訓・田口明子・斉藤伸・保坂康夫
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省甲府工事事務所・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曽根923　〒400-0015　TEL055-266-3016
印刷所	横河グラフィックアーツ株式会社
印刷日・発行日	平成13年3月23日・平成13年3月30日

遺跡概要

遺跡名	立石下遺跡
所在地	山梨県中巨摩郡八田村野牛島字立石下2586-1外
地形図	25,000分の1　小笠原
位置	北緯35°39′40″　東経138°28′41″
市町村コード	19386
縄文・弥生時代	
遺物包含層	土器、石器
平安時代	
主な遺構	住居跡13基、掘立柱建物跡5基、溝状遺構1条
主な遺物	土師器、須恵器、三彩陶器、金属製品
平安時代以降	
主な遺構	溝状遺構15条、炭焼窯跡5基、土坑77基
調査期間	平成11年4月28日～12月22日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第189集

立　石　下　遺　跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日　平成13年3月23日
発行日　平成13年3月30日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　行　山梨県教育委員会
国土交通省甲府工事事務所
日本道路公団東京建設局
印　刷　横河グラフィックアーツ株式会社
甲府市高室町155番地　横河電機(株)甲府事業所内
TEL　055-243-0548
URL：http://www.yokogawa.co.jp/YGA/